

31. 唐崎城跡・尼崎学園古墳群 第1次調査

1. はじめに

尼崎学園古墳群は、1973（昭和48）年頃には周知された遺跡である。この古墳群6基のうち1基の埋葬施設は、石棚付両袖式横穴式石室で、石棚付横穴式石室は市内唯一の例である。また中世の城跡としても周知されている。発掘調査は今回が初めてである。

遺跡は、有馬川が武庫川に合流する西側に所在し、北に伸びる丘陵の突端部標高157m前後に位置する。

今回の調査地は、周知の遺跡範囲内である。平成24年8月と10月に事業に先立ち試掘調査を実施したところ、遺構、遺物が確認された。これにより事業計画の検討の結果、発掘調査の実施が必要となった。

なお当調査の成果は、平成25年度に「唐崎城跡・尼崎学園古墳群発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参照されたい。

2. 調査の概要

弥生時代の竪穴建物1棟、土坑、ピットなど、古墳時代の掘立柱建物5棟、竪穴建物6棟、箱式石棺2基、土坑、溝状遺構、ピットなどの遺構が検出された。調査範囲は、調査区配置図に示すとおりである。地区毎に遺物の取り上げなどを行なった。出土遺物は、弥



fig.193 調査地位置図 1:2,500

生土器、サヌカイト片、土師器、須恵器、砥石、鉄器、などである。出土量は、28ℓ 入コンテナに18箱であった。

調査の方法 調査は、試掘調査の結果に従い表土を重機で掘削し、それ以下を人力によって発掘調査を行なった。残土は運搬用トラックにて調査区西側の残土仮置き場に運搬した。また必要に応じてベルトコンベアを使用して調査の効率化をはかった。

基準点測量を行ない、またラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を実施した。

2月26日には、尼崎学園の幼児、児童、生徒及び職員に対し、計44名の参加を得て、調査成果の報告を現場で説明会として実施した。

基本層序 基本層序は、単純化して述べると上層から現代盛土、旧表土、茶褐色泥砂（遺物包含層）、黄褐色砂泥（遺構面、地山）となる。茶褐色泥砂層から土師器、須恵器などが出土した。

弥生時代の遺構として、竪穴建物SB05以外に6区北西で検出されたSK02があげられる。東西1.6m、南北1.1m、深さ0.4mの集石遺構である。石は最大で直径0.4m程で、これ以下の大きさの石が堆積していた。石材は花崗岩がそのほとんどを占め、その他砂岩やチャートなどを含む。平面形は、ほぼ長方形に観察されたが、完掘後は東西1.6m、南北1.1mの楕円形の掘形となった。遺構内からは、石のほかに弥生時代中期の壺型土器口頸部、底部が出土した。またSK02の南西約1mのところで、サヌカイト剥片が出土している。

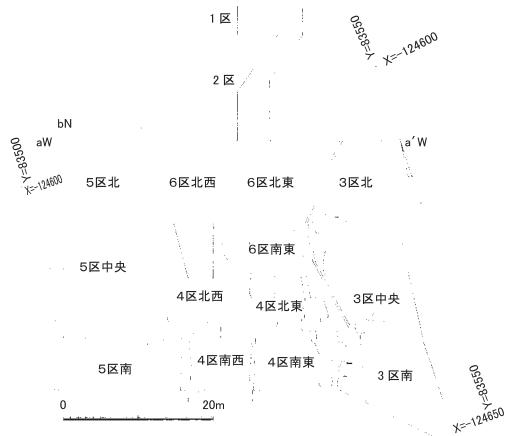


fig.194 調査地区割図

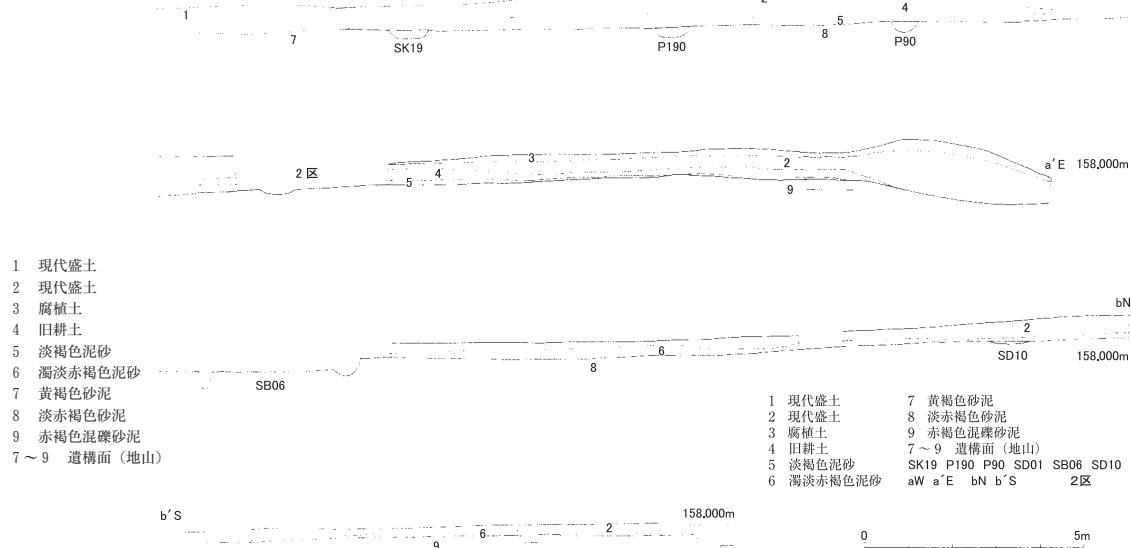


fig.195 調査区土層断面実測図

SK22は、4区南東で検出された土坑である。東西0.9m、南北0.6m、深さ0.25mの橢円形の土坑で、サヌカイト剥片と少量の弥生土器が出土した。切り合い関係と出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。その他弥生時代と考えられる遺構として、古墳時代の遺構とは明らかに異なる堆積土のピットが10箇所ほど検出された。

古墳時代の遺構として1区で、須恵器甕を土坑にすえた遺構SK01が検出された。北半と上面は後世に削りとられている。残存している遺構の規模は、東西0.8m、南北0.9m以上、深さ0.2mである。甕内から刀子片が1点出土している。

3区南の南端部では、須恵器甕片が集中して出土する箇所があった。遺構検出につとめたが、浅い凹みに遺物が集中していたようである。3号墳墳丘裾から3mほどの距離があり、墓前祭祀が行なわれた痕跡かと考えられたが、今後検討したい。

調査区の地形は、北東部に高く、南西に向かって下がっていく。SD02は、3区北から6区北東にかけて、東西約15mにわたって検出された幅0.4~1.1m、深さ0.1mの溝状遺構である。

SX05は、6区北西で検出された東西約8m、南北約2m、深さ0.2mほどの不定形な遺構である。両者とも北側が深く南に浅い遺構である。ともに古墳時代の土師器、須恵器が出土している。SD02、SX05は、地形を整形する目的の遺構と考えられる。

SB10の北側で、長径1.6m、短径0.5m、深さ0.5~1.1mの不定形な土坑が検出された。一部は搅乱によって損なわれている。土坑の底は、径0.5mほどでさらに0.6m深くなる遺構である。須恵器壺蓋、身や最下層には須恵器壺口縁部が出土した。他に土師器、須恵器が出土した。この遺構の東側と西側に径0.3m、深さ0.1m足らずの浅い焼ピット(P138・P203)が検出された。P138は、SB10東辺柱穴ラインにあたる。建物と土坑と焼ピットに関連性があるのか、今後の検討課題である。

4区南東と南西で箱式石棺を検出した。2基とも表土直下で検出され、遺構上面は削りとされていた。ST01は、4区南東で検出された東西1.7m、内法1.4m、南北1.1m、内法0.6m、深さ約0.3mの箱式石棺である。掘形規模は、東西2.5m、南北1.8m、深さ約0.3mである。掘形の東側一部は、搅乱坑と小土坑(SK14・SK15)によって損なわれていた。

東辺小口は、長軸0.4mほどの石材2個で構成する。西辺は、長軸0.4mほどの石材1個のみが残存しており、東辺と同様と考えられる。南辺は、東隅と西隅と考えられる石材が2個残存している。北辺は3個の石材から構成され、東端の石材のみ花崗岩で、残りの石材すべてが周辺に産する凝灰質砂岩である。主軸は、N43°Wで西へ傾く。

棺内には、落ち込んだと思われる石材が4個検出された。棺内東部には、菱形の扁平な石の上に土師器椀を2個並べたように検出された。中央には底面から0.1mほど浮いた状態で土師器椀1個が検出された。また南辺西隅部で須恵器小型提瓶が検出された。提瓶の把手部分は矮小化しており、円形の粘土を貼り付けただけのものである。

掘形内と棺内の土壤すべてを水洗し、玉類などの有無を確認する作業を行なったが、特に遺物は検出されなかった。

ST02は、4区南西で検出された棺底に石敷のある箱式石棺である。検出された石敷は東西1.8m、南北0.5mで、北辺の3石ほどが棺の立ち上がりを示すものと考えられる。北東の一部は、小土坑(SK11・SK12)によって損なわれていた。

残された石材の痕跡などから東西2m、南北0.4m以上の箱式石棺と推定される。主軸

は、N54° Wで西へ傾く。

2基とも5号墳墳丘裾から10m足らずの距離であり、古墳との関係性、時期差、位置関係など検討すべき課題が多くある。

3. まとめ

主な遺構について述べたが、種々の遺構、遺物が検出された。遺構、遺物の時期は大きく弥生時代と古墳時代に分けられる。

まず当初予測された中世の時期に属する遺構、遺物、特に唐崎城跡に関連するものが、現状ではほとんど無いと言ってよい状況である。今回の調査対象地には関連する箇所が含まれていなかったのであろうか。地形図から尼崎学園敷地の北側、東側には土壘状に読み取れる箇所がある。現地の地表観察からも土壘状に見える部分もある。尼崎学園造成時に地形の改変を受けたとはいえ、少なくとも弥生時代や古墳時代の遺構が存在する。またSX05やSD02は、古墳時代の地山整形遺構と考えられる。このことからも中世頃の遺構が検出されることは不可解である。今後検討を加えたい。

今回の調査対象地は、丘陵突端部が鞍部のようになった地形で、雑木林に囲まれた学園のグランドであった。比較的風の影響が少なくかつて集落が営まれた地点としては適地と考えられる。

古墳時代の各遺構の時期は、概ね古墳時代後期後半としておきたい。詳細については前述のとおり報告書を参照されたい。

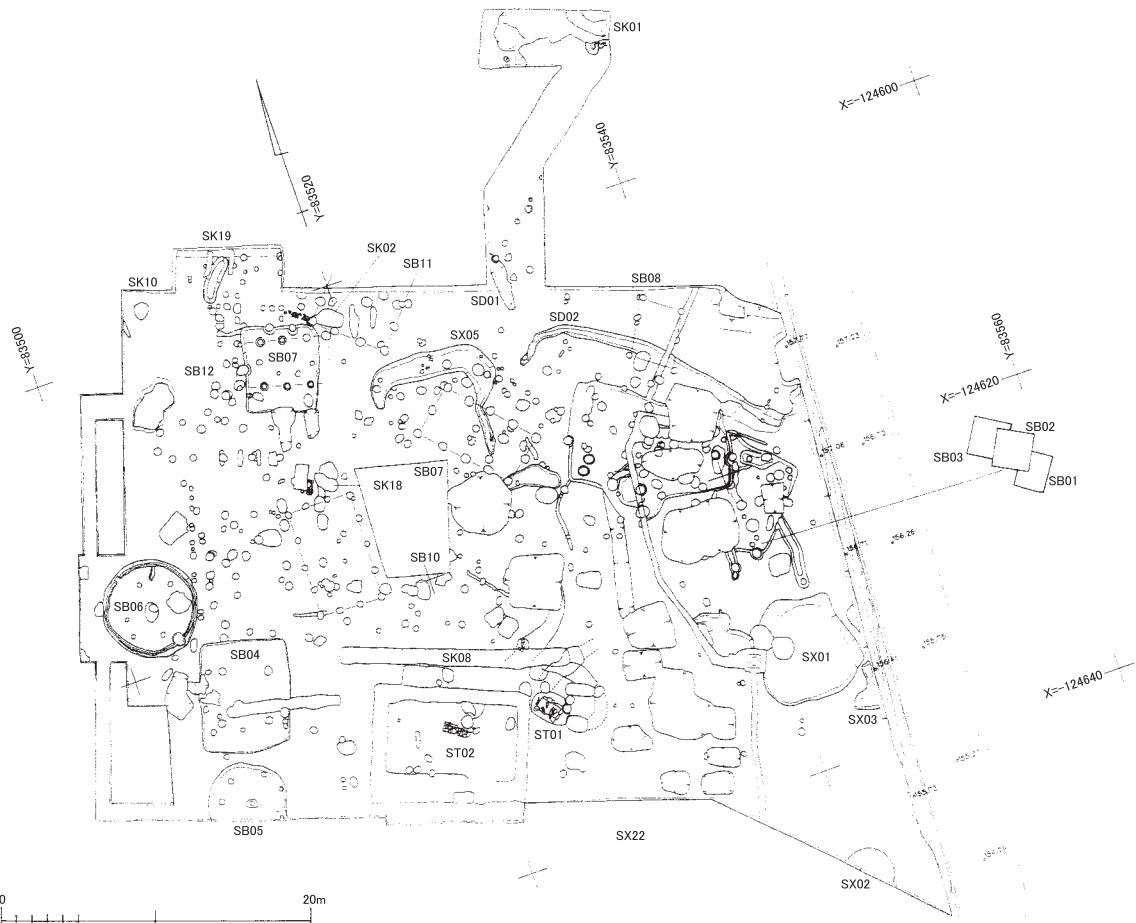


fig.196 調査区平面図

32. 小坂遺跡 第2次調査

1. はじめに

小坂遺跡は、武庫川の支流である八多川と有野川に挟まれた丘陵北端部に位置する。平成7年度に実施された尾根上の試掘調査によって、中世末期の防御施設（小坂砦）の他、縄文時代の土器や石器、古墳時代後期の古墳7基、中近世の墳墓群等が確認され、小坂遺跡と名付けられた。平成23年度の兵庫県教育委員会による第1次調査では、遺跡南端部で古墳時代の須恵器や時期不明の土坑、溝状遺構が検出されている。今回の調査は、丘陵の西斜面裾部の宅地造成に伴い実施した。

2. 調査概要

調査区北側を1区、南側を2区とした。調査区および斜面上方には、現状で拳大から人頭大の礫が多量に露出しており、集石墓等の遺構に伴う可能性が考えられた。礫の分布状況を図化するため、腐植土と明らかに原位置を保っていない礫を取り除いた

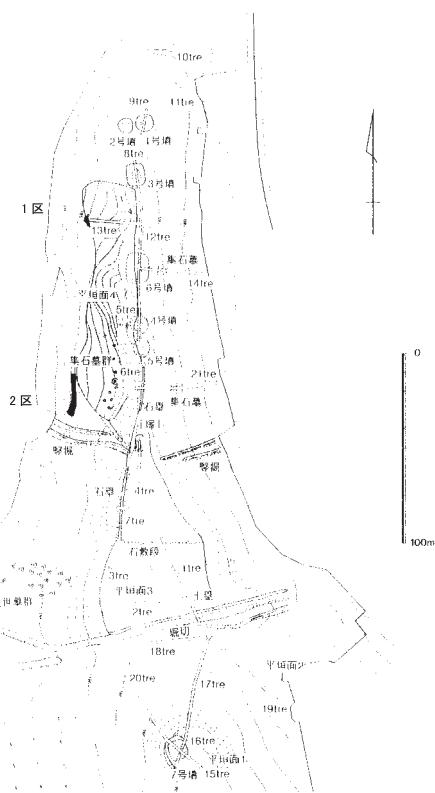


fig.197 調査範囲位置図（平成七年度試掘調査結果に加筆）

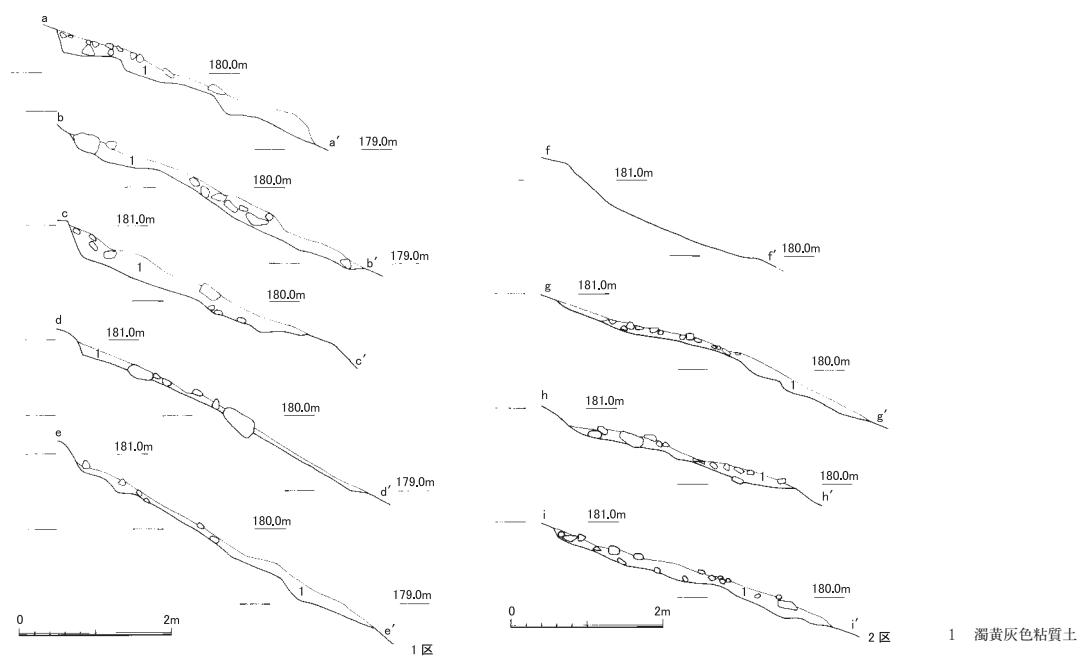


fig.198 調査区土層断面実測図

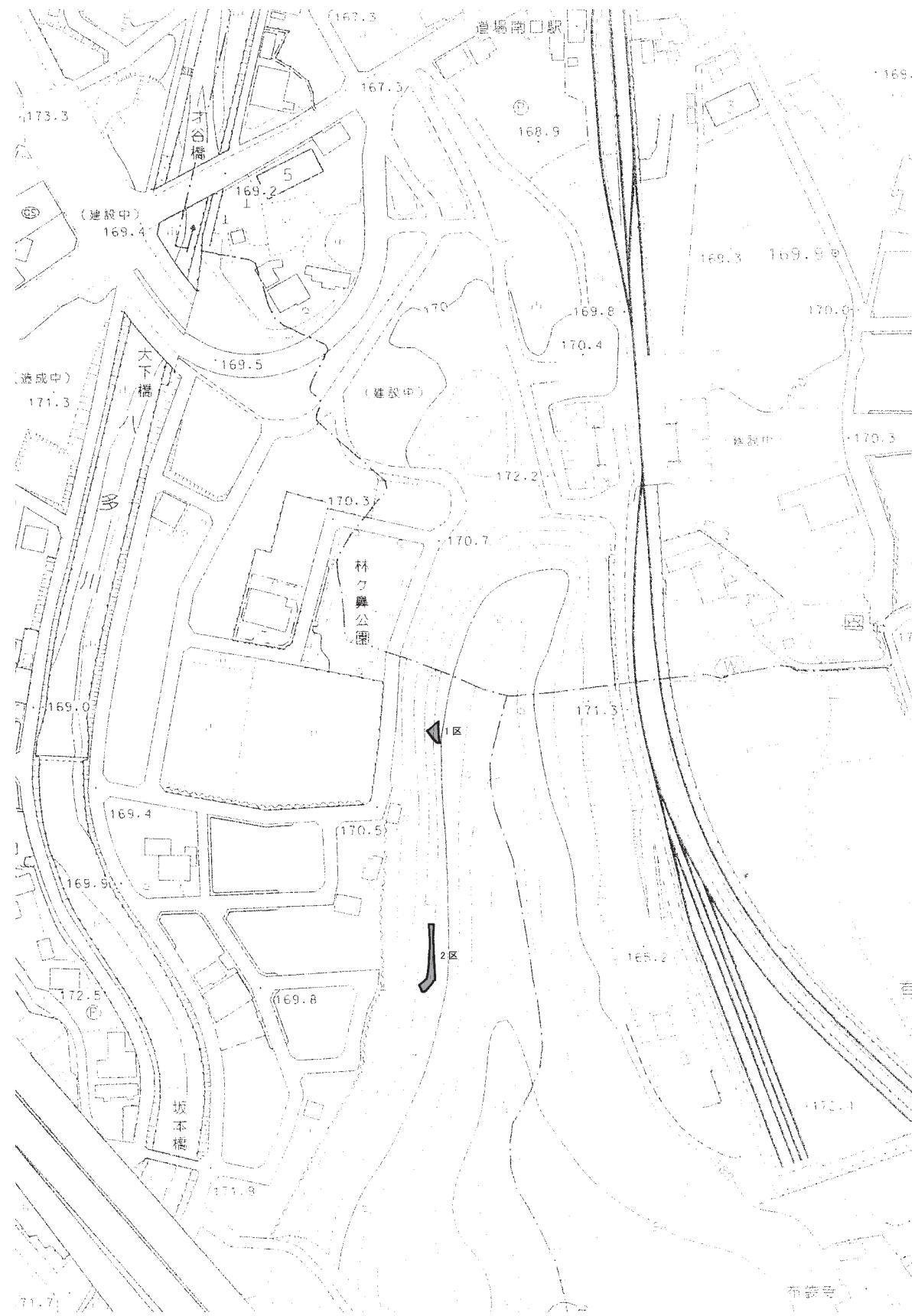


fig.199 調査地位置図 1:2,500

後、空中写真測量を実施した。その後断面観察を行ないながら2次堆積土を除去し、旧地形及び遺構検出を行なった。

1区 調査区全域で礫の分布が見られたが、群としての纏まりは確認できなかった。大半の礫が流土上及び流土内に存在し、原位置を保つ礫はごく少数であった。流土中より11世紀後半の須恵器杯の一部が出土した。

溝状地形 磯および流土を除去した結果、北端部で溝状に窪む地形を確認した。試掘調査で、隣接する斜面上部で集石が確認されており、この窪みが集石遺構の一部である可能性が考えられる。しかし、底面を人工的に整形した状況は確認できず、詳細は不明である。遺物の出土はなかった。

2区 北半部は礫の分布が少なく、南半部で2箇所の集積を確認した。土層の堆積状況から、1区と同様、大半の礫は流土上及び流土内に存在すると確認した。

礫群1 調査区の中央部で、南北2.7m、東西2.2mの範囲で拳大から人頭大の礫の集積が見られた。大半の礫は流土内からの出土で、斜面上方から2次堆積したものと考えられる。中世の須恵器壺の破片が1点出土した。

礫群2 磕群1の南側（土層断面H・I付近）で、南北（尾根方向）4.5m、東西3.3m以上の範囲で拳大から人頭大の礫の集積が見られた。磕群1と同様、大半の礫は斜面上方からの転落したものと考えられ、人為的に礫を集積した痕跡は確認できなかった。

磯および流土を除去した結果、溝状に窪む地形が確認された。1区北端部で検出した溝状地形と同様、集石遺構の可能性があるが、底部の流失が著しく、詳細は不明である。

土坑 調査区中央部で、斜面方向に対して垂直方向に長辺を持つ長方形の土坑を1基検出した。長辺0.7m、短辺0.5m、深さ約0.4mを測り、平坦な底部を持つ。埋土は人為的に埋めた状況が確認できるが、遺物は出土しなかつたため、所属時期と用途は不明である。

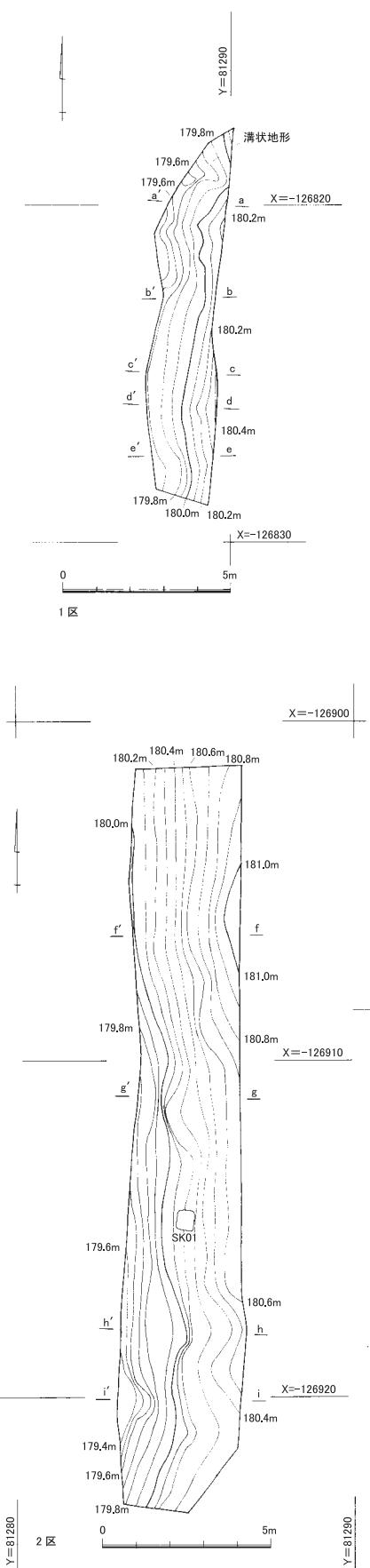


fig.200 遺構面地形図

3. まとめ

今回の調査では、遺構、遺物の検出は僅かであった。しかし、数箇所確認された溝状地形は、本来は集石墓等の遺構が存在し、土壤の流失により溝状になった可能性を残す。丘陵を構成する土壤には礫が含まれず、今回検出された礫は人為的に運ばれたものであり、調査区上方には多くの集石遺構が存在すると考えられる。

- 1 濁黄茶色粘質土
- 2 濁黄茶色粘質土+淡灰色粘質土
- 3 淡灰色粘質土
- 4 明黄色粘質土

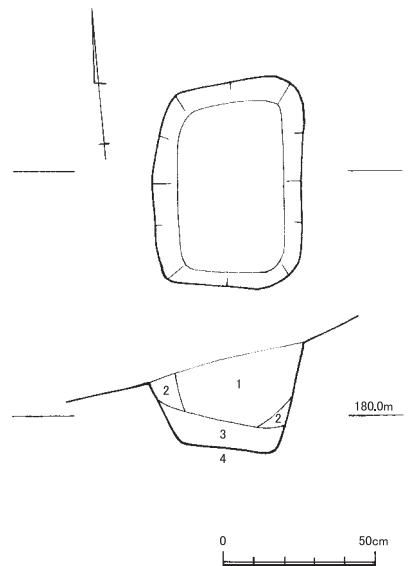


fig.201 SK01平・断面図



fig.202 1区調査状況



fig.203 SK01検出状況

33. 山田・中遺跡 試掘調査

1. はじめに

山田・中遺跡は、北区山田町に所在し、六甲山地と帝釈山地を水源として東から西へ流れれる山田川の南河岸段丘上に立地している。

昭和58年に今回の調査対象地に隣接する山田小学校内において、校舎立替工事に伴って、発掘調査を実施したことを端緒として、県道築造工事などに伴って数次の調査を実施している。これまでの調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物、古墳時代後期の竪穴建物、7世紀中頃の竪穴建物や平安時代末～室町時代の掘立柱建物などが確認されている。

2. 調査の概要

今回の試掘調査は、公園建設とそれに伴う進入道路予定地に対して、遺跡の有無を確認するために試掘調査を行なった。試掘調査は、2 m四方の試掘坑を各調査対象箇所に設置し、耕土を掘削し、それから下層を確認することとした。

なお、埋め戻しの際には、下層の埋め戻しを終了してから耕土の埋め戻しを実施しており、耕土を下層と混ざらないように工夫している。

基本層序では、耕土直下が黄灰色シルトの床土である。水田は数度のかさ上げが行なわれたようで、分厚い床土の層が数枚存在する。その床土の下層では礫層の地山となる。

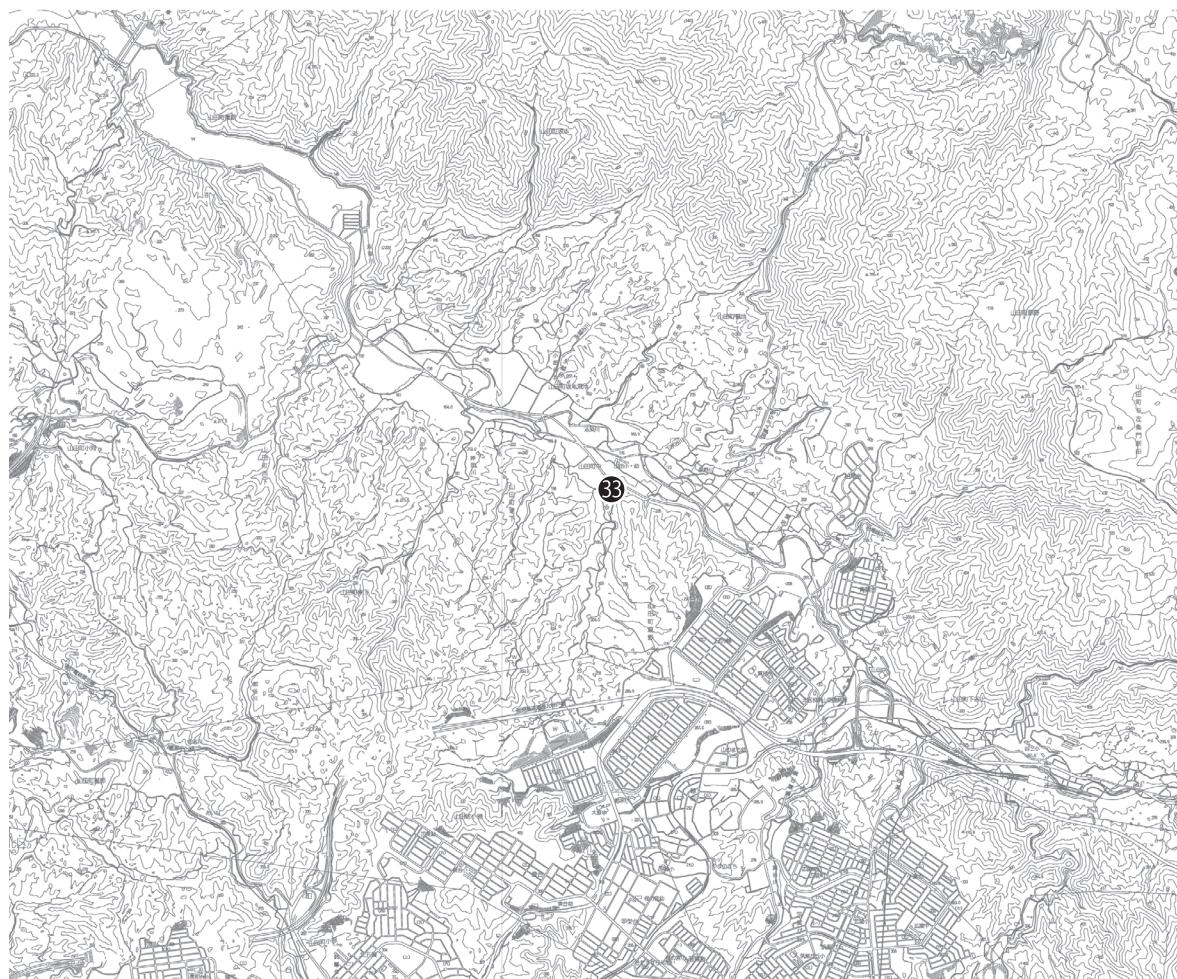


fig.204 調査地位置図（1）1：50,000

T.P1 耕土下に盛土があり、その下層に旧耕土と旧床土があり、その下に灰褐色シルトである。遺物等は出土しなかった。

T.P2 耕土・床土の下層に淡黄灰色細砂があり、その下層が砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P3 耕土下層が淡青灰色シルトで、さらにその下層には黄灰色シルトで、その下層が暗青灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P4 耕土の下層が淡青灰色シルトで、さらに下層には暗黄褐色シルトがある。その下層は黄灰色砂礫の地山である。遺物等は出土しなかった。

T.P5 耕土・床土直下で、暗青灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

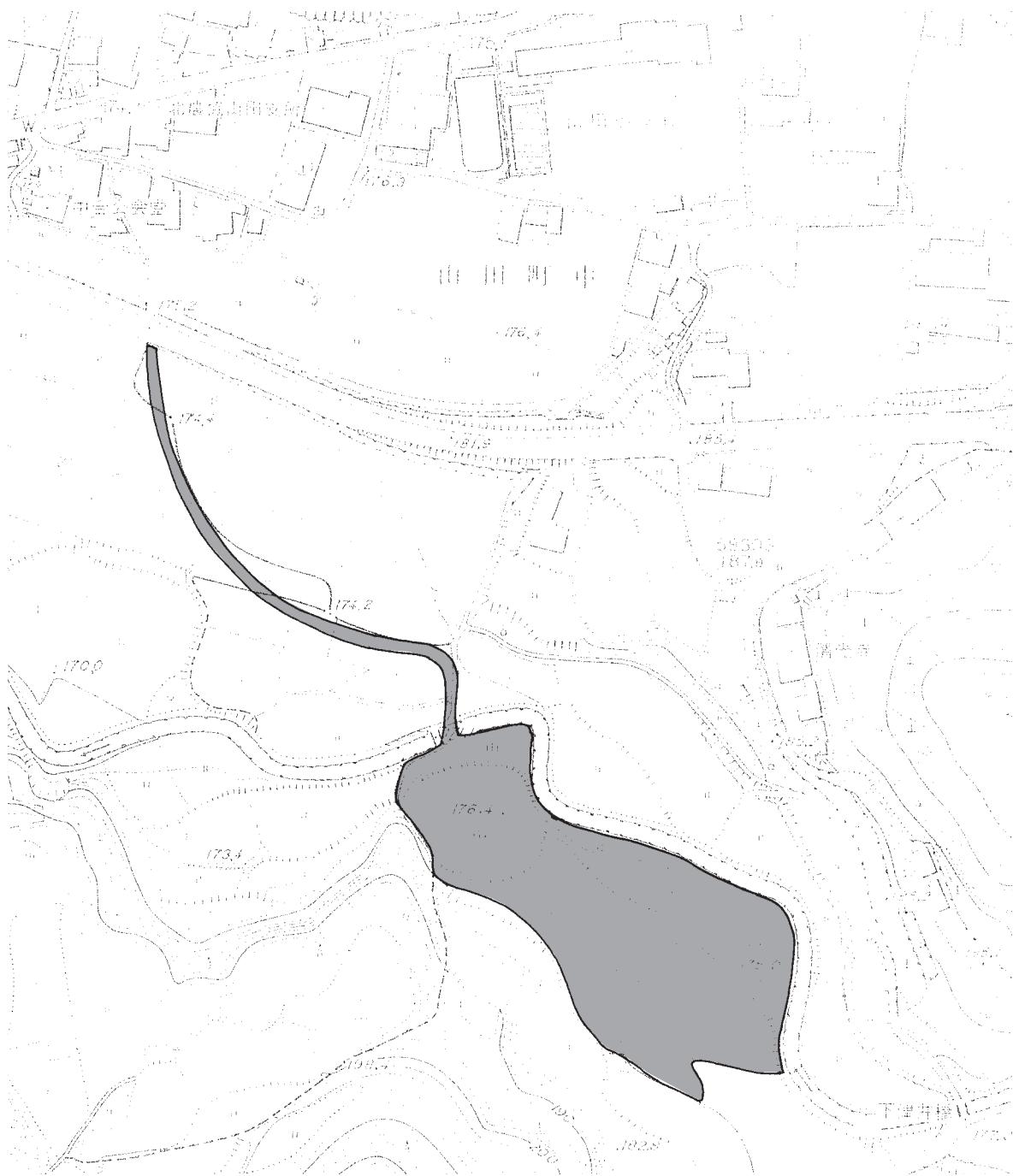
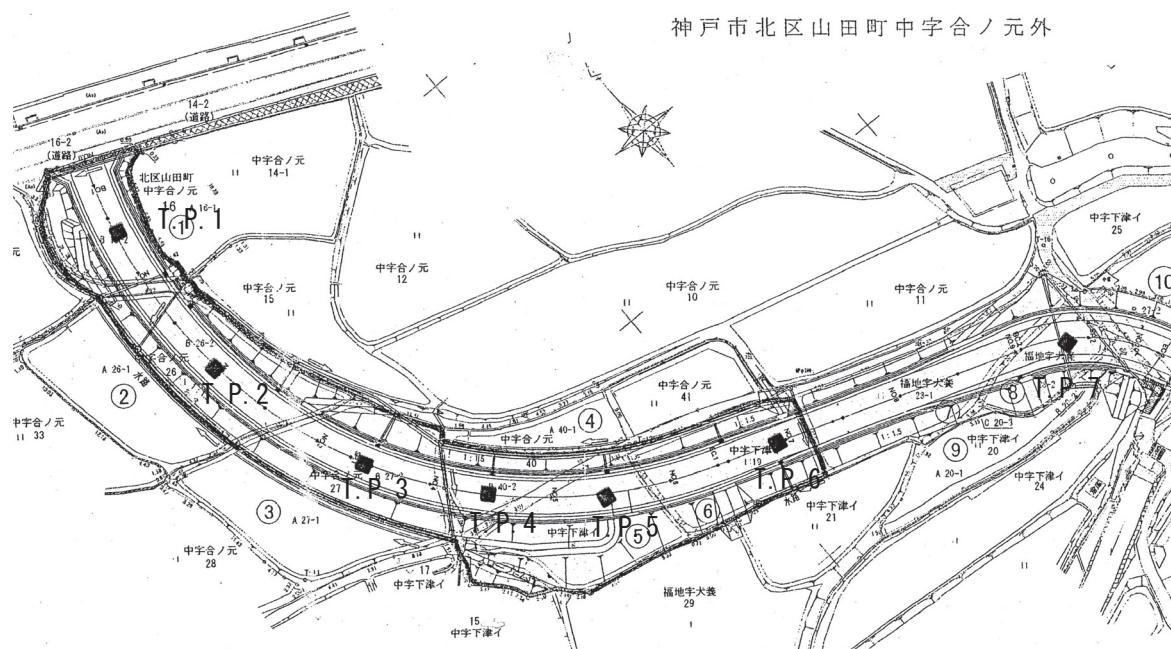
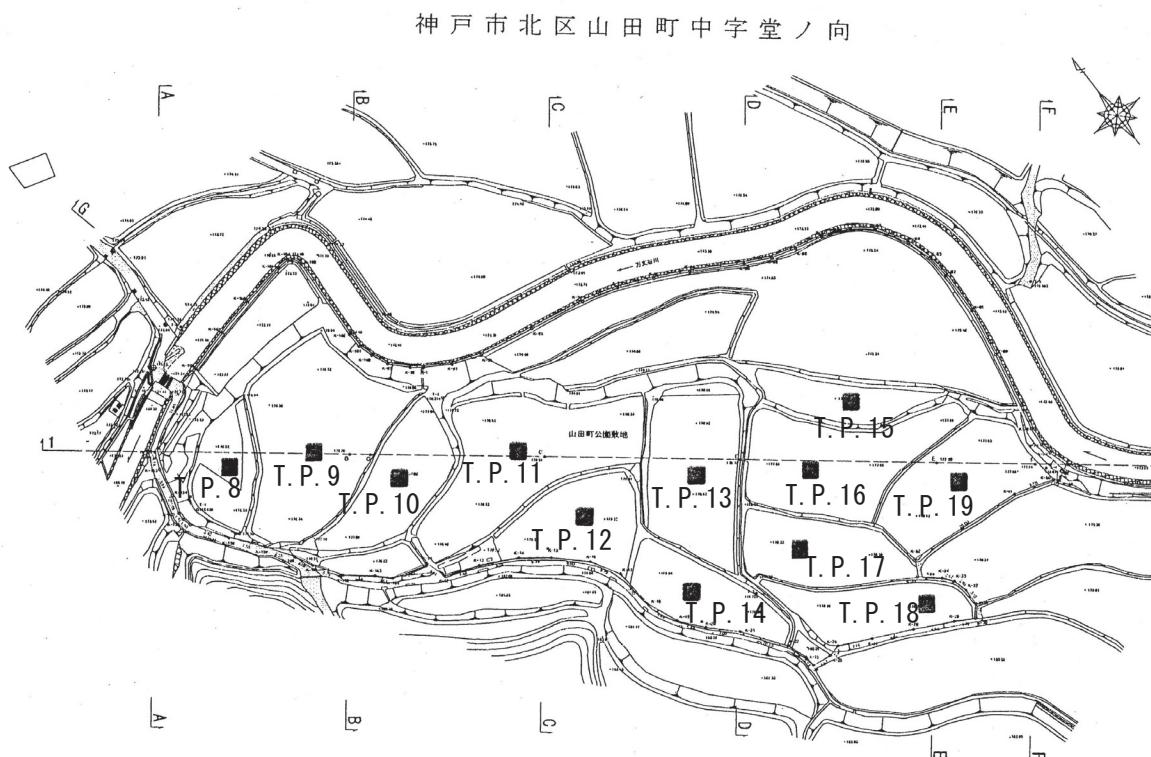


fig.205 調査地位置図（2）1:2,500



試掘坑配置図A



試掘坑配置図B

fig.206 試掘坑配置図

T.P6 耕土・旧耕土・旧床土の直下で、淡黄褐色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P7 耕土・旧耕土・旧床土の直下で、灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

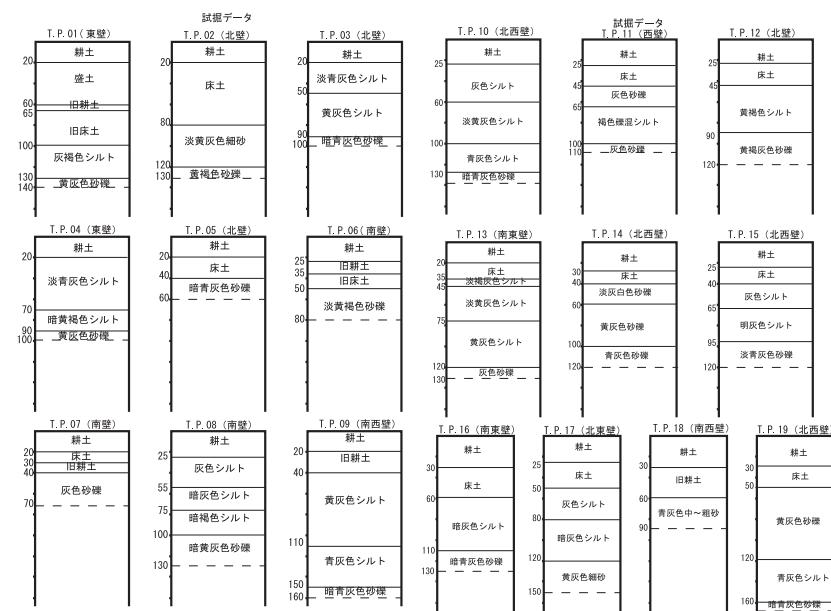


fig.207 試掘坑断面図

T.P10 耕土、灰色シルト、淡黄灰色シルト、青灰色シルト、暗青灰色砂礫の順の層序である。遺物等は出土しなかった。

T.P11 耕土・床土の下層に、灰色砂礫、褐色礫混シルトがあり、その下層が灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P12 耕土・床土の下層が黄褐色シルトでその下層が黄褐灰色砂礫の地山である。遺物等は出土しなかった。

T.P13 耕土・床土の下層に、淡褐灰色シルト、淡黄灰色シルト、黄灰色シルトがあり、その下層が灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P14 耕土・床土の下層に、淡灰白色砂礫、黄灰色礫混があり、その下層が青灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P15 耕土・床土の下層に、灰色シルト、明灰色シルトがあり、その下層が淡青灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P16 耕土・床土の下層が暗灰色シルトでその下層が暗青灰色砂礫の地山である。遺物等は出土しなかった。

T.P17 耕土・床土の下層に、灰色シルト、暗灰色シルトがあり、その下層が黄灰色細砂の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P18 耕土・床土直下で青灰色中～粗砂の地山となる。遺物等は出土しなかった。

T.P19 耕土・床土の下層に、黄灰色砂礫、青灰色シルトがあり、その下層が暗青灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

上記のように対象区域に19箇所の試掘坑を設置し、試掘調査を行なったが、各試掘坑とともに、遺構・遺物は確認できなかった。

3. まとめ

今回の試掘調査では、遺構・遺物共に確認できなかった。

周囲は、河岸段丘上に位置しており、幾度かの洪水による削平と水田のかさ上げの繰り返しにより、本来の地層が失われ、遺構・遺物等が確認できなかったものと考えられる。

T.P8 耕土の下層が灰色シルト、暗灰色シルト、暗褐色シルトの順の層位となっており、その下層に暗黄灰色砂礫の地山がある。遺物等は出土しなかった。

T.P9 耕土・旧耕土の下層に黄灰色シルト、青灰色シルトがあり、その下層が暗青灰色砂礫の地山となる。遺物等は出土しなかった。

34-1. 大橋町東遺跡 第3次調査

1. はじめに

大橋町東遺跡は新長田駅南地区市街地再開発事業に伴う試掘調査により、平成19年度に存在が確認された。平成20・21年度に第1・2次調査が実施され、弥生時代～中世の集落遺跡と確認されている。今回の調査地点は第2次調査地点と現道をはさんで北西隣である。

2. 調査概要

基本層序 近現代の整地土の下は耕作土、旧耕作土が2層、遺物包含層、遺構面基盤層と続く。第1遺構面は旧耕作土の淡灰褐色砂混じりシルト下面、遺物包含層の暗茶褐色砂混じりシルト上面であるが、調査区の中部から西部には遺物包含層が存在しない部分があり、第2遺構面と同一面で検出された。第2遺構面は基盤層の暗黄色粘質土もしくは茶褐色砂質土上面である。基盤層の上部には微量の弥生土器やサヌカイト片が含まれていたが、断ち割りを実施した結果下層に遺構面は存在しなかった。

第1遺構面 耕作溝が調査区全体で確認され、調査区西方に行くにつれて急激に少なくなる。またピットは掘立柱建物を構成するようにまとまらなかった。

耕作溝は北西～南東方向のものがほとんどである。調査区東部では同方向の多数の溝の切り合いが確認できる一方、調査区西部では芯々1.8mから2.2m間隔で並行する耕作溝のみとなり、切り合うものがなくなる。中部から西部ではこれらと直交する鋤溝も同時に検出されたが、切り合い関係からほとんどが北西～南東方向のものよりも古いと確認できる。

第2遺構面 第2次調査区に近い東部ではピット・耕作溝などの遺構が存在したが、西方



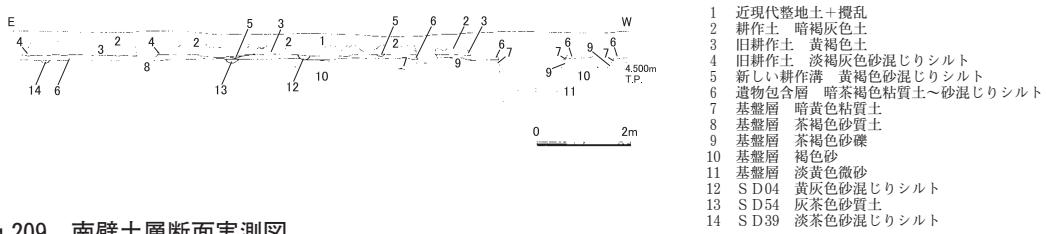


fig.209 南壁土層断面実測図

に行くにしたがい減少する。耕作溝は南西～北東のものが多いが、方向が一致せずに振れが大きかった。その他調査区の南辺沿いで竪穴住居の周壁溝の可能性が高い、方形に巡る溝を1条、西辺近くで掘立柱建物を構成する可能性が高い柱穴が検出された。調査区東部で検出されたピットには柱痕を持つものも含まれており、掘立柱建物あるいは塀の一部の可能性もあるが、攪乱が多いためまとまらなかった。

SB01 調査区の西辺南半で検出された。位置や深さ、埋土の類似性から西隣の第4次調査で検出された掘立柱建物の東廂である可能性が高くなった。ただ隣接する柱穴はすべて攪乱で破壊され、確認されたのはこの1基のみである。埋土は柱痕が褐灰色砂混じりシルト、掘形が暗褐灰色砂混じりシルトと淡黄灰色微砂の混和である。

SB02 調査区の南辺西半で検出された。現状で一辺4.6m以上、ほぼ90°に屈曲して調査区外に続く。第2次調査で方形竪穴住居が2棟検出されており、同様に方形の竪穴住居である可能性が高い。内部に深いピットが2基検出されており、竪穴住居の柱穴で、立替に伴い掘削されたと判断される。埋土は溝が暗茶灰色シルト混褐灰色砂混じりシルト、ピットが淡茶灰色砂質土である。

3.まとめ

大橋町東遺跡は北西側近隣の若松町東遺跡と同様遺物の出土量は乏しい。しかし若松町東遺跡とは時代構成が異なり、中世・平安時代・古墳時代・弥生時代の遺跡である。今回の調査では調査区西方に進むにつれて遺構数が減少し、遺跡の中心から外れつつあることが想定された。遺跡の中心は第1・2次調査地点一帯で、比較的小規模な遺跡なのだろう。

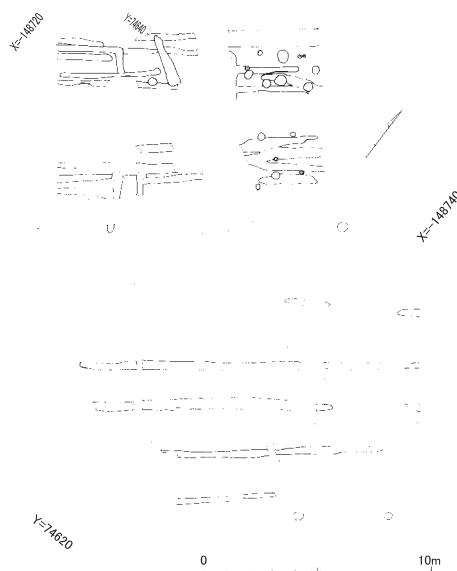


fig.210 第1遺構面平面図

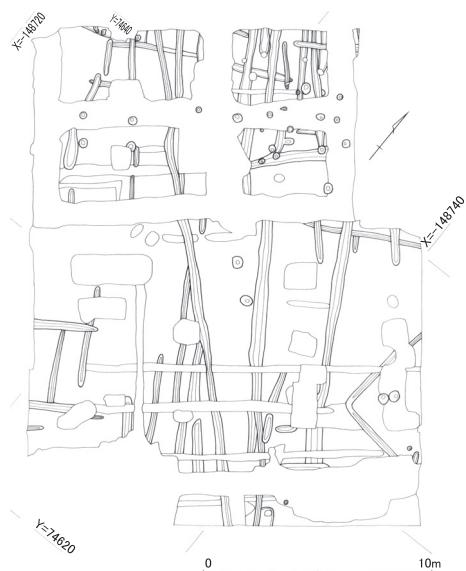


fig.211 第2遺構面平面図

34-2.~4. 大橋町東遺跡 第4次調査

1. 4-1次調査

基本層序 基本的な層序は近現代の整地土の下は耕作土、旧耕作土、遺物包含層、遺構面基盤層と続く。遺構面は基盤層の灰茶色土上面である。基盤層の上部には微量の弥生土器やサヌカイト片が含まれていたが、攪乱部分の断面観察ではさらに下層には遺構面は存在しないと判断された。

検出遺構 掘立柱建物1棟、溝2条、土坑1基、落ち込み3基の他、ピット31基と多数の耕作溝が検出された。

SB01 調査区の西辺際南半で検出された掘立柱建物である。現状で桁行3間(6.8m)×梁間2間以上(3.7m以上)であるが、西側が調査区外に続くため全体の規模は不明であり、桁行と梁間の方向が入れ替わる可能性も残る。柱穴は直径約0.3m、深さ0.4~0.5mで、基盤層が粗砂になる柱穴には根石が置かれていた。埋土は柱痕が灰茶色砂混じりシルト、掘形が淡黄色シルト・灰茶色シルト・茶色砂混じりシルトの混和したものである。平安時代の土師器が出土した。また東隣の第3次調査区で、位置や深さ、柱痕を持つ埋土の類似性からこの掘立柱建物の東廂の柱穴である可能性が高い柱穴が1基存在する。ただ隣接する柱穴はすべて攪乱で破壊されているため、確認されたのはこの柱穴1基のみである。

SD01 調査区中央をほぼ南北方向に貫く状態で検出された溝である。調査区のほぼ中央で東に約30°屈曲する。調査区東端は攪乱で破壊されているが、調査区外に続く公算が高く、また調査区西端は調査区外に続いている。現状で長さ27.0m、幅0.4~0.5m、深さ約0.3mである。埋土は場所により2~3層に分層でき、2層の部分は上から暗灰茶色粘質土・灰茶色粘質土で、3層の部分は上から暗茶色粘質土・暗灰茶色粘質土・灰茶色粘質土である。切り合い関係から後述する耕作溝群より古いことがわかる。古墳時代の須恵器が出土した。

SD02 調査区中央のSD01が屈曲する部分からを派生する溝であるが、深さや埋土から01と区別できる。調査区西端は調査区外に続いており、現状で長さ10.8m、幅0.3~0.4m、深さ約0.2mである。埋土は暗灰茶色粘質土である。出土した遺物は極めて少ないが、SD01と同じ古墳時代と推定できる。

SK01 逆「L」字形の調査区の屈曲部付近で検出された平面楕円形の土坑である。東半が攪乱で破壊されているが、現状で長径約0.5m、深さ約0.1m、埋土は暗茶色砂混じり粘質土である。遺物は出土しなかった。

SX01 調査区西端中央で検出された平面不整円形の浅い落ち込みである。南半が攪乱で破壊され、西端が調査区外に続くため全体の大きさは不明であるが、直径2.4m以上、深さ約0.15m、埋土は茶灰色砂質土である。弥生土器の小片が出土した。

SX02 調査区北辺東寄で検出された浅い落ち込みである。大半が攪乱で破壊されているため正確な形状や深さは不明である。埋土は黒灰色シルトで、遺物は出土しなかった。

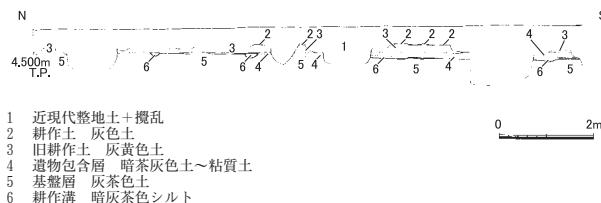


fig.212 東壁北半土層断面実測図

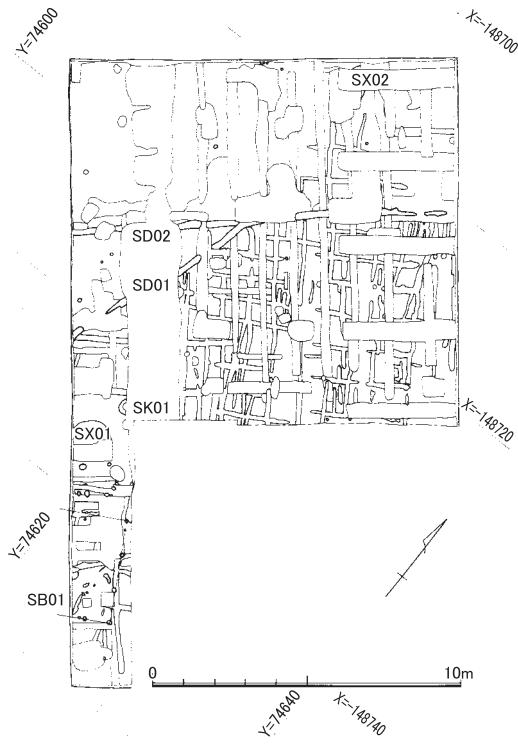


fig.213 調査区平面図



fig.214 調査地全景（西から）



fig.215 4－1次 SX01・SK01検出状況（南東から）

SX03 調査区の突出部分、SB01柱穴4の横で検出された不整形の浅い落ち込みである。長さ0.7m、幅0.3m、深さ約0.1mで、埋土は灰褐色シルトである。土師器小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

ピット 合計31基検出された。調査区の西端南半で比較的まとまった状態で検出されたが、それ以外は調査区内に少しづつ散在している。明確な柱痕を持つものもあったが、建物としてはまとまらなかった。

耕作溝群 調査区北西部を除いてほぼ全面で検出された小溝群であるが、調査区北西部は遺物包含層も残存しない位にかなり削平が進んでいるため、かつては全域に存在していたと推定できる。かつての条里地割の方向を反映する周辺一帯の敷地方向からわずかに北に対して東に溝の方向が振っている。東西方向・南北方向両方の溝があって両者に切り合い関係はなく、溝と溝の間が方形の島状になっているが、南北方向の溝は分岐するものがある。調査区中央で東西方向の溝が連続して途切れる部分があり、かつてその部分に畦畔が存在していた可能性が高い。遺物の出土量は乏しいが、飛鳥時代の須恵器が出土した。またSD01との切り合い関係もそれを裏付ける。

2. 小結

大橋町東遺跡と北西側近隣の若松町東遺跡は近年から調査が始まった遺跡で、ともに遺物の出土量は乏しい。しかし出土遺物の検討によって大橋町東遺跡は若松町東遺跡とは遺跡の時代構成が異なっており、中世・平安時代・古墳時代・弥生時代の遺跡であることが明らかになってきて

いる。今回の調査は平安時代・飛鳥時代・古墳時代・弥生時代の遺構や遺物が確認されており、遺跡のひろがりが確認できる。今回の調査では耕作溝を除けば遺構の数は少ないものの、調査区の西端を越えて溝や掘立柱建物棟が続いていることが確認された。遺跡の中心から外れつつあると推定されるが、遺跡の端ではないことが明らかとなった。遺跡の中心は第1・2次調査地点一帯であることは調査成果から明らかであるが、さらなる近隣での調査成果の集積が期待される。

3. 4-2次調査

基本層序 現地表面は、およそ T.P.5.1mである。現地表から約0.5~0.6mはアスファルト舗装および造成土、攪乱土である。その下層には、灰色粘質土の旧耕作土（1層）、黄灰色粘質土の床土（2層）がそれぞれ約0.1mずつ堆積し、その下層に黒褐色粘質土の旧耕作土（3層）が0.2~0.4m堆積する。3層は、上層がやや粘性の強い暗黒褐色粘質土（3a層）、下層は黒褐色粘質土（3b層）で鋤溝の埋土である。旧耕作土の下層は基盤層の堆積となる。部分的に明黒灰色粘質土（4層）や褐色礫混じり粗砂（5層）が堆積するが、大部分は灰黃褐色粘土（6層）である。この6層上面（部分的に4、5層上面）で遺構検出を行なった。現地表面からの深さ0.7m、標高はT.P.4.4m付近である。



fig.216 調査地全景 (南から)



fig.217 4-1次SB01検出状況 (南東から)

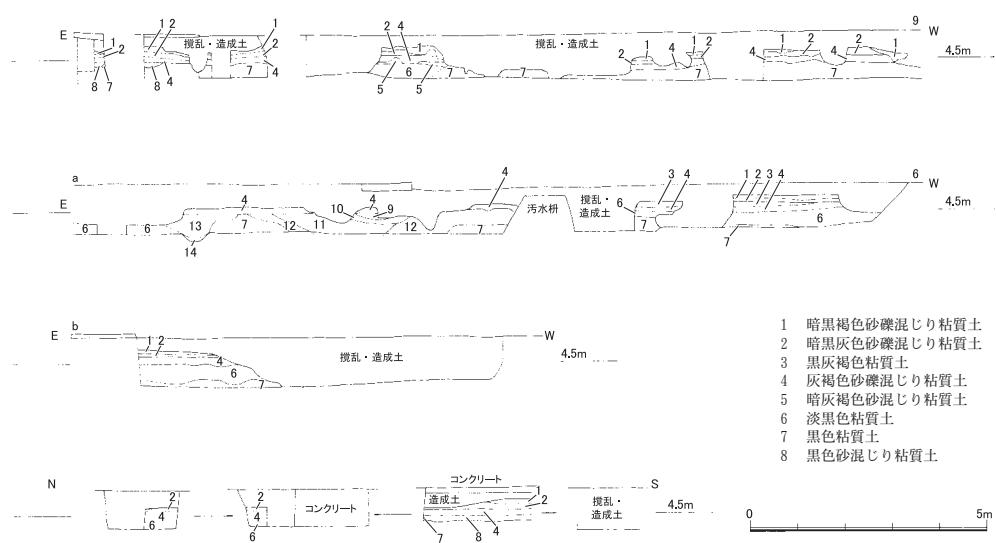


fig.218 南壁・東壁土層断面実測図

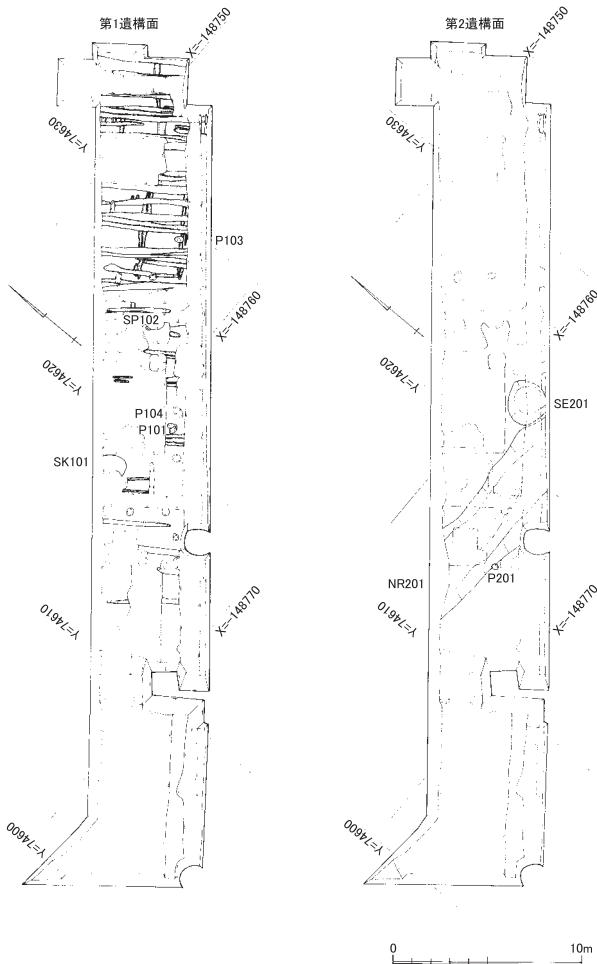


fig.219 調査区平面図

上層遺構 検出遺構は、土坑1基、ピット4基、溝である。土坑SK101は径1.2m以上、検出面からの深さは0.8mを測る。埋土は砂を含む粘質土で、半分ほど埋まったところで水の作用を受けた粗砂の堆積が層状に観察できる。ピットはいずれも径0.2m以下の小さなもので、深さも約0.2mと浅い。溝は耕作に関わる鋤溝と考えられる。黒褐色粘質土を埋土とし、鋤跡が見えるものが多い。鋤溝の方向は地割りと同様で、真北より西に約35°振れている。出土遺物は少なく、土師器、須恵器などの小片と、弥生時代の石鎌、古墳時代の滑石製紡錘車が出土している。

上層遺構は、遺物の出土量が少なく、時期決定が難しい。しかし、周辺の調査成果から、中世以降、近世にかけての耕作面であったと考えられる。



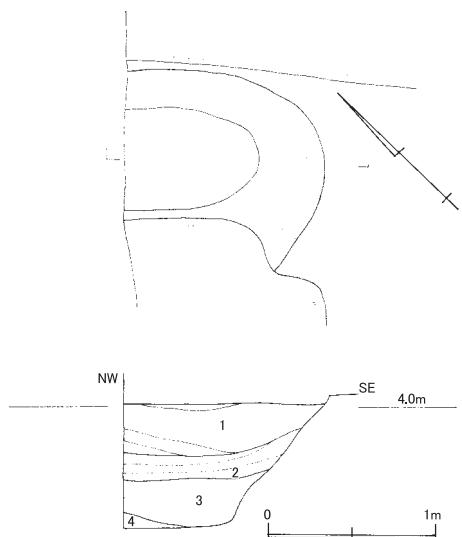
fig.220 4-2次 SE201検出状況 (東から)



fig.221 4-2次 P201遺物出土状況 (南から)



fig.222 4-2次 NR201検出状況 (南から)



1 暗黒褐色粗砂混じり粘質土 2 黒色砂混じり粘質土
3 暗褐色砂混じり粘質土 4 暗灰白色粘質土

fig.223 SK101平・断面図

下層遺構 検出面は、上層・下層ともに同一面である。ただし、切り合い関係にあるなど、明らかに鋤溝よりも下層である遺構を取り上げる。井戸1基、ピット1基、自然流路1条を検出した。

井戸SE201は、南半部に埋設管が通っていたため、北半のみ調査を行なった。南端が調査区外に広がるがおそらく平面円形で、検出した長径は2.4m、検出面からの深さ1.6mを測る。出土遺物は、土師器と須恵器である。埋土最下層の黒色砂混じり粘質土中からは、須恵器有蓋高壺の蓋、ハソウか壺と考えられる丸底の須恵器底部片が出土した。有蓋高壺の蓋はTK47型式併行とみられることから、井戸SE201は古墳時代中期末～後期前半（5世紀末から6世紀初頭）の所産と考えられる。

ピットP201は、径0.5mほどで、縄文時代晩期の土器が出土した。体部片のみであるため、形状はわからない。近隣の松野遺跡や二葉町遺跡で出土している縄文時代晩期の土器と類似するものと考えられる。

自然流路NR201は、幅約3.5m、検出面からの深さ約0.8mを測る。粗砂と粘土が互層に堆積し、ピットP201で出土した縄文時代晩期の土器と類似する破片が出土する。堆積状況などから、おそらく海からの作用を受けた濁筋ではないかと考えられる。

4. 小結

今回の調査では、耕作に関わる鋤溝、井戸、土坑、ピットなどの遺構を検出した。出土遺物は、縄文時代晩期の土器、弥生時代の石鏸、古墳時代中期末から後期の須恵器、土師器、滑石製紡錘車などである。

大橋町東遺跡の既往調査では、弥生時代、古墳時代の竪穴建物が確認されている。今回、古墳時代の井戸を検出し、同時期の遺物が出土したことから、古墳時代の集落が今回の調査地にも広がっていたのだろうと考えられる。ただし、既往の調査地に比べて、遺構面および遺物包含層の残存状況は良好ではなかった。

その他、縄文時代晩期の土器が出土したことは、松野遺跡や二葉町遺跡など周辺遺跡の調査成果と同様の状況を示すものである。縄文時代晩期の土器を含む自然流路NR201については、今回の調査地から北東方向に約170m離れた若松町東遺跡第6次調査で、時期・形状ともによく類似したもののが確認されている。今回検出した井戸SE201の壁面でも、T.P.3.0mほどのところで砂と粘土の互層があり、濁であると考えられる。

おそらく、T.P.3.0m付近で海の作用を受ける土地だったところが、海側に砂堆などができると遮断されることで、堤間湿地となり、粘土の堆

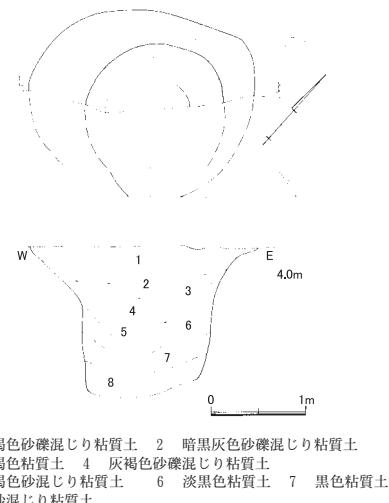


fig.224 SE201平・断面図

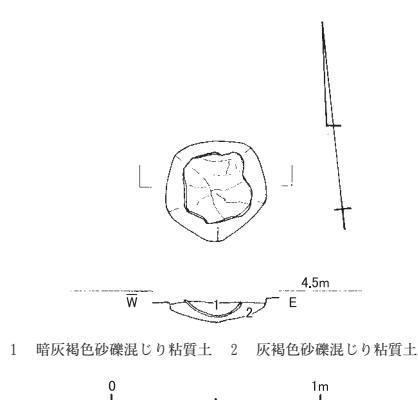


fig.225 P201 平・断面図

積とともに、T.P.4.4m 付近で徐々に安定した地盤となったものと考えられる。ただし、少なくとも縄文時代晩期頃までは、NR201のように、干溝の差によっては、海水が入り込んでくるような地形であったことがわかる。

5. 4-3次調査

基本層位 当該地付近は高取山南麓の複数の河川によって形成された沖積地に位置し、標高 5 m 前後を測る。付近の地形は概ね北から南に下がっている。

現況面マイナス 0.3 m 程度までは現代盛土・搅乱層、以下黒色砂質土（近代耕作土）、黄灰褐色砂質土・暗黃灰褐色砂質土（中・近世耕作土）、暗褐色砂質シルト（弥生～平安時代の土器含む・第1遺構面）・（暗）灰褐色粗砂混じりシルト（第2遺構面・これ以下は沖積地末端の洪水による溢流堆積物と考えられる）、黄灰色細砂（無遺物層）が堆積していた。現況面から第1遺構面までは、調査地東半分で約 -0.6～-0.7 m、西半分で約 -0.4～-0.5 m 程度である。

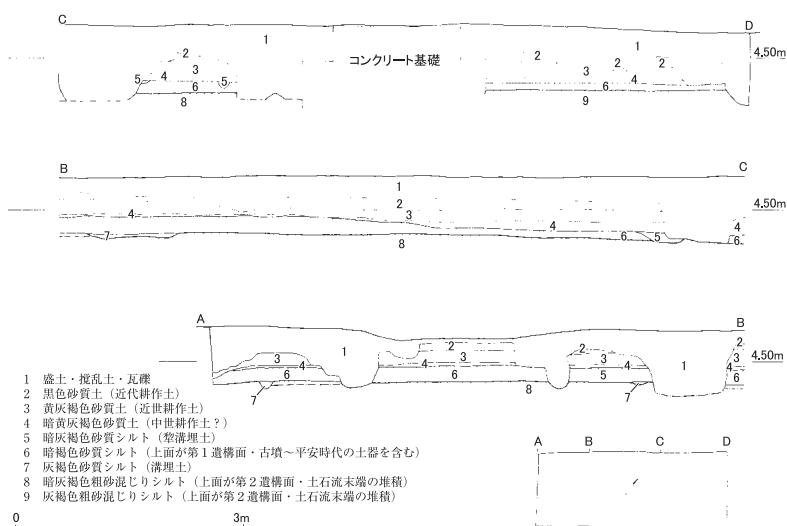


fig.226 北壁土層断面実測図

第1遺構面 暗褐色砂質シルトを 0.05～0.1 m 程除去した段階で確認された遺構で、溝、犁溝、土坑、ピット等を確認した。

SK101 0.8×0.6 m の深い土坑である。全体の半分程を建物基礎によって削られているが橢円形を呈していたと思われる。現存の深さは約 0.05 m である。埋土およびその周辺より、平安時代後期（11世紀後半）の土師器、須恵器、黒色土器が出土した。

犁溝群 調査区西半分で北西から南東方向（概ね N 40° E）へ延びる犁溝群を確認した。0.5 m 程度の間隔を保ちながら平行に走る深さ 0.05～0.1 m の深い溝である。

SD114 北東側は建物基礎によって削られており、南西側では幅約 0.5 m、深さ 0.2 m の北東から南西方



fig.227 4-2次第1遺構面全景（北東から）

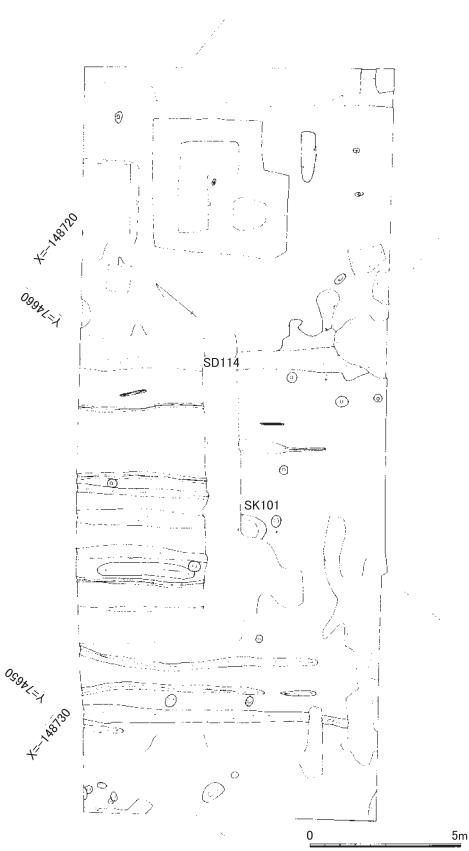


fig.228 第1遺構面平面図

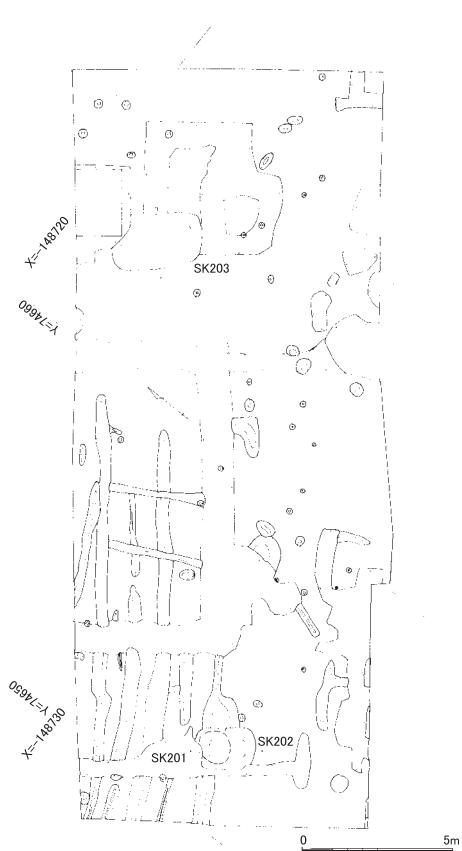


fig.229 第2遺構面平面図

向へ流れる溝である。第2次調査地に続くものと思われる。

ピット群 調査地の南半に散在する。一部柵列状に並ぶものがあるが、掘立柱建物は構成しない。出土土器は小片で詳細な時期は不明だが、概ね平安時代後半前後と判断される。

第2遺構面 弥生～平安時代の土器を含む暗褐色砂質シルトを除去した段階で、確認された。土坑、ピット、犁溝が確認されている。

SK201 西半部で検出した直径0.8m、深さ0.15m程度の浅い土坑で、SK202と重複している。埋土から土師器、須恵器の小破片が出土した。

SK202 規模2 m × 1.4m、深さ0.8mほどの長方形土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は第2遺構面を形成する灰褐色粗砂混じりシルト、その下層の黄灰色細砂層がブロック状に混入し、掘り返した土を埋め戻したような状況である。土師器、須恵器の小片が出土した。

SK203 調査区東半部で確認した規模3 m × 1.8m、深さ0.5mの方形土坑である。断面形

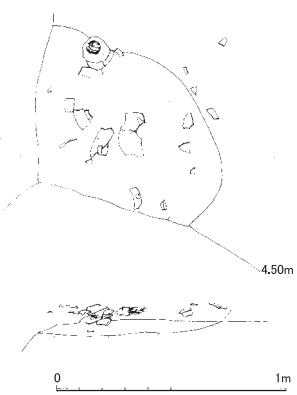


fig.230 SK101遺物出土状況平・断面図

はすり鉢状である。掘削後周囲から土砂が流れ込んだことが土層断面からわかる。古墳時代後期の土器が出土している。

犁溝群 北東から南西方向に走る溝群で、北西部で集中して確認した。深さは0.05～0.1m程度である。溝内および周辺に偶蹄類の足跡が残っていたものもある。



fig.231 4-2次第2遺構面全景（北東から）

ピット群 調査区南半部に散在している。直径0.1～0.3m、深さ0.1～0.3mの円形、橢円形のものが多い。出土土器は小片が多いが、概ね古墳時代後期のものと判断される。

6. 小結

今回の調査では、ピット群と土坑、犁溝が確認された。第1・2遺構面共に、南半部にピット群、北半部に犁溝群が確認されており、当該地付近が集落と畠地との境目であることが判明する。これまでの調査でも、今回の調査地より東・南にピットや住居跡が集中し、北西に多数の犁溝が確認されていることから、上記の判断を追認するものといえる。

35. 松野遺跡 第44次調査

1. はじめに

松野遺跡は妙法寺川が形成した扇状地先端から自然堤防帶に立地する遺跡である。遺跡は昭和56年の市営松野住宅建設事業に伴って発見され、その後しばらくは調査の機会はなかったが、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の復興のため、市街地再開発事業や土地区画整理事業、区画整理事業後の個人住宅等の建設によって調査事例が急増し、今回の調査で第44次を数えることとなった。これまでの調査によって古墳時代後期の豪族居館およびそれと同時期の集落が確認された他、弥生時代・鎌倉時代の遺構・遺物が確認される複合遺跡であることが明らかとなっている。



fig.232 調査地位置図 1:2,500

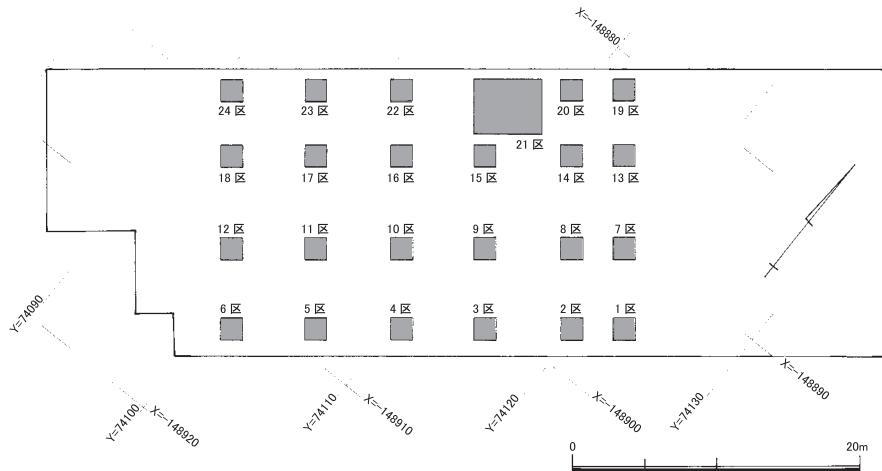


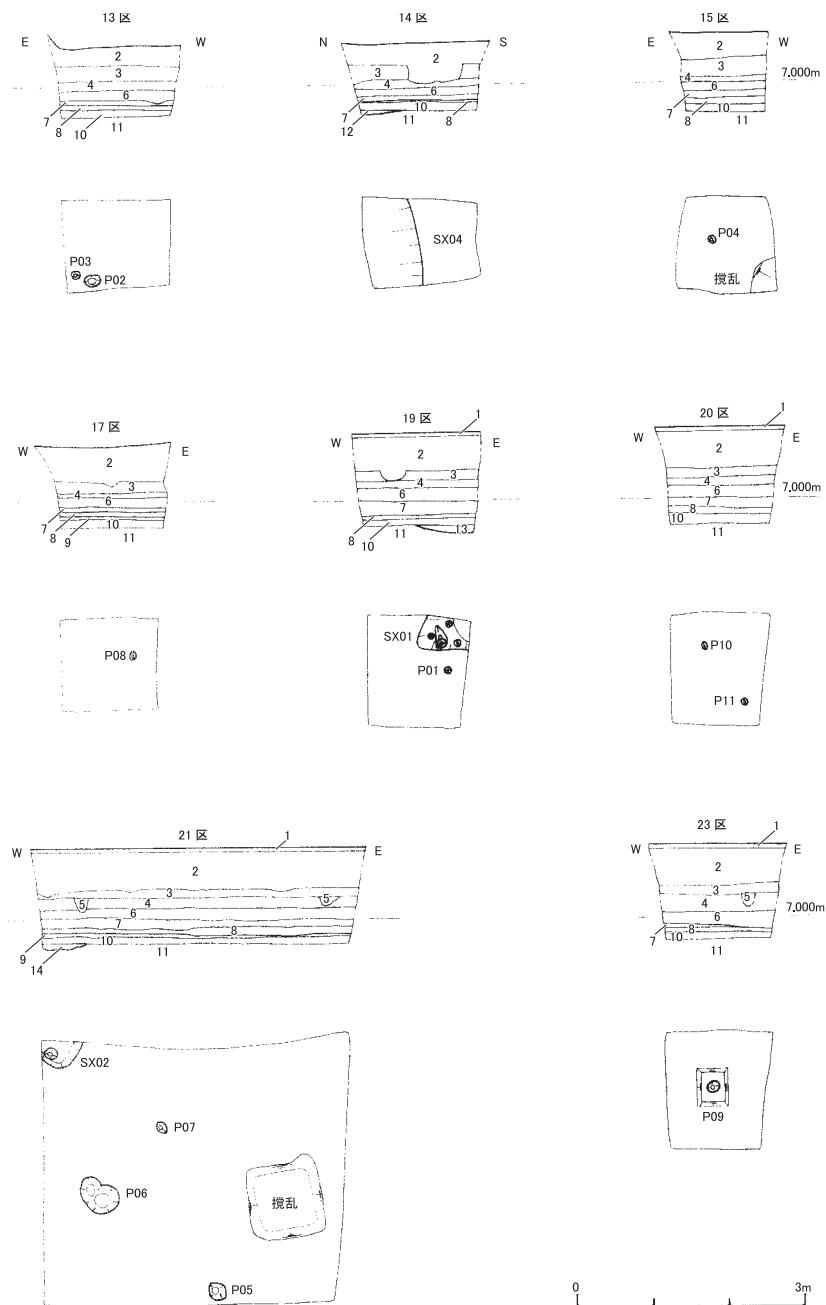
fig.233 調査範囲位置図

2. 調査の概要

今回の調査は事務所建物の新築に伴うもので、平成24年6月12日に試掘調査を実施した結果、古墳時代の遺物包含層が確認された。当該工事を施工するに当たり、深部の掘削が及ぶ部分が遺物包含層に影響を与えることが明らかとなったため、工事影響範囲に関して発掘調査を実施することになった。調査の範囲は合計24本の基礎杭設置部分と、その内のひとつに隣接するエレベーターピット部分であり、敷地南東部分を起点にしてそれぞれの調査区を1～24区と呼称して調査を実施した。しかし従前建物の基礎が相当程度遺存しており、敷地南半では遺跡の残存状況が悪かった。

基本層序 各調査区によって若干の差異はあるが、基本的に上から順に近現代の盛土、宅地化直前の耕作土、灰褐色～灰色の砂質土～シルトの旧耕作土が4・5層、暗灰茶色粘質土の遺物包含層、灰黄色粘土の地山と続く。調査前の現況は従前建物の基礎撤去に伴って地表面の高さに凹凸があったが、従前のコンクリート土間が依存している調査区もいくつか存在し、旧地表面から遺物包含層上面までの深さは1.1～1.2m、地山上面までの深さは1.2～1.3mであったと推定できる。

- 1区 遺物包含層のみ確認された。遺構は確認されなかった。
- 2～6区 従前建物の基礎によって既に大きく損壊を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。
- 7区 遺物包含層のみ確認された。遺構は確認されなかった。
- 8～12区 従前建物の基礎によって既に大きく損壊を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。
- 13区 地山上面でピットが2基検出された。ピットからは遺物は出土しなかった。
- 14区 地山上面で浅い落ち込みが1基検出された。落ち込みからは土師器・須恵器が少量出土した。
- 15区 地山上面でピットが1基検出された。ピットからは遺物は出土しなかった。
- 16区 遺物包含層のみ確認された。遺構は確認されなかった。
- 17区 地山上面でピットが1基検出された。ピットからは遺物は出土しなかった。
- 18区 遺物包含層のみ確認された。遺構は確認されなかった。
- 19区 地山上面でピットが1基と浅い落ち込みが1基検出された。落ち込みの底には杭状



- 1 コンクリート 2 近現代盛土 3 耕作土 暗灰色土
 4 旧耕作土 淡灰色粘質土 5 耕作溝 暗灰色土+灰褐色砂質土
 6 旧耕作土 淡灰褐色砂質土 7 旧耕作土 淡褐灰色粘質土
 8 旧耕作土 淡褐灰色砂混じりシルト 9 旧耕作土 淡黄灰色砂混じりシルト
 10 遺物包含層 暗茶色シルト 11 地山 灰黃色土
 12 SX03 茶灰色粘土 13 SX01 暗茶灰色粘土 14 SX02 暗灰色砂混じり粘土

fig.234 調査区平・断面図

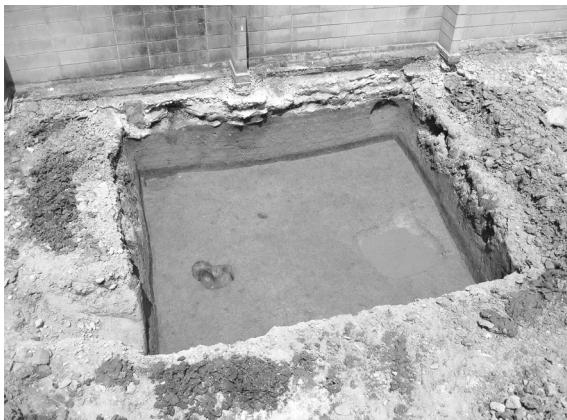


fig.235 21区遺構面検出状況（南から）



fig.236 17区遺構面検出状況（南東から）

の小ピットが4つ確認された。ピットと落ち込みからは遺物は出土しなかったが、遺物包含層である程度土師器・須恵器が集中して出土した。

20区 地山上面でピットが2基検出された。ピットからは遺物は出土しなかった。

21区 この調査区のみエレベーターピットに伴うもので、他より規模が大きい。地山上面でピットが3基と浅い落ち込みが1基検出された。落ち込みの底にはピット状にもう一段深くなる部分が確認された。ピットの1つと落ち込みからは土師器・須恵器が少量出土した。

22区 遺物包含層上面でピットが1基検出された。地山上面では遺構は確認されなかった。ピットからは遺物は出土しなかった。

23区 遺物包含層のみ確認された。遺構は確認されなかった。

24区 従前建物の基礎によって既に大きく損壊を受けており、遺物包含層や遺構は確認されなかった。

3. まとめ

今回の調査地点は松野遺跡の範囲の西端付近に位置しており、今回確認した遺構もあまり多くはない。遺構の密度は敷地内の東方ほど高く、西方ほど低い傾向がうかがえる。この内容は敷地北隣で平成13年度に実施された第27次調査の際にも確認されており、徐々に遺構・遺物が希薄になって遺跡の端に近づきつつあるものと推察される。出土した遺物の量は全部で14ℓ入コンテナ1箱である。北隣の第27次調査を含めて従来当該地周辺で確認されている古墳時代の遺構・遺物の時期は5世紀末～6世紀初頭であるが、今回の遺物の時期は同じ古墳時代でも6世紀末頃になる。この時期の遺構・遺物はあまり松野遺跡では確認されておらず、周辺に当該時期の遺構が存在するのかどうかを含め、周辺での今後の調査成果の蓄積を待ちたい。

37. 戎町遺跡 第69次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、妙法寺川左岸の扇状地末端の微高地上に立地している。遺跡の範囲は、南北約600m、東西約400mの範囲に広がっているものと考えられている。これまでに70回近い発掘調査が実施されており、弥生時代から中世に至る複合遺跡として知られているが、遺跡の中心となる時期は弥生時代であり、同時代の各時期におけるさまざまな遺構・遺物が検出されている。

今回の調査地である寺田町地区においてもこれまでに個人住宅建設や区画整理事業に伴う街路部分の発掘調査等が実施されており、弥生時代の竪穴建物や方形周溝墓などが見つかっている。当該時期の居住域と墓域の広がりが認められる戎町遺跡の範囲のなかでも重要な地区となっている。以上のような状況から、今回の調査地にも弥生時代の集落域が広がっていることが予想されていた。

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴って実施したもので、工事によって影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

2. 調査の概要

調査範囲は fig.238に示したとおりであるが、掘削残土について調査地内にて仮置きするため、残土置き場を確保しながら、計4回に分けて調査を実施した。分割した各小調査区については、北側より時計回りに、1～4区と呼称する。

1～4区においては、それぞれ2面の遺構面を確認し、各種の遺構を検出した。検出した各遺構の時期については、整理作業が未了なため詳細な時期については現段階では不明であるが、いずれも弥生時代中期を中心とする時期のものと考えられる。



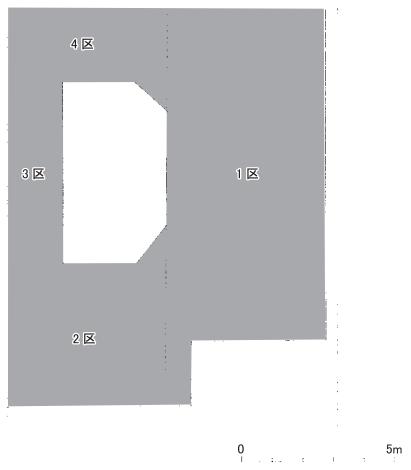


fig.238 調査範囲位置図

第1遺構面 1区南端部と2区西部は大きく搅乱を受けているが、その他の地区において、竪穴建物1棟、土坑1基、溝1条、落ち込み4基、ピット約40基を検出した。

SB01 1区中央で検出した平面形が円形を呈するものと考えられる竪穴建物である。西側は調査区外に延びているものと考えられる。

検出した範囲における建物の直径は約5.9mを測り、床面までの深さは最深部で約0.2mを測る。建物のほぼ中央で中央土坑を検出しており、また中央土坑の西側で土坑1基(SB01内 SK01)を検出した。また建物の北部やや西よりにおいて落ち込み(SB01内 SX01)を確認している。

建物内では他に、ピットを約30基確認しているが、主柱穴の特定には至っていない。主柱穴の候補としては、深さ等からP16やP29等がその可能性を考えることができるが今後の整理作業の進展を待って改めて検討を加える予定である。

中央土坑 建物中央で検出した。本来の土坑の規模は、長径1.17m、短径0.9m、深さ0.23mを測る。北側に0.65×0.25m、深さ0.07mの浅い落ち込みが付随するが、この部分には中央土坑埋土下層のうち炭層に由来する土層(fig.242-2層と同一層)が堆積しており、土坑内部の炭や灰を外側にかき上げた際に生じた窪みと考えられる。上層から弥生時代中期の土器が出土している。

SB01内 SK01 中央土坑の西側で検出した土坑と考えられる遺構であるが、西側が調査区外に延びるため全体の形状や規模は不明である。検出した規模は、0.75×0.65mで、深さは0.15mを測る。内部から弥生時代中期の壺底部等が出土している。

ピット 先述のとおり、建物内部でピットを約30基検出している。全てが建物に伴うものであるかどうかは現時点では不明であるが、後述するとおり1区中央部分についてはSB01によって第2遺構面は削平されており、この部分では遺構は確認されていない。SB01

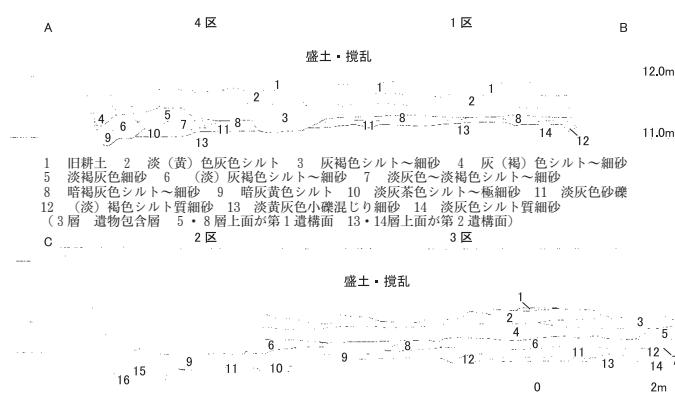


fig.239 調査区北壁 (上段)・南壁 (下段) 断面図

内部で検出したピットの中に第2遺構面に伴うものが含まれる可能性も考えられ、今後整理作業の中で検討したい。

SK01 2区中央やや南よりで検出した土坑である。検出した規模は、長径1.3m、短径0.8m、深さ0.1mを測るが、西側は搅乱によって一部削平されている。

SD01 3区から4区にかけて検出した溝である。調査区内を北東から南西方向に流れる。検出した

規模は、幅1.15m、深さ約0.07mを測る。

4区において内部でSX02、SX03やP37を検出している。

SX01 1区南端で検出した落ち込みである。深さ約0.1mを測る。西側は攪乱によって削平され、また東側は調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。

ピット 1区北部で7基、2区で24基、3区で2基、4区で4基検出している。2区ではやや密集した状況で検出しているが、いずれも調査区内で掘立柱建物としてのまとめりは認められない。いずれも直径0.2m程度を測る。

遺物 1区で検出したSB01からは弥生時代中期の土器やサヌカイト製削器（長さ約9.5cm）、サヌカイト片、結晶片岩が出土している。サヌカイトや結晶片岩は石器の材料として使用される石材であり、今回の調査で確認している製品以外にも石器の製作が行なわれていた可能性も考えられる。

結晶片岩は、1区の遺物包含層からも、長さ約10.5cmを測るやや大型のものも出土している。

また、2区の遺物包含層からは、扁平片刃石斧（長さ約11.5cm）、小形鑿形石斧（長さ約8.0cm）が出土している。いずれも完形品である。石材については、分析を行なっていな

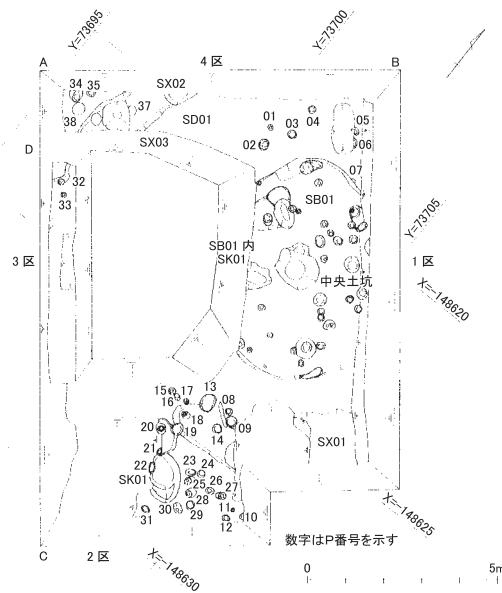


fig.240 第1遺構面平面図

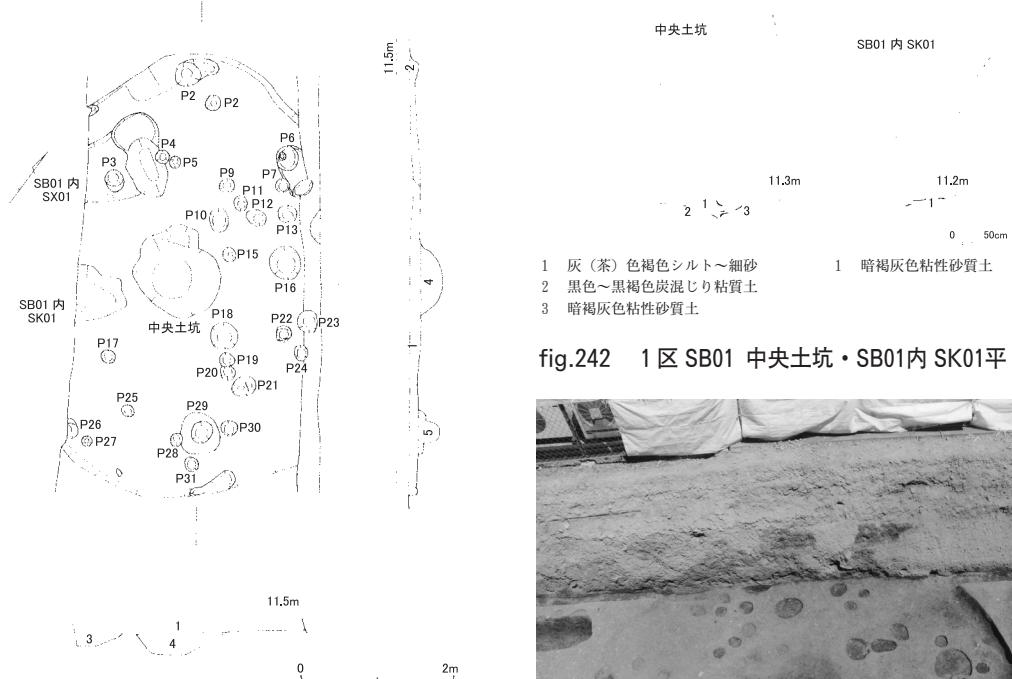


fig.241 1区 SB01 平・断面図

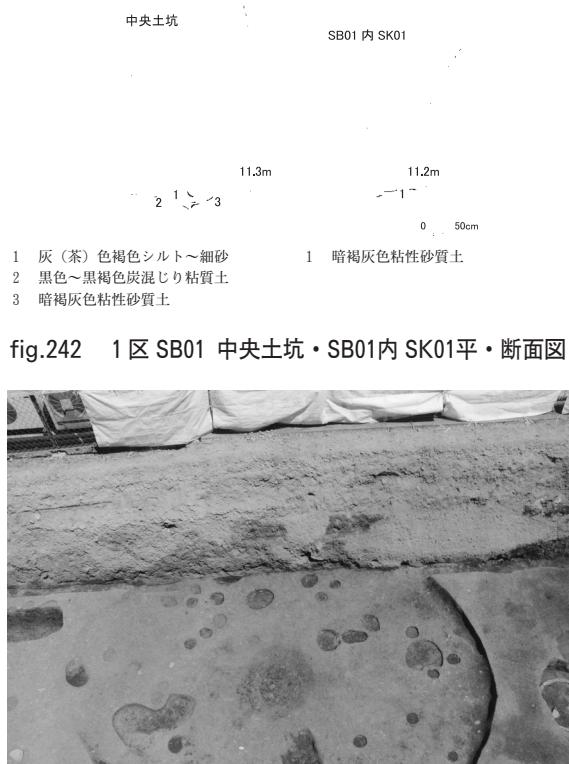


fig.242 1区 SB01 中央土坑・SB01内 SK01平・断面図



fig.243 1区 SB01検出状況 (南西から)

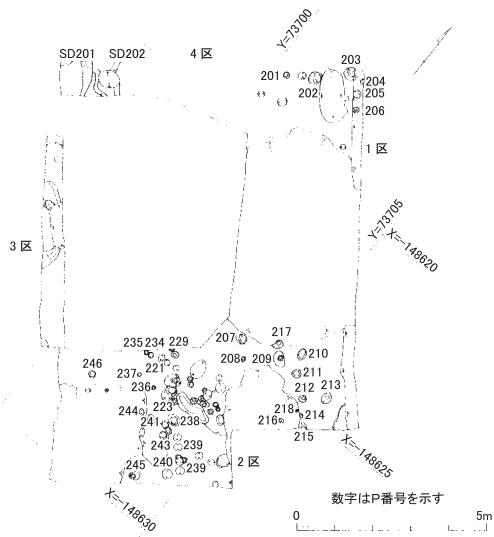


fig.244 第2遺構面平面図



fig.245 SB01内 SK01遺物出土状況（北東から）

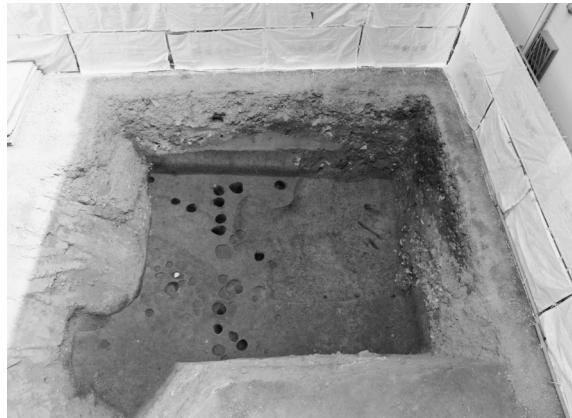


fig.246 2区第2遺構面全景（北西から）

1 遺構面で検出した遺構との時期差など詳細については今後の整理作業の中で検討したい。

3. まとめ

今回の調査においては2面の遺構面を確認し、多くの遺構を検出した。特に1区の第1遺構面では弥生時代中期の竪穴建物1棟等を確認し、隣接する第41次調査地等と同様の当該時期の集落域の広がりを確認することができた。また各遺構内や遺物包含層からは同時期の土器や石器、またサヌカイトや結晶片岩等の遺物が多く出土している。以上のように今回の調査では、戎町遺跡における弥生時代の様相を解明する上で多くの成果を得たということができよう。

いので断定はできないものの、扁平片刃石斧については肉眼観察では輝石閃緑岩である可能性が考えられる。

第2遺構面 溝2条、落ち込み1ヶ所、ピット約50基を検出した。3区では溝状の落ち込み等を検出しているが、検出した層位は他の調査区で第2遺構面を確認した層位よりもやや下層にあたり、時期的には若干の差がある可能性も考えられる。流路状堆積の一部の可能性も考えられる。また1区で検出した遺構SB01の北・南側で検出した。先述のとおりSB01内部で検出したピットの中に第2遺構面に伴うものが含まれる可能性も考えられる。

SD201・SD202 4区西端部で溝2条を検出した。2条の溝は切り合い関係にあり、SD201がSD202を切っている。

SX201 1区南東隅で検出したが、調査区外に延びるため、全体の形状や規模については不明である。

ピット 1区北側で検出したピットは調査区の北東隅に偏る傾向が認められ、今回の調査区のさらに北側に同様のピットが存在する可能性が考えられる。1区南側から2区にかけて密集した状況で検出したピットは一連のものである可能性が考えられるが、掘立柱建物や柵列等のまとまりは見出せていない。

遺物 第2遺構面で検出した各遺構からも遺物が出土しているが、小片が多く現時点では詳細な時期決定には至っていない。概ね弥生時代中期頃のものと考えているが、第

38. 大手町遺跡 第9次調査

1. はじめに

大手町遺跡は、妙法寺川右岸の丘陵上に立地する遺跡で、弥生時代及び中世の集落跡として知られている。平成7年度に実施された試掘調査によってその存在が明らかとなった遺跡であり、これまでに宅地造成や道路建設に伴って、8次にわたる発掘調査を実施している。

今回の調査地の南側隣接地においては第4・6次調査を実施しており、弥生時代中期の溝や土坑、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃の竪穴建物等の遺構を検出している。また遺物においても各遺構から多量の土器が出土しており、中には、龍などの絵画を描いた鉢なども含まれている。

以上の状況から、今回の調査においても弥生時代中期あるいは後期頃の集落跡が確認されることが予想されていた。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴い、工事の影響を受ける部分について実施した。

調査範囲についてはfig.248に示したとおりであるが、掘削残土を調査対象地内に仮置きするため、残土置場を確保しながら、3回に分けて調査を実施した。

1区 調査対象範囲のうちの東半部分の調査区である。

調査の結果、遺物包含層である淡灰褐色～灰褐色細砂の下層で南、西側に落ち込む旧地



fig.247 調査地位置図 1:2,500

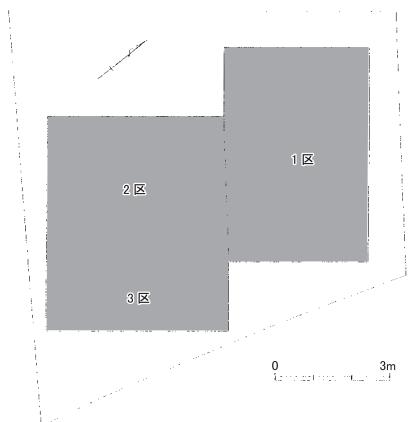


fig.248 調査範囲位置図

形や、溝状や土坑状を呈する落ち込みを検出した。遺物包含層や落ち込みからは弥生時代後期の土器が出土している。

2区 調査対象範囲のうちの北西部の調査区である。竪穴建物1棟、土坑1基、ピット2基を検出した。

SB01 2区西半部で検出した平面形が方形を呈すると考えられる竪穴建物である。北・西側は調査区外に延びている。また南側は南東隅部分を除き、削平等の理由により判然としなかった。以上の状況から竪穴建物として断定するに

はやや弱い部分もあるが、周壁溝の一部と考えられる溝や、内部でピットも1基(SB01-P1)確認したことから竪穴建物として報告する。東辺の約4mを検出し、深さ約0.1mを測る。弥生時代後期頃の土器やサヌカイトが少量出土している。

SX01 2区北東部で検出した土坑状の落ち込みで、平面形は橢円形に近い形状を呈する。南部は1段深くなっている。長径1.4m、短径0.9m、深さ0.09mを測る。弥生時代中期の土器やサヌカイトが少量出土している。

ピット 2基検出している。いずれのピットからも弥生時代後期のものと考えられる土器がわずかに出土している。

3区 調査対象範囲の西半部分のうち、2区の南側に位置する調査区である。竪穴建物1棟、溝1条、落ち込み2基、ピットを検出した。

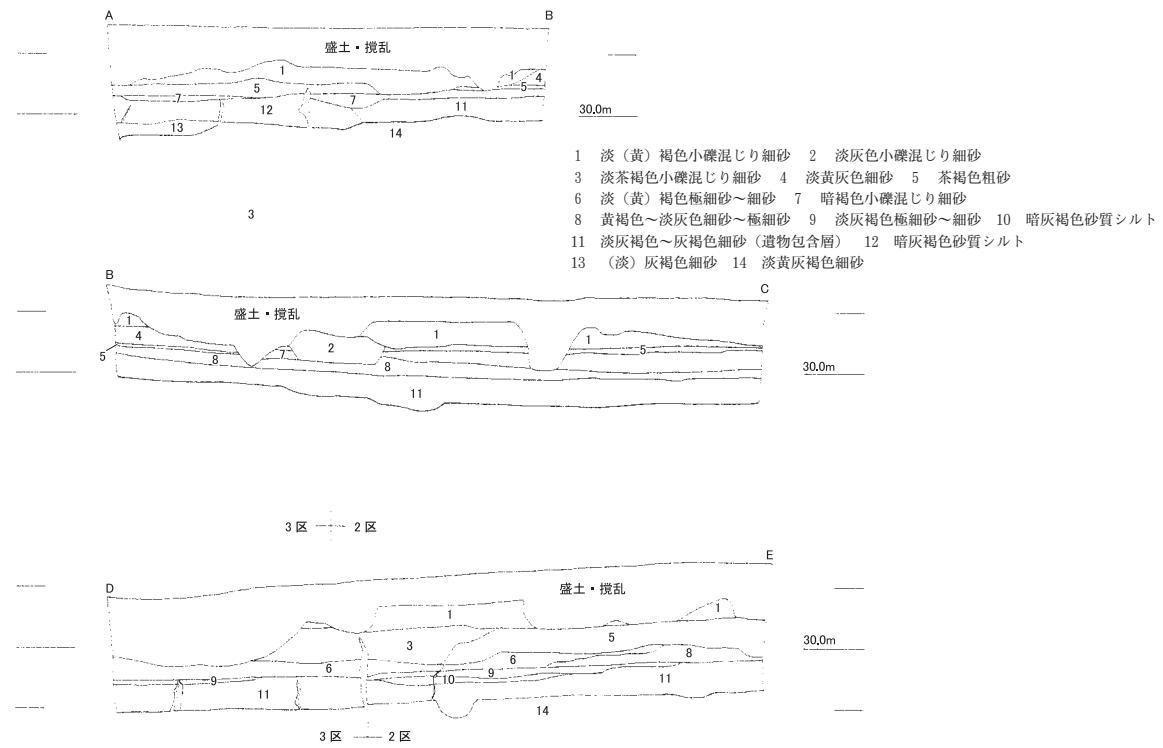


fig.249 1区北・東壁・2・3区西壁土層断面実測図

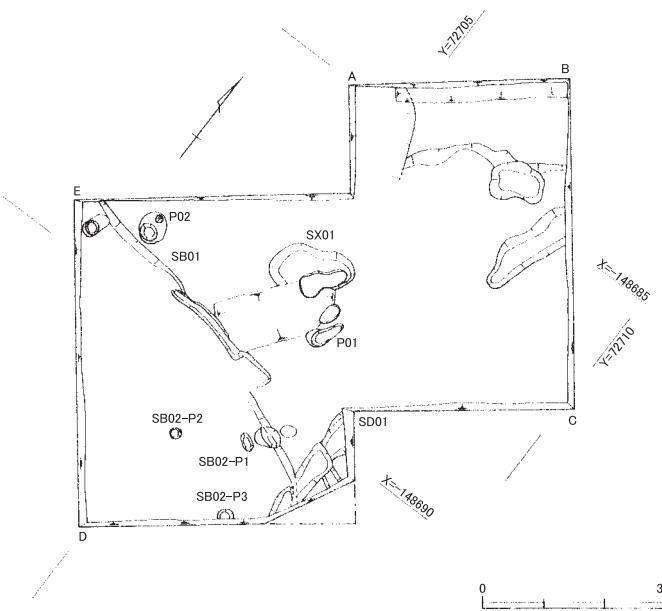


fig.250 調査区平面図

SB02 平面形が方形を呈すると考えられる堅穴建物である。南・西側は調査区外に延びている。また北側はSB01と重なる部分付近が削平等の理由により判然としなかった。以上の状況から堅穴建物として断定するにはやや弱い部分もあるが、SB01と類似する形状、方向を指向していることや、内部でピットも3基(SB02-P1~P3)確認したことから堅穴建物として報告する。東辺の約2mを検出し、深さは約0.2mを測る。弥生土器や石鏃が出土しているが、詳細な時期については不明である。

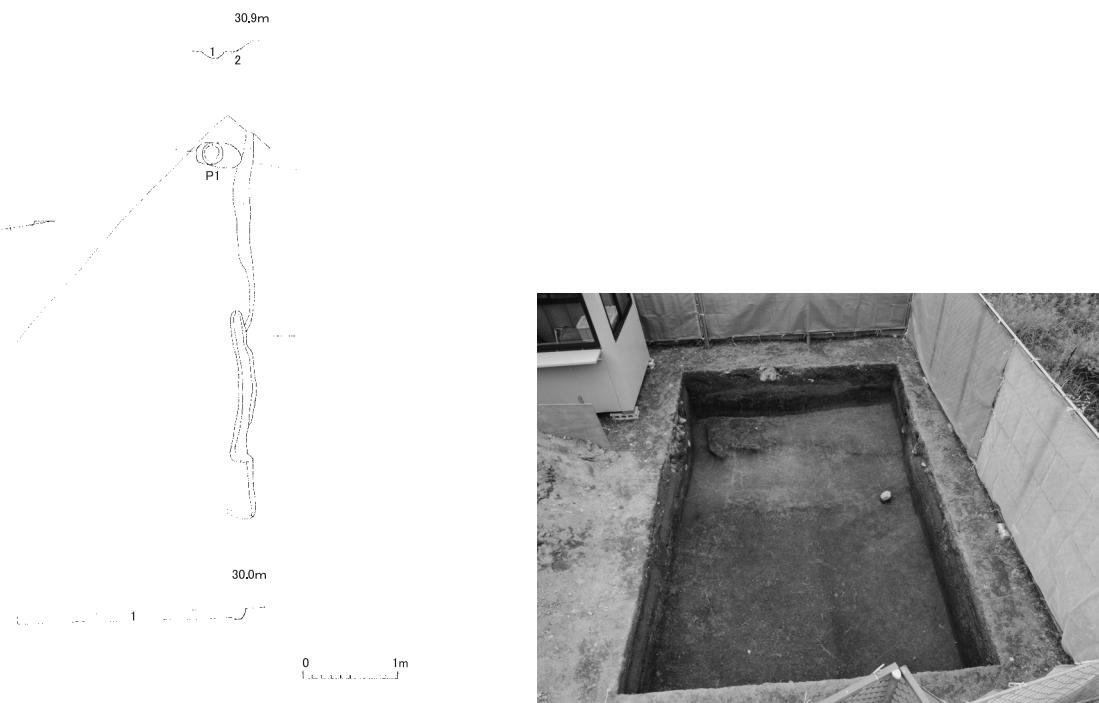


fig.251 SB01平・断面図

fig.252 1区全景（南東から）



fig.253 2区全景（南東から）



fig.254 3区全景（北西から）

内部で検出した SB02-P1～P3については主柱穴としての断定は難しいが、位置的な関係からは P2及び P3についてはその可能性が考えられる。

なお、SB01との時期の前後関係については、削平により確認できなかった。

SD01 3区南東隅で検出した溝であるが、調査区外に延びていることもあり、全体の形状や性格については不明である。深さ0.08mを測る。弥生時代後期のものと考えられる土器が出土している。

SX02 3区南端部で検出した落ち込みで、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。調査区内では土坑状を呈し、深さ0.19mを測る。弥生土器やサヌカイトが出土している。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期頃の竪穴建物等の遺構を確認した。各遺構から出土した土器は碎片が多く、詳細な時期を特定することが困難なものが多い。時期が判明するものについては弥生時代後期頃のものが大半で、SX01に弥生時代中期の土器が認められる程度である。よって今回の調査地においては弥生時代後期頃の集落の広がりを確認することができた。南側隣接地区で実施された第4・6次調査において確認されたような弥生時代中期の集落の広がりについては明らかにできなかった。今後の整理作業の中でさらに検討を深めたい。弥生時代後期の遺構については北側にも延びていることから、集落域がさらに北側へ拡がっていくことが明らかとなった。

以上のように、今回の調査では大手町遺跡の全体像を考える上で貴重な成果を得ることができたものといえよう。

39. 大田町遺跡 第17次調査

1. はじめに

大田町遺跡は、平成2年度に共同住宅建設に伴う試掘調査によって発見された遺跡である。同年この発掘調査（第1次調査）より、調査を重ね当調査が17回目（第17次）の調査となる。

現在遺跡の規模は、妙法寺川左岸に東西約500m・南北約150mの範囲の遺跡として周知され、遺跡の東辺は戎町遺跡と接する。遺跡の時期と種類は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。六甲山地に源を発する妙法寺川によって形成された扇状地上に位置する。調査地の標高は約13mである。

これまでの調査で弥生時代や古墳時代の遺構、遺物が検出され、さらに奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物や古代山陽道と想定される道路の北側側溝と考えられる溝状遺構など検出されている。また当調査地の道路を挟んだ東側の市営住宅（第5次調査）では、奈良時代末頃の須恵器壺に、和銅開珎などの古代錢を納めた儀式に用いられた遺構も発見されている。

2. 調査の概要

調査対象地は、地下鉄・山陽電鉄板宿駅の南約500mの地点である。調査対象面積は、全体で約280m²の予定であるが、前年度の東南部分約32m²（1区）の調査は完了し、今年度は残り約250m²が対象となる（調査地区割図）。前年度と同様に、弥生時代から中世に至



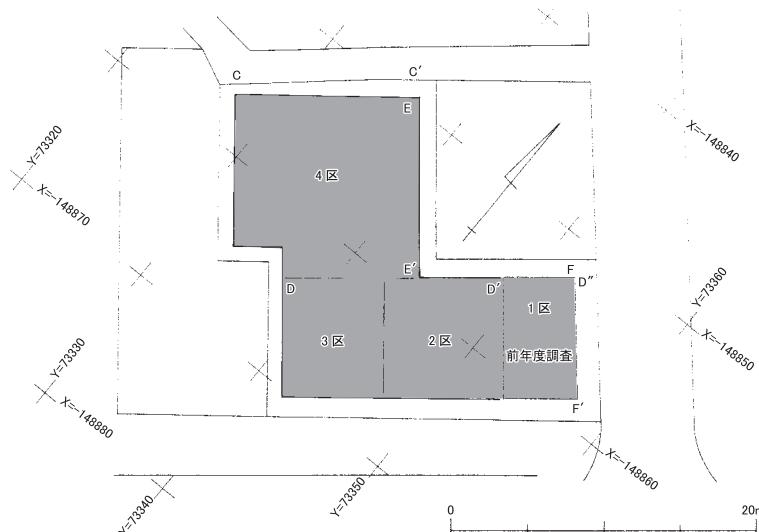


fig.256 調査範囲位置及び地区割図

ため調査区毎に、適宜犬走り状に土層を残し安全確保に努めた。

基本層序 1区とほぼ同様に、上層から碎石層、現代盛土層、旧耕土、黄色泥砂（中世堆積土）、黄色混礫泥砂（中近世の洪水砂）、褐色泥砂（中世の堆積土）である。この層を掘削すると第2遺構面となる。

第3遺構面の遺物包含層は茶褐色泥砂である。土師器、須恵器に混じり、少量の緑釉陶器、黒色土器、白磁片が出土した。第4遺構面を覆う層は、薄く3、4区では、明確でな

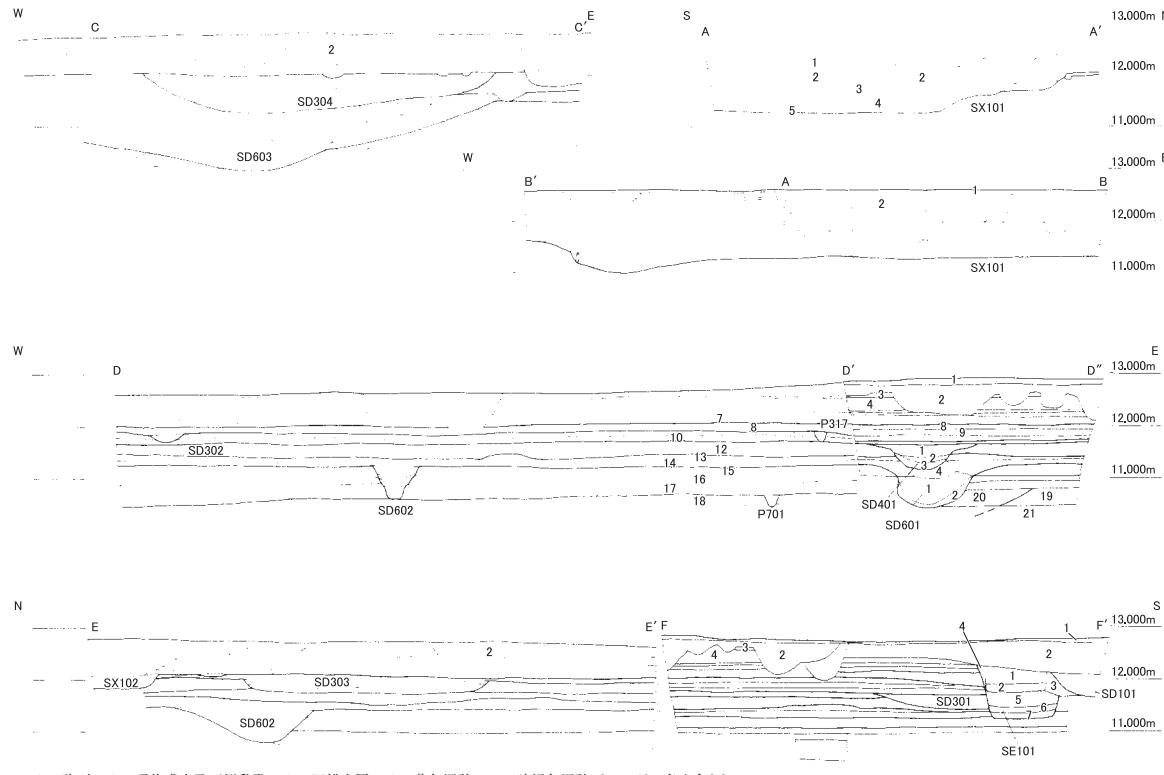


fig.257 調査区土層断面実測図

る時期の遺構面が6面以上検出された。

調査の方法 調査範囲は、調査地区配置図にあるように、便宜的に前年度調査地区を含めて1~4地区に分割して調査を行なった。現代の盛土などは重機により掘削し、それ以下を人力によって調査を行なった。遺構番号は遺構面ごとの番号と遺構通し番号を付し、3桁で表記することとした。最下層までの掘削深度が地表面より2mを越す。この

い部分もあった。第5遺構面は、洪水に起因する粒子の細かい砂層（黄灰色泥砂）で覆われる。第6遺構面の下層に暗灰色混礫砂泥は、小礫を含むことにより堅く締まった土層である。1区～3区の広い範囲に広がるが、この上面で遺構は小ピット以外検出されなかった。この下層に黒色粘質砂泥、4区では、さらにこの下層に灰色泥砂となる。1、2区では黒色粘質砂泥から弥生時代前期頃の遺物が検出される。

第2遺構面の標高は12mほどで、第6遺構面の標高は11mとなる。遺構面は、調査区の北東方向に高く、南西方向に向かって下がっていくようである。

第1・2遺構面 第1遺構面と第2遺構面は、1区同様分離して検出できなかった。

1区南端で検出された溝状遺構（SD101）は、2区で消滅している。2、3区では、調査区の大半を占めるSX101が検出された。東西約11m、南北約6m、深さ0.7mの規模で、遺構東辺下端には、杭を打ちこんでいる。土層の堆積状況から水溜状の遺構と考えられる。遺構底面からは、偶蹄目の足跡が観察された。遺構内からは、少量の土師器、須恵器、陶器片が出土した。層位と出土遺物から、中世以降の時期が考えられる。4区では、北東隅で規模は不明であるが、深さ0.2mの落ち込み状遺構（SX102）が検出された。遺構からは、少量の土師器、須恵器片が出土した。3区では、スキ溝状遺構を切る溝状遺構が検出された

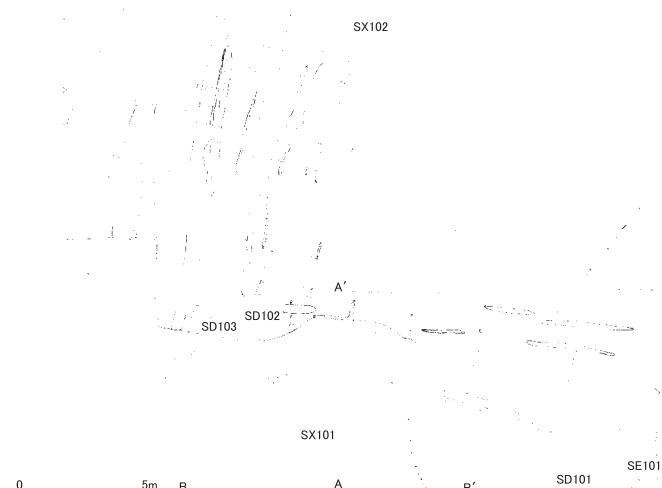


fig.258 第1・2遺構面平面図



fig.259 第3遺構面平面図

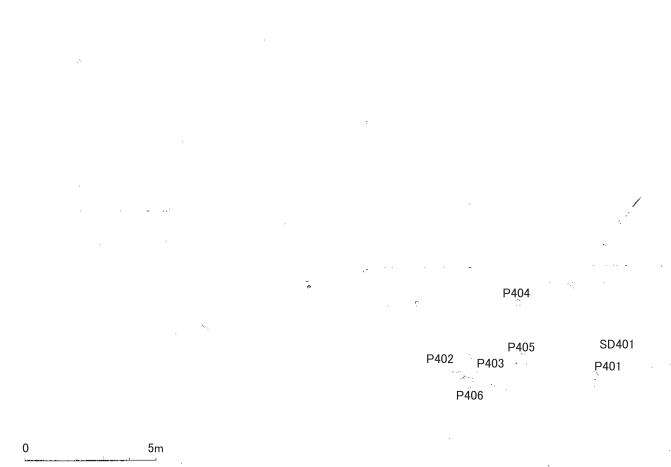


fig.260 第4遺構面平面図

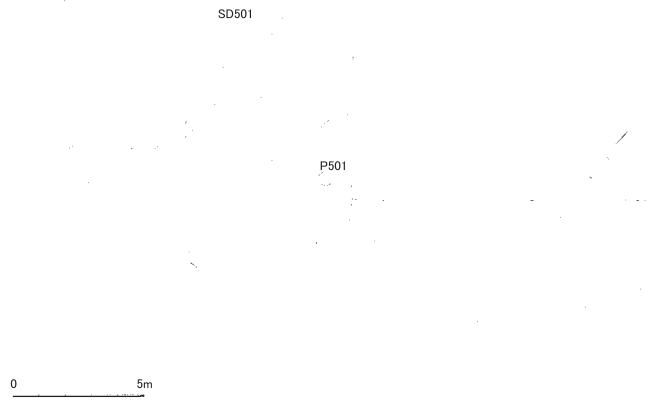


fig.261 第5遺構面平面図

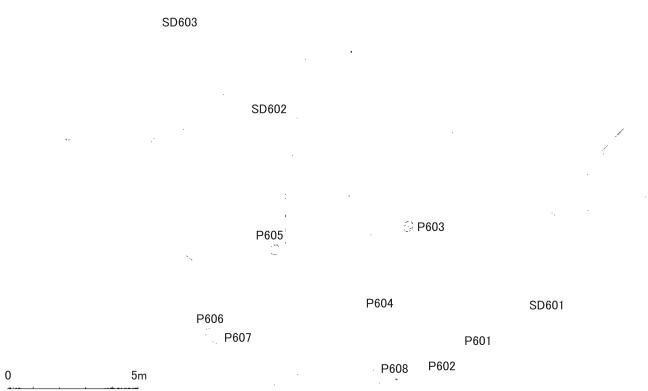


fig.262 第6遺構面平面図

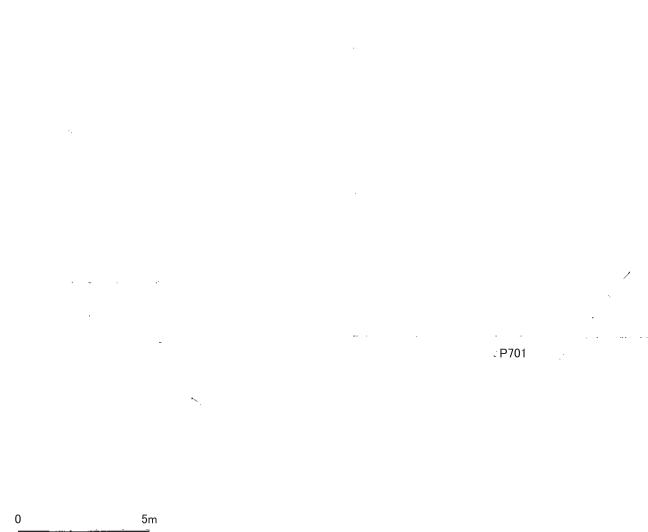


fig.263 第6遺構面以下平面図及び断割トレンチ位置図
SD601・SD603下層想定図

(SD102、SD103)。

1～4区でスキ溝状遺構合計24条 (SD201～SD224) が検出された。それぞれの遺構からは、中世に属する時期の土師器、須恵器が少量出土した。1～3区では南北方向と東西方向の2種のスキ溝が検出されたが、4区は南北方向のみであった。

第3遺構面 第3遺構面では、ピットと溝状遺構が検出された。ピットは、1～4区全区で計60余箇所検出された。しかし建物としてまとまるピットはごく僅かであった。

ピットは、直径より概ね3種にわけられる。直径0.8m前後、直径0.6m前後、直径0.3m以下の3種類である。P309、P321は、直径0.8m前後、深さ0.4～0.6mの規模の柱穴と考えられるが、この規模の柱穴が周辺に連続していくものは検出されなかった。

4区では、4箇所3間分柱間距離1.7～1.9mで南北方向に一列検出された (P352・P354・P357・P359)。直径0.6m前後、深さ0.5m前後で柱穴と考えられる。同様の規模のP363を東へ伸びる柱穴と考えると柱穴一箇所は、SD303で消滅し、3間×2間以上の建物として考えられる。その他柱穴と考えられるピットは、現状では建物としてまとまりを現状では見出しえない状況である。

1～2区 SD301南面やSX101東面で検出される径0.1～0.3m、深さ0.2～0.4mの小ピットは、杭の痕跡かと考えられる。

4区では、溝状遺構が2条検出

された。SD303は、真北から真南に流れる溝状遺構で、幅約2.2m、深さ約0.2mである。遺構上面の砂層堆積より古墳時代土師器小型甕、須恵器高坏、高坏蓋の3点がほぼ完形品で出土した。3区で検出されたSD302は、幅は0.8m、深さは0.1mで、SD303の一部深くなつた砂層の堆積部分と判断される。

SD304は、SD303と並行して流れる溝状遺構で、幅約5.4m、深さ約0.8mである。上層は砂泥層で、下層は砂層から砂礫層の堆積である。土師器、須恵器片が少量出土した。

2区南東部で、南北1.3m、東西0.9m、深さ0.15mの浅い土坑(SK301)が検出された。遺構内より、少量の須恵器片と土師器甕が出土した。

第4遺構面 2区では、ピット5箇所が検出されたにとどまる。3、4区では遺構面は検出されたが、遺構は、検出されなかった。

3区北東部で、古墳時代後期の須恵器坏身一個体が遺構面で出土した。

第5遺構面 1～2区にかけて幅約1.7～2.0m、高さ約0.1mの大畦畔が検出された。他に2区では、この大畦畔と少し方向を違える幅約0.8m、高さ約0.1mの中畦畔といえる規模の畦畔が検出された。

4区では、幅約1.6～2.0m、高さ約0.1mの大畦畔と西側に畦畔と並行して幅0.6m、深さ0.15mの溝状遺構(SD501)が検出された。畦畔を覆う堆積土からはわずかに土師器微細片が出土したにすぎず、



fig.264 2区第3遺構面全景



fig.265 4区第1・2遺構面全景



fig.266 4区SD303遺物出土状況



fig.267 4区第3遺構面全景

ピットが、4箇所検出された。

3～4区にかけて幅0.9～1.2m、深さ0.6mの溝状遺構 SD602が検出された。微量の弥生土器片が出土しているが、現状では時期を特定できない。

第6遺構面以下 1区調査の知見から、第6遺構面の下層には遺構面と考えられる層があり層位に従い、遺構面ごとに人力掘削作業及び遺構面検出作業を行なった。しかし2～4区では、遺構は検出されなかった。またそれぞれの層からの出土遺物は微量であり、時期を決定できるものは現状ではない。

流路状遺構を部分的に断ち割り作業を行ない、遺構の規模、遺物の有無などを確かめる作業を行なった。この結果幅8.0m以上、深さ1.4mの流路状遺構であることが、判明した。また微量の弥生土器が出土した。

3.まとめ

遺構面は6面以上検出された。2～3区で検出されたSX101や4区で検出された流路状遺構などによって、奈良時代から平安時代にかけての遺構面が損なわれており、当初予想された驛家（うまや）関連の遺構やその下層における遺構の密度も希薄であった。今後、当調査と周辺での調査成果の検討を行ない、遺跡の全体像がより明らかになるよう努めたい。



fig.268 4区第6遺構面全景

時期を決定し難いが、層位と出土遺物から古墳時代頃の水田面と考えられる。

その他4区南東部でピット1箇所(P501)が検出された。

第6遺構面 4区では、第3遺構面で検出されたSD304のほぼ同じ位置に流路状遺構 SD603が検出された。1区における、SD401とSD601と同様の状況である。2～3区にかけてピットが、計12箇所検出された。2区南端部では径0.1m、深さ0.05mの小規模の

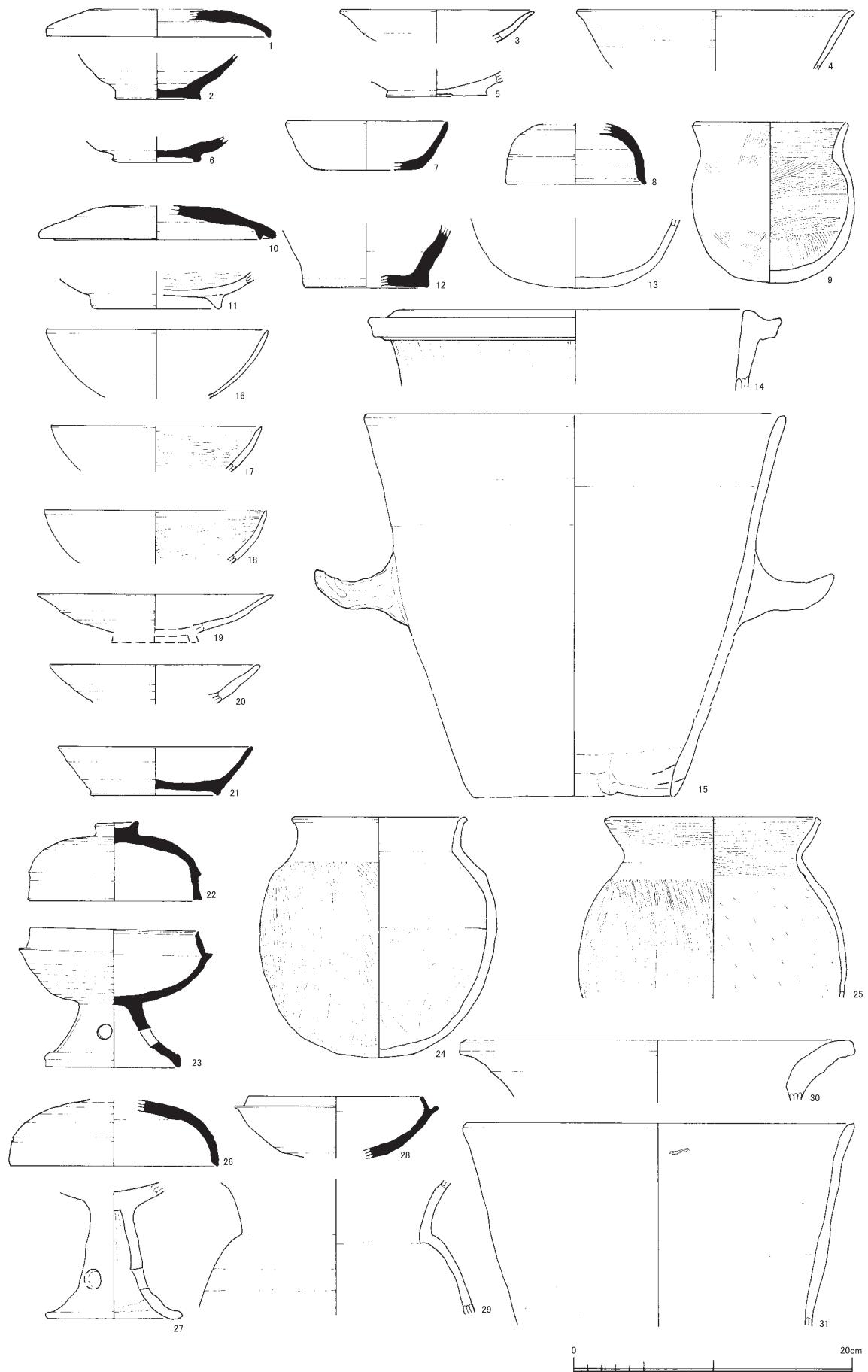
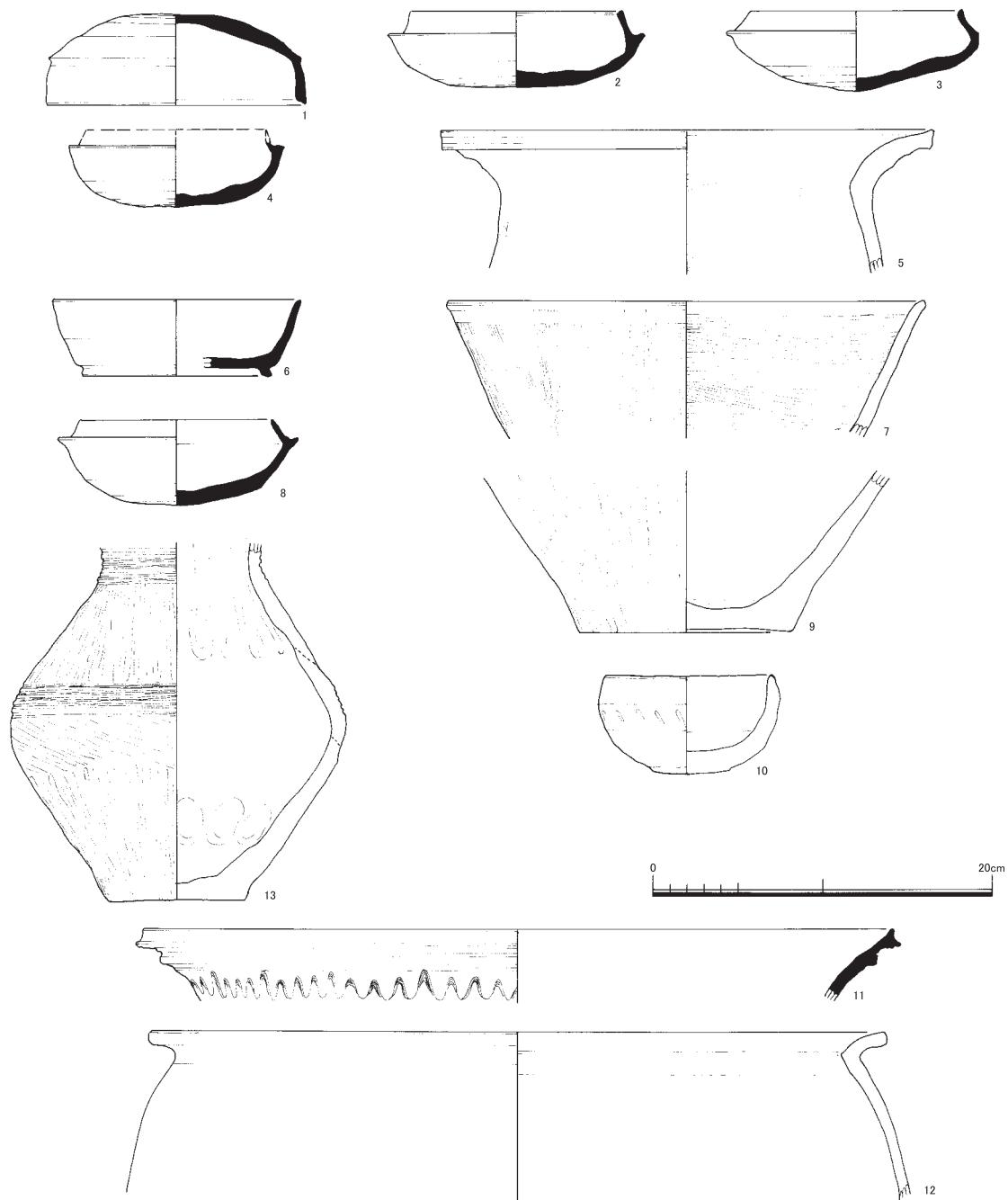


fig.269 出土遺物実測図（1）



(1) 1・2：包含層1 3：SX101 4：SE101 5：包含層2 6～15：包含層3
16：P308 17：P311 18・19 SD301 20：P339 21：P354 22～24：SD303 25：P315
26～29：SD304 30：P319 31：SK301
1・2・6～8・10・12・21～23・26・28：須恵器 6：転用硯 3・4：灰釉陶器
5：綠釉陶器 11・16～18：黒色土器 9・11・13～15・19・20・24・25・27・29～31：土師器

(2) 1～5：包含層4 6：P401 7：SD401 8・9：包含層5 10：包含層6
11・12 SD601 13：包含層7
1～4・6・8：須恵器 5・7・10：土師器 9・12・13：弥生土器

fig.270 出土遺物実測図（2）

40. 古川町遺跡 第2次調査

1. はじめに

古川町遺跡は、六甲山系から流出する妙法寺川によって形成された沖積地上に立地する遺跡である。平成17年度に試掘調査によってはじめてその存在が確認された。平成23年度に個人住宅建設に伴い第1次調査が実施され、奈良時代～平安時代頃と考えられる掘立柱建物、溝、ピットなどが検出された。

今回の調査は市営小寺住宅の建替工事に伴うものである。当調査の成果は、平成25年度に「古川町遺跡第2次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参照されたい。

2. 調査概要

今回の調査地は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する地形に立地し、現地表面の標高は、3.6～3.8mである。

基本土層 旧市営小寺住宅は、昭和40年から43年にかけて建設された4棟の居住棟を中心とした建物で構成されていた。建物部分以外に大きな搅乱はなく、良好な状態で文化財が残存していた。

住宅建設時の整地・盛土層下に、昭和20年の空襲による焼土面が存在する。その下層に旧耕土・旧床土層が存在する。この直下に古墳時代前期～平安時代の遺物を多く含む暗褐色シルト層を検出した。当層は中世以降の耕作土であり、各時期の遺物が混在した状態で

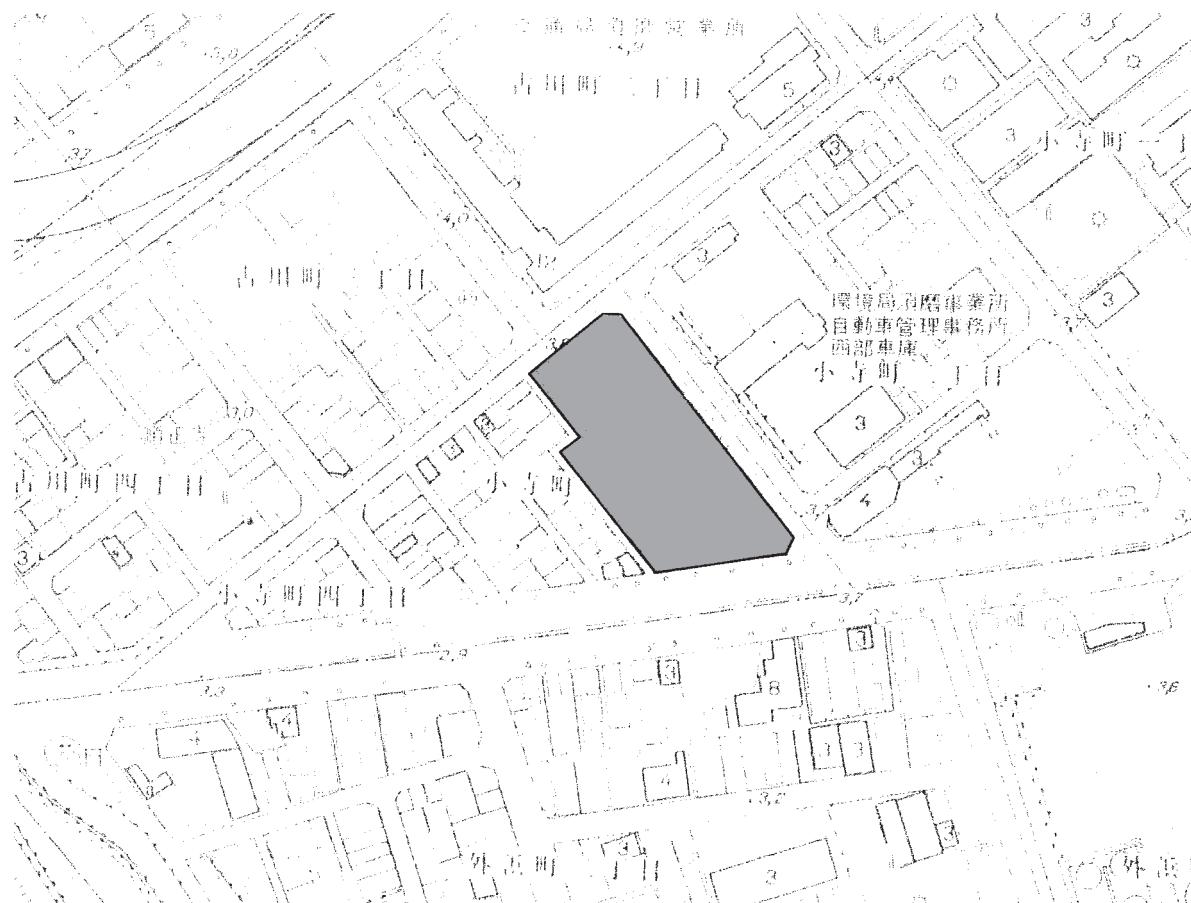


fig.271 調査地位置図 1:2,500

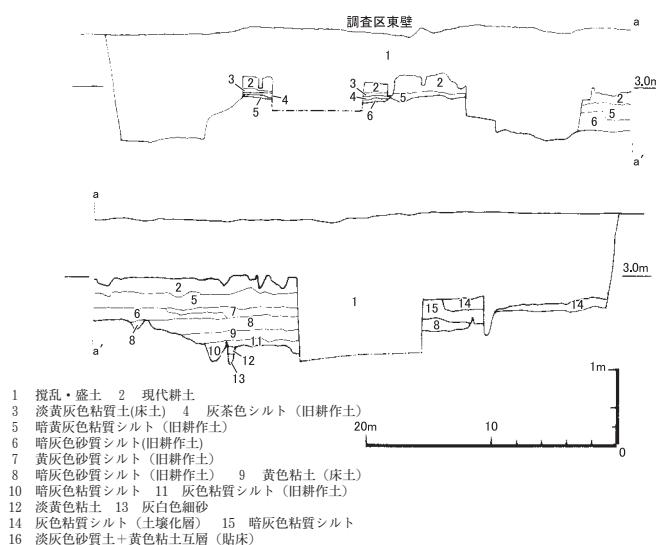


fig.272 東壁土層断面実測図

～平安時代前期、平安時代末、近世である。

1) 平安時代後半 検出した遺構は耕作痕、土坑、木棺墓、溝状遺構、掘立柱建物等である。

耕作溝 1区南端部から2区北半部で、幅0.15～0.2m程度の溝状の耕作痕を20数箇所検出した。畑作に伴う畠溝と考えられる。

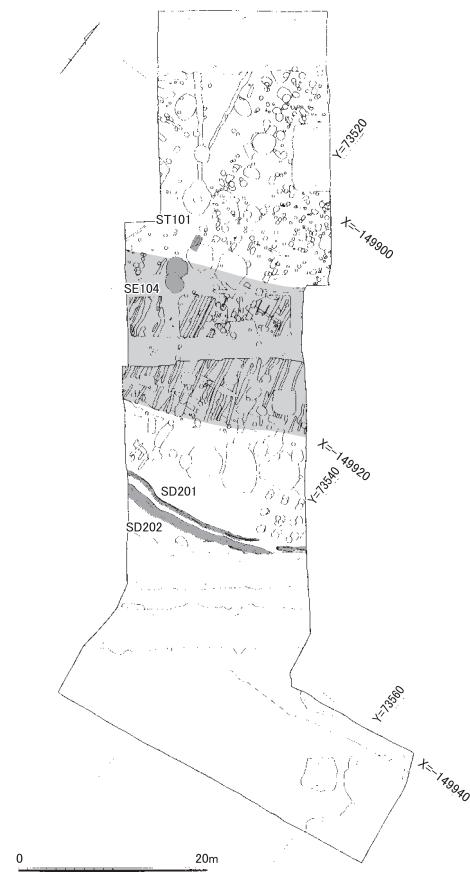


fig.273 平安時代後期～中世の遺構平面図

検出した。その下層の明灰黄色シルト質極細砂上面が遺構検出面であり、部分的に2面の遺構面が存在する。尚、調査地北半部では明灰黄色シルト質極細砂は存在せず、旧流路の堆積層である茶褐色混礫粗砂が検出されている。調査区南端部は、近世に耕地化されるまで浜堤が露出し、耕土直下より古墳時代前期の遺物を検出した。

遺構の概要 調査区内から、弥生時代中期から近世に至る遺物が出土したが、主な遺構の時期は、古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代後期

木棺墓 ST101 1区中央部で12世紀末ごろの木棺墓を1基検出した。南半部は近世の井戸の掘削により失われている。掘形の規模は、長さ1.6m以上、幅0.8m、検出面からの深さは0.38m以上である。木棺の痕跡は、長さ0.75m以上、幅0.3mである。木棺北端部に、直径約0.3m、厚さ約0.05mの円形の石が落ち込んだ状態で検出した。遺体頭部の上方に位置し、棺の上に置かれていた可能性がある。

溝状遺構 2区南端部で東西方向に、緩やかに弧を描いて流れる溝を2条検出した。埋土から古墳時代後期から平安時代の遺物が出土した。

掘立柱建物 SB101は1区東端部で検出された建物である。東西2間以上、南北3間以上の規模である。

2) 奈良時代～平安時代前期 大型の柱掘形を含む多数の柱穴と、土坑、井戸等を検出した。

柱穴群 一辺0.6mを超える方形の掘形を持つ柱穴をはじめ、300基を超える柱穴を検出した。10棟以上の掘立柱建物の存在が想定される。

土坑 SX102は1区中央部の東端で検出した土坑

である。東半部は調査区外であるため、形状は不明である。遺構の規模は、南北2.2m、検出面からの深さは0.1mである。埋土より、平安時代前期の遺物がまとまって出土した。
井戸 SE101 1区南西部で検出した。掘形は長径2.4m、短径2.0mである。井戸側の残存状況は不良であるが、平面形は1辺約0.9mの方形で、横桟縦板型の井戸側と考えられる。検出面より1.8mで直径0.45mの曲物の痕跡が検出されたが、木質は確認できなかった。

3) 古墳時代後期 壁穴建物、掘立柱建物など5棟以上が、当時期の遺構と考えられる。
壁穴建物 既存の建物工事の影響を受け、残存状況は不良である。

SB201 一辺約5mの方形の壁穴建物である。主柱穴4基、周壁溝とカマドの痕跡を検出した。時期を特定できる遺物は出土しなかった。

カマド 西壁中央部分で、焼土及び炭の小片が検出され、カマドの痕跡と考えられる。

周壁溝 北壁から北東隅と南東隅で、幅約0.15mの周壁溝の一部を検出した。

掘立柱建物他 一般的な掘立柱建物1棟と、複数の柱を長方形または溝状の掘形に立てた建物を3棟検出した。

SB202 2間×2間の規模の掘立柱建物である。すべての柱の建替が行なわれており、隣接して柱穴が掘削されている。当初 柱芯距離で東西3.4m、南北3.6mを測る。柱間は1.6～1.8mで、南北の柱列の方向はN11°Wである。

立替後 当初の建物とほぼ同規模であるが、南側に約0.5m移動し、棟方向はわずかに時計方向に振り、N12°Wである。

建物内 建物中央で土坑1基と柱穴2基を検出した。土坑埋土から、焼土と炭片を少量検出した。柱穴は小型で、外周する柱穴とは規模が異なる。

SB203 3間×3間の規模の建物で、柱芯距離で東西4.1m、南北3.5mを測る。南北の柱列の方向はN1°Eである。柱掘形は6基で、平面形はいずれも長方形である。

最も保存状態の良い南西の柱掘形は、短辺0.55m、長辺1.7m、深さ0.6mを測る。柱掘

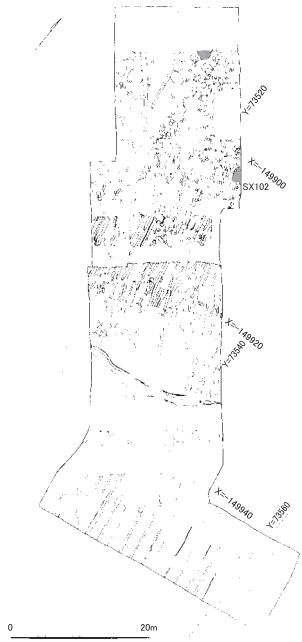


fig.274 奈良時代～平安時代前期の遺構平面図

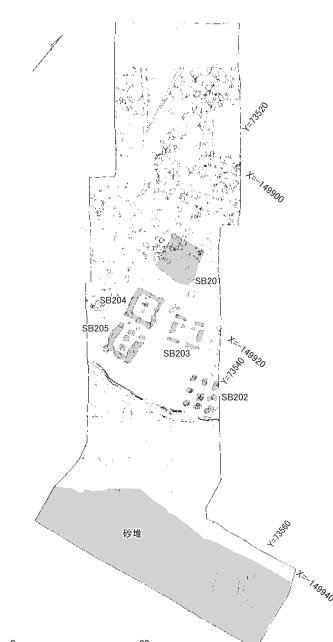


fig.275 古墳時代後期～飛鳥時代前期の遺構平面図

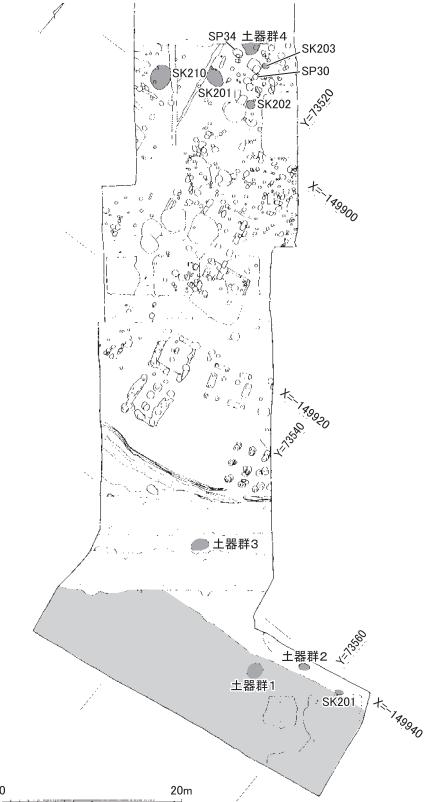


fig.276 古墳時代前期の遺構平面図

形の壁面はほぼ垂直に掘削されている。掘形底部で 2 本の柱の痕跡が確認でき、うち 1 例は木質が残存していた。

埋土の堆積状況から、掘形に 2 本の柱を据えた後、灰色粘質シルトと黄色粘土を交互に丁寧に埋めており、転圧を繰り返した状況が観察できた。柱間距離は、南北方向約 1.2m、東西方向約 1.6m である。

北側から 2 列目の柱の内側に、外周部の柱配置と並ぶ柱穴を 2 基検出した。掘形規模は外周部と比べて小さく、束柱の可能性が考えられる。

SB204 東西 2 間 × 南北 3 間の規模の建物で、柱芯距離で東西 3.4m、南北 4.0m を測る。南北の柱列の方向は N2° E である。外周する柱の掘形は、幅約 0.35~0.5m、深さ約 0.2~0.5m の溝を巡らし、柱位置をさらに深く掘って柱を建てている。掘形の埋土は、SB203 と同様に灰色粘質土と黄色粘土で丁寧に埋められている。

柱間距離は、南北方向約 1.2m、東西方向約 1.6m である。

立替が行なわれている柱があり、当初の長方形の掘形を切り込んで、新たに柱穴が掘削されている。また、柱穴底部には、0.1~0.15m 大の礫を埋設している例がある。

北側から 3 列目の柱の内側に、外周部の柱配置と並ぶ柱穴を 1 基検出した。規模は外周部と比べて小さいため、床を支える束柱である可能性が考えられる。

SB205 東西 2 間 × 南北 3 間の規模の建物で、柱芯距離で東西 3.6m、南北 3.7m を測る。南北の柱列の方向は N5° E である。外周する柱の掘形は、幅約 0.6~1.0m、深さ約 0.3m の溝内で検出されたものと、独立して掘削されたものがある。掘形の埋土は灰色粘質土と黄色粘土で丁寧に埋められている。

建物内に外周部の柱配置と並ぶ柱穴を 2 基検出した。SB202・203・204 と同様、規模は外周部の柱穴と比べて小さいため、床を支える束柱である可能性が考えられる。SB204 と規模と方向が類似しており、同時に存在した建物である可能性が高い。

4) 古墳時代前期 土坑、土器群を検出した。

SK201 直径約 1.6m、深さ 0.15m の円形の土坑である。

SK202 長径 1.05m、短径 0.95m、深さ 0.05m の橢円形の土坑である。埋土より、完形の土師器小型器台と小型鉢 2 点が出土した。

SK210 直径 2.7m、短径 2.2m、深さ 0.25m の不定円形の土坑である。土師器がまとまって出土した。

土器群 1 3 区中央部の浜堤上で検出した土器群である。

土器群 2 3 区東半部の浜堤と土壤化層の境界付近で検出した土器群である。

土器群 3 2 区南中央部の湿地状の落ち込みで検出した土器群である。

41. 押部遺跡 第4次調査

1. はじめに

押部遺跡は、押部谷町押部地区で実施された圃場整備事業に伴う昭和59、60年度の試掘調査によって発見された遺跡である。昭和61、62年（第1・2次）それぞれの年度の圃場整備事業に伴う調査では、弥生時代後期の溝や奈良時代の円面硯、弥生時代後期や古墳時代前期の竪穴建物などが検出された。平成4年度（第3次）には、現集落内の個人住宅建設に伴う発掘調査で鎌倉時代以降の建物の柱穴などが検出された。

当調査地は、第3次調査の東約50mの地点で、明石川の支流である西谷川の右岸、標高



fig.277 調査地位置図 1:2,500

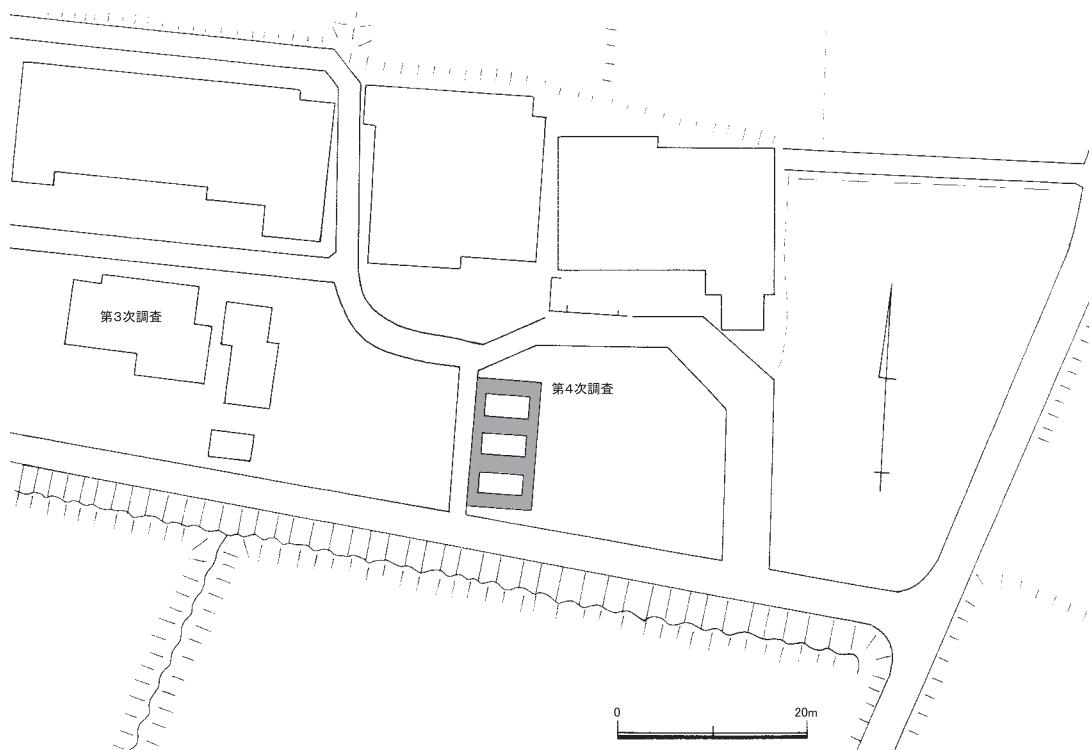


fig.278 調査範囲位置図

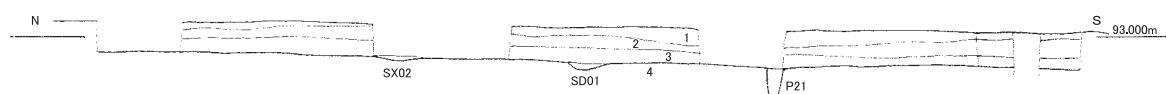
約92mの河岸段丘上に位置する。

2. 調査の概要

調査対象地は、第3次調査の成果及び当調査に先立つ試掘調査結果より、中世の遺構・遺物が検出されると予測された。

調査の方法 発掘調査範囲は、調査地平面図にあるように、「目」字状に建物基礎に入る部分を対象とした。現代の盛土などは重機により掘削し、それ以下を人力によって調査を行なった。また基準点測量を実施した。部分的に下層の掘り下げを行なった。

基本層序 基本層序は、1 現代盛土、2 茶褐色混礫泥砂、3 茶褐色泥砂（砂礫を含む）4 濁黄褐色混礫泥砂（遺構面）となる。北から南に下がる地形である。2、3層からの遺物出土量は僅かである。



- 1 現代盛土
- 2 茶褐色混礫泥砂
- 3 茶褐色泥砂（砂礫を含む）
- 4 濁黄褐色混礫泥砂
- 5 濁茶褐色混礫泥砂 (SX02)
- 6 暗褐色混礫泥砂 (P04)
- 7 濁茶褐色混礫泥砂 (P21)
- 8 褐色混礫泥砂 (SD01)

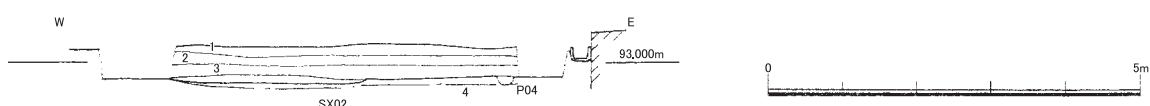


fig.279 調査区南北方向及び東西方向土層断面実測図

調査の概要 ピット26箇所、溝状遺構1条、落ち込み状遺構2基の遺構が検出された。4層の一部を掘削したが、この範囲については特に遺構、遺物は存在しなかった。

P3・P6・P9・P7は、柱間距離は、1.8～2.1mと一定しないが直線に並び、P7西側のP23・P22、P22の北へP16と並び2間×3間の南北棟の掘立柱建物になると考えられる。その他のピットについても検討を加えたが現状では、建物にまとまるものは見出しえない状況である。

各遺構からの出土遺物は少量であった。しかしながら南側SX02は、形状は不明であるが、深さ0.2mほどで、砂礫が堆積しており、遺構から13世紀頃の須恵器椀、土師器皿などが出土した。北側のP12からは、土師器鍋底部が出土した。これも同様の時期の遺物かと思われる。

3. まとめ

昭和61、62（第1・2次）年度の圃場整備事業に伴う調査では、弥生時代から古代にかけての遺跡が存在することが判明した。また平成4年度第3次では、現集落には中世頃の遺跡が存在していることが判明した。今回の調査でも同様にすくなくとも中世頃の遺構面がひろがっていることが確認された。

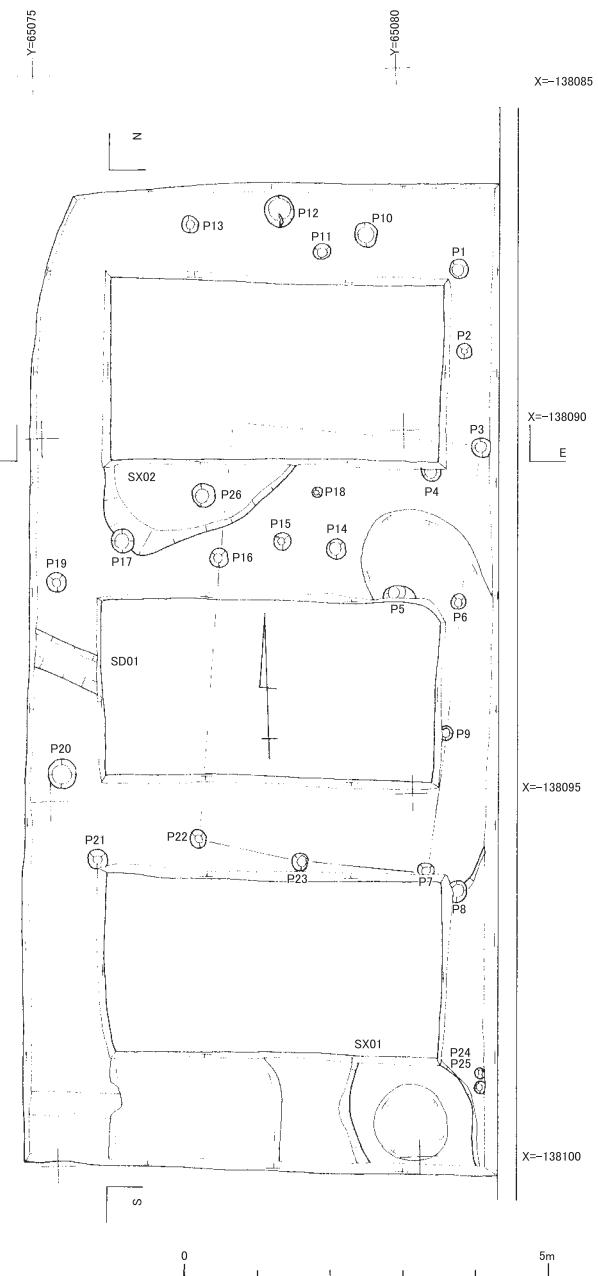


fig.280 調査区平面図



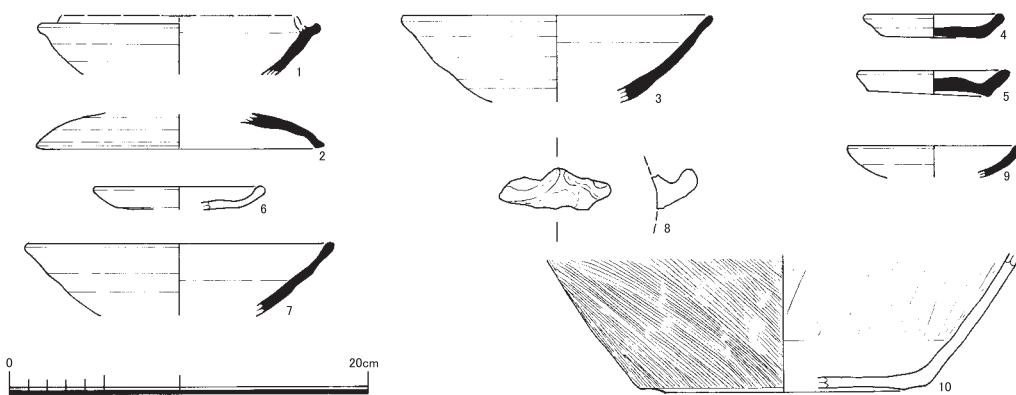
fig.281 P12遺物出土状況



fig.282 調査区全景（南から）



fig.283 調査区全景（西から）



1~5 包含層 6, 7 P21 8, 9 P03 10 P11
1~5, 7, 9 須恵器 6, 8, 10 土師器

fig.284 出土遺物実測図

42. 玉津田中遺跡 第38次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は、明石川中流域の左岸の沖積地に広がる遺跡で、縄文時代晚期から近世に至る豊富な遺構、遺物が検出されており、特に弥生時代中期以降、明石川流域を代表する拠点集落として知られている。

今回の調査は、大規模貯水槽設置工事に伴い、文化財に影響する部分について実施した。兵庫県教育委員会により発掘調査が実施された田中特定土地区画整理事業地の、ほぼ中央に位置する。

2. 調査概要

調査区は2箇所に分かれており、北側を1区、南側を2区とした。

基本土層は、区画整理に伴う整地・盛土層下に、現代の耕土層、旧耕土層・旧床土層を6層確認した。(fig.286 土層2～7)

灰白色シルト質砂質土より上層の耕作土 (fig.286 土層2～5) からは、古墳時代後期から中世の遺物が、ごく少量出土した。淡灰色粘質土より下層の耕作土 (fig.286 土層6・7) からは、古墳時代後期から平安時代の遺物が少量出土し、2区では、最下層の耕作面（土層8上面）で水田区画が検出された。

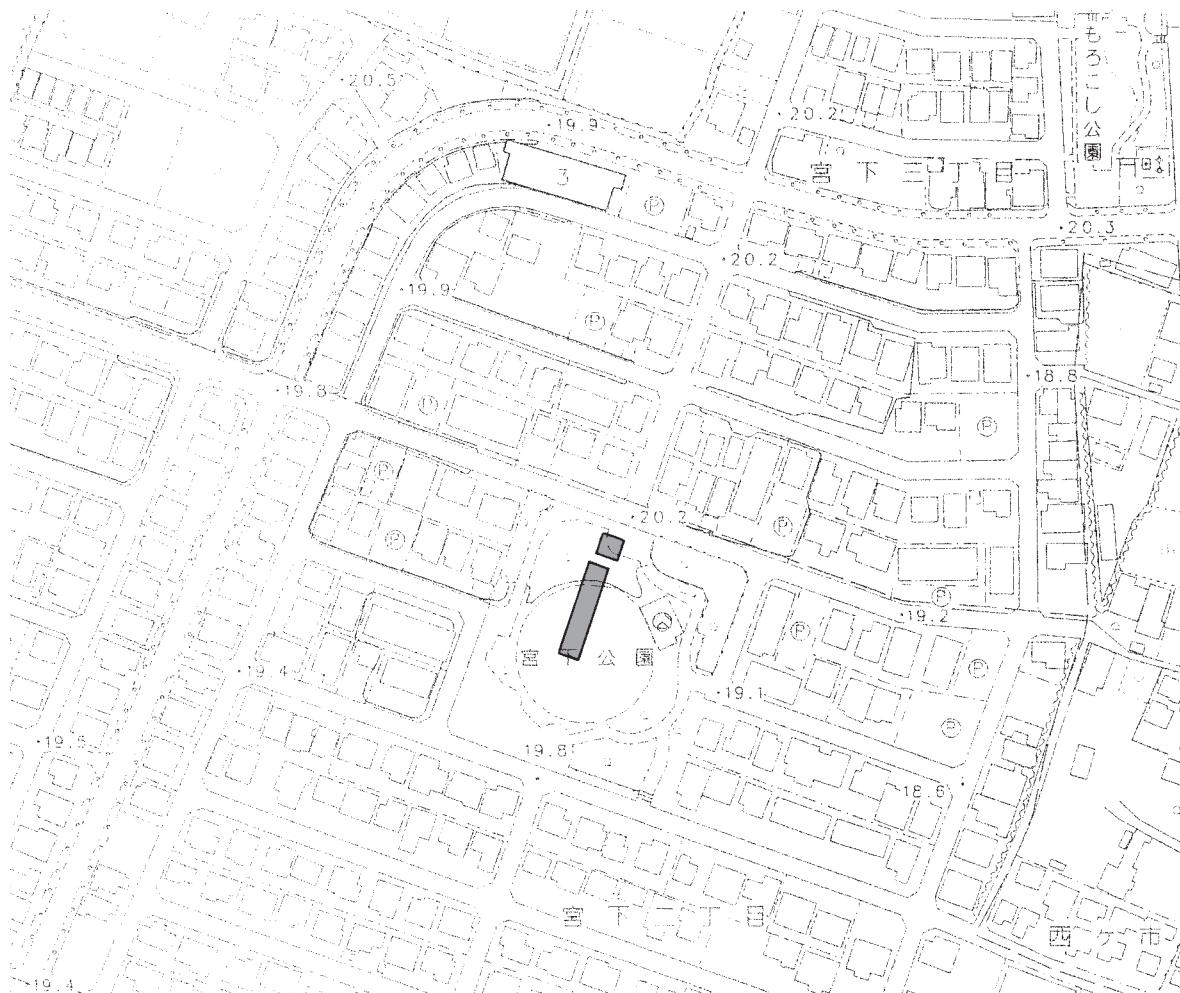


fig.285 調査地位置図 1:2,500

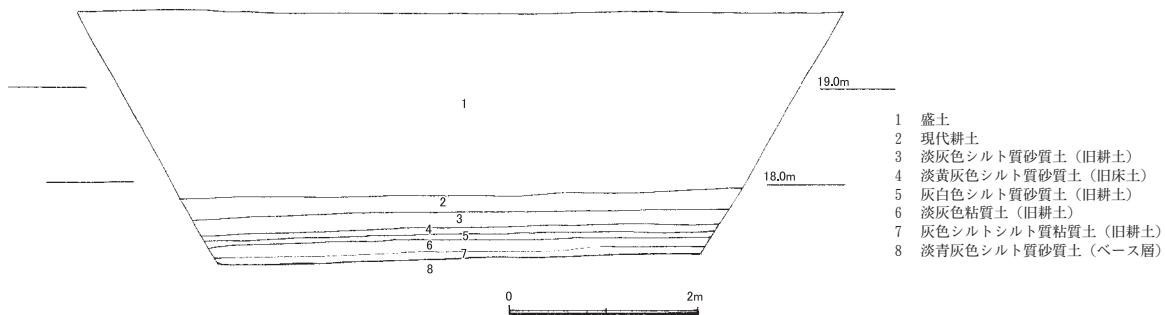


fig.286 1区西壁土層断面実測図

1区 最下層の耕作土である灰色シルト質粘質土から、古墳時代後期から平安時代の遺物が出土した。いずれも小片で磨滅していることから、耕作時に搅乱されている遺物と考えられ、当耕作面の時期は特定できない。偶蹄目の足跡が数箇所で検出されたが、畦畔等の痕跡は確認できなかった。

2区 堆積土層は、1区と同様である。最下層の耕作面から、偶蹄目の足跡と共に畦畔の痕跡が数箇所検出された。この水田は、水田間の段差が検出されたのみで、畦畔は後世の耕作により失われており、水田全体の形状、規模は明らかでない。水田区画の方向は、この地域の近現代水田区画の方向とは違っており、周辺で見つかっている古墳時代の畦畔の方向と近似する。

耕作土層からは、古墳時代後期から平安時代の遺物が少量出土したが、1区と同様、耕作時の搅乱を受けていると考えられ、耕作面の時期を特定することはできない。

3.まとめ

今回の調査区は、古代から現代に至るまで、耕作地として利用されたことが確認できた。これまでに実施された周辺の調査成果でも、古墳時代中期の畦畔が僅かに検出されているのみで、遺構・遺物の存在が希薄な地域であることが確認されており、生産域として利用されたと考えられる。

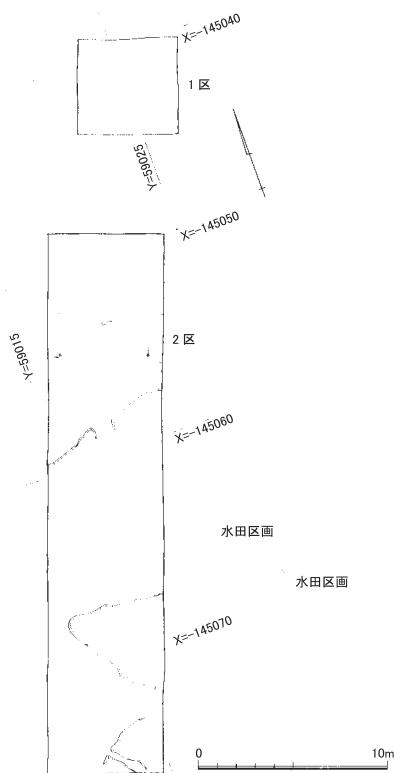


fig.287 調査区平面図



fig.288 1区全景

43. 玉津田中遺跡 第39次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は、西区玉津町～平野町にかけて所在する遺跡で、明石川中流域左岸の沖積地や段丘上に立地している。当遺跡における発掘調査は、兵庫県教育委員会や神戸市教育委員会等によってこれまでに40回近く行なわれ、竪穴建物や平地式住居、掘立柱建物、方形周溝墓、水田跡といったさまざまな遺構が確認されている。弥生時代全般にわたって居住域、墓域、生産域が広がっていたことが明らかになっているが、古墳時代の集落跡や、中世の居館跡なども確認されており、神戸市域においても特に著名な遺跡として知られている。

今回の調査地が位置する平野地区でも、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴建物などが検出されており、同様な遺構・遺物が確認されることが調査前から予想された。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴って、工事の影響を受ける部分について発掘調査を実施した。

基本層序 今回の調査地周辺は既に圃場整備事業が実施されており、その際に施工された盛土が今回の調査地においても確認された。この盛土は、大きく3層に分かれるが、厚さは約1.3m程度になり、その下層に圃場整備直前まで使用されていた耕土（fig.291-1層）が部分的に遺存する。その下層に数枚の旧耕土、（fig.291-2～5層）、さらに下層に中

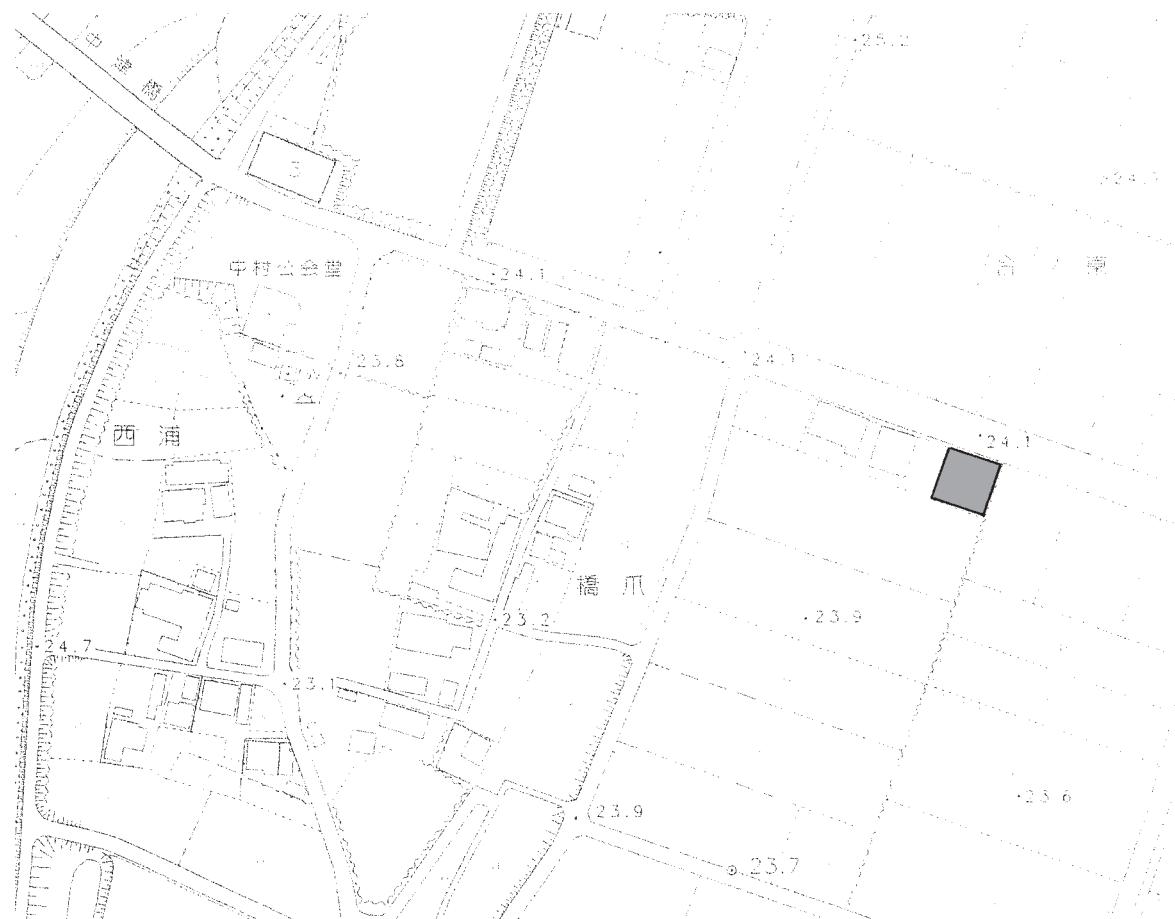


fig.289 調査地位置図 1 : 2,500

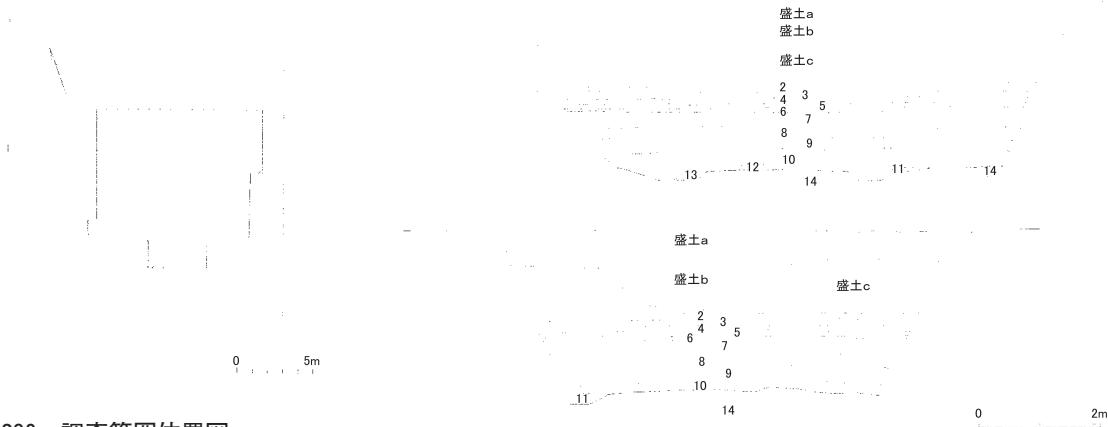


fig.290 調査範囲位置図

1 耕土 2 灰黄色シルト質細砂 3 灰色シルト質細砂 4 (黄)灰色シルト質細砂
5 黄灰色～灰色シルト質細砂 6 灰褐色シルト(中世須恵器・土師器少量含む)
7 (暗)灰色シルト～粘土 8 灰色シルト～粘土(平安須恵器・土師器混じる) 9 暗灰色シルト～粘土
10 濁灰色シルト～粘土(下部に弥生土器含む) 11 濁青灰色極細砂質シルト 12 淡灰色極細砂～細砂
13 灰色砂礫(シルト～粘土混じる) 14 淡灰色～淡青灰色砂礫

fig.291 調査区北壁(上段)・西壁(下段) 土層断面実測図

世の遺物を含む灰褐色シルトが存在するが、この面では遺構は確認されなかった。

(fig. 291-7～10層)は灰色系のシルト～粘土で、湿地状堆積を示している。10層には植物遺体が多く含まれている。その下層の、現地表下約2.8m付近で淡灰色～淡青灰色砂礫(同14層)上面を検出し、この面で2条の溝状の落ち込みを認した。

溝状落ち込み 溝状落ち込みは、調査区北端中央から南西方向に走る1条と、調査区西端付近を南北方向に走る1条が調査区西端中央付近で合流し、さらに南側に延びる。

東側の1条からは弥生土器と木製品が、西側の1条からは板材が出土している。また上層の10層からも弥生土器が少量出土している。これらの土器は小片で整理作業が未了なため、現段階では明確な時期を示すことはできない。10層からの出土土器に体部外面にタタキメが認められるものが数点含まれることや、今回の調査地の東側で実施された第15次調査の成果を合わせて考えると、弥生時代後期～古墳時代前期頃の時期が考えられるが、詳細については今後の整理作業の中で検討したい。

3. まとめ

今回検出した溝状落ち込みについては、湿地状堆積物が上位に堆積していることから、恒常的に水の流れる人為的な溝としての機能は認めがたい。周辺地での調査成果を考慮すると、河道や自然流路といった自然地形と考えられる。落ち込み内の砂礫層に似たものは、今回の調査地の東側の第15次調査地でも確認されており、やはり上層は湿地状堆積層で埋没している。今回確認した砂礫層も、この流路と一連の堆積層と考えられる。

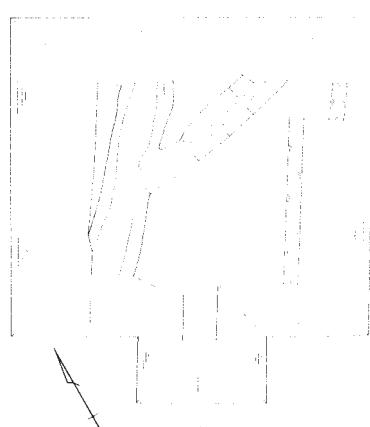


fig.292 調査区平面図

なお、砂礫層よりも下層については、調査区東壁際で断面調査を実施したが、砂礫層を0.2m程度掘り下げた段階で湧水が認められ、さらに下層については掘削不能

であったため、十分には確認できなかったが、周辺地での調査成果を考え合わせると、遺構・遺物は希薄になるものと考えられる。

44. 枝吉遺跡 第2次調査

1. はじめに

枝吉遺跡は、北から南に延びる段丘裾に立地している。これまで、西区No.151遺跡として、平成16年度に調査が行なわれている。今回、遺跡名を枝吉遺跡と改名し、2次調査として調査を行なっている。遺跡の周囲には、西の段丘上には弥生時代前期の遺跡として著名な吉田遺跡、東には森友遺跡、北には曙町遺跡・出合遺跡が存在している。また、南には、弥生時代～平安時代にかけての複合遺跡である吉田南遺跡が広がる。なお、前記の吉田遺跡と重なって、調査地西の段丘上には、15世紀後半築造とされる枝吉城跡がある。

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける部分について実施した。盛土については重機によって掘削を行ない、遺構については人力により検出等を行なった。調査の結果、近世から弥生時代の遺構面を確認した。

一部、削平を受けているが、調査区南半に弥生時代末と考えられる遺物包含層が確認されている。

基本層序としては、盛土下に、床土と旧耕土があり、GL-0.5m前後で、厚さ0.05mほどの灰褐色細砂混シルトの弥生時代末の遺物包含層となる。北半では、遺物包含層はほとんど削平により失われており、地山検出面で中世・近世の遺構を検出している。南半では、遺物包含層が残存しており、遺物包含層掘削後、弥生時代末と考えられる遺構を検出した。



fig.293 調査地位置図 1:2,500

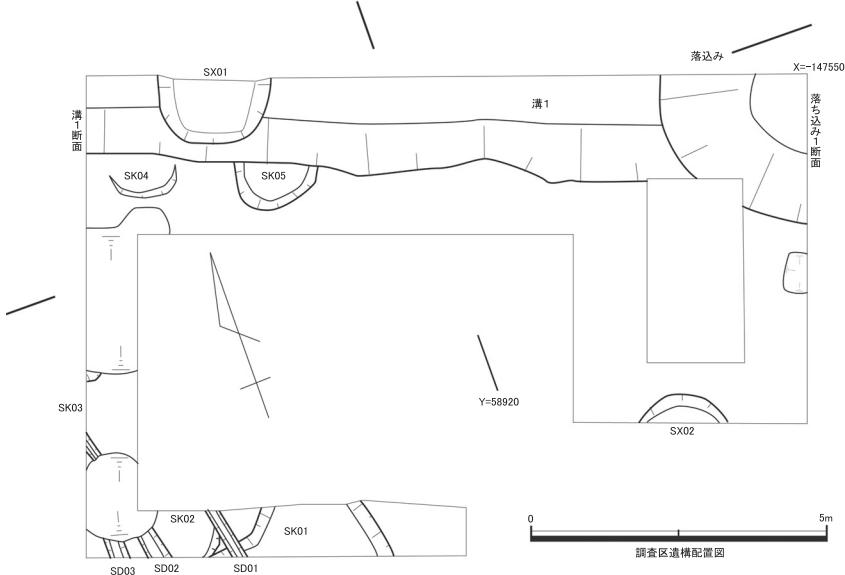


fig.294 調査区平面図

調査区北東端で落ち込み1を検出した。この落ち込み1は、後述する溝1を切っており、16世紀代の遺構と考えられる。規模は、半径約2.5m、深さ0.5mを測る。なお、この遺構は、下層埋土がブロック状になっており、人為的に埋め戻された可能性がある。

SX01は、調査区北で検出した円形の落ち込みである。調査当初井戸とも考えられたが、断面観察の結果、溝1埋土を掘削後、埋め戻し時には溝1埋土上層の土で最終の埋め戻しが行なわれていると判断できたため、この遺構は、掘削後かなり短期間に埋め戻された遺構と考えられる。

溝1は、調査区北で東西方向に走る。この溝は、幅約2m以上、深さ0.5mを測る。調査区北の道路に近接しており、この道路が造られた当初の道路側溝であると思われる。なお、この側溝を伴う道路は、調査区の西にあった枝吉城の堀の手前で南に折れさらに西に折れて城の大手門に至ると考えられる。この溝1は、埋土からの出土遺物の時期から、16世紀末の枝吉城廃城後に埋没した遺構と考えられる。

SK01は、調査区南で検出した、最大幅約3mを測る土坑である。埋土には庄内並行期末～布留式古段階にかけての時期とおもわれる土器が多量に出土している。

SK02は、調査区南で検出した土坑である。SK01と切り合い関係にあり、SK01を切っている。またSD01に切られており、周囲の攪乱を含めて明確に遺構の範囲を確認できなかった。布留式古段階の時期とおもわれる土器が多量に出土している。

SK03は調査区南東隅で確認した土坑である。周囲が大きく攪乱による削平を受けており、遺構の範囲は明確ではない。SK02と一体のものである可能性もある。

SD01は、南東から北西に走る溝である。溝の規模は、幅約0.2m、深さ0.1mを測る。切り合い関係からSK01ならびにSK02より後出の遺構である。

SD02は、南東から北西に走る溝である。溝の規模は、幅約0.2m、深さ0.1mを測る。切り合い関係からSK02ならびにSK03より後出の遺構である。

SD03は、南東から北西に走る溝である。溝の規模は、幅約0.2m、深さ0.1mを測る。切り合い関係からSK02より後出の遺構である。

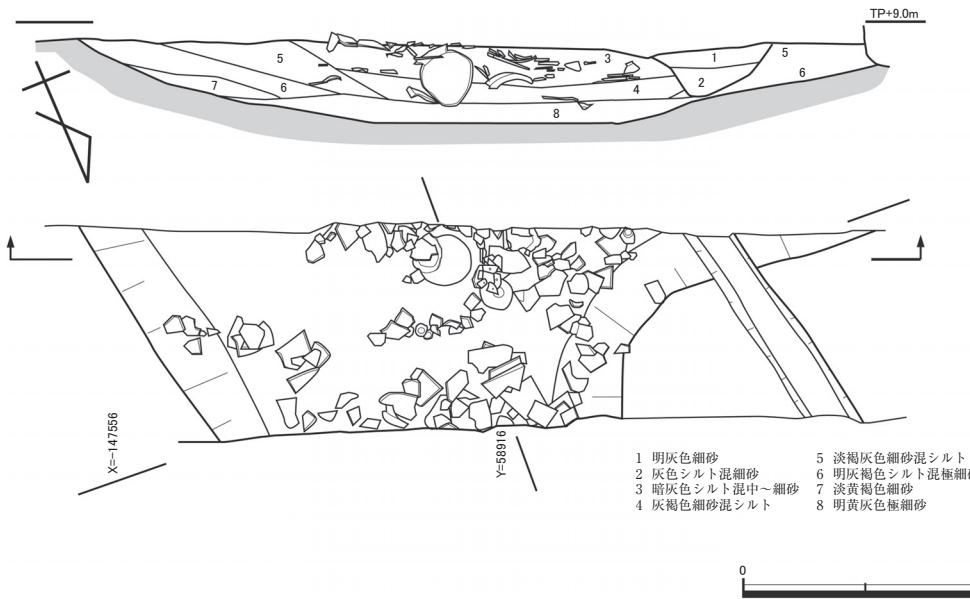


fig.295 SK01遺物出土状況実測図

8. まとめ

今回の調査では、調査区に近接する枝吉城関連と考えられる遺構が確認された。今後の調査の進展によっては城域における土地利用のあり方などさまざまな中世城館に関する新たな知見が得られるものとして注目したい。さらに、1次調査で確認されている庄内併行期の遺構に継続するとみられる布留式古段階の遺構が確認され、庄内併行期から布留式古段階にかけての集落の広がりが確認できた。さらに、吉備や讃岐など他地域の土器の搬入が認められ、玉津田中遺跡や吉田南遺跡に代表される交流の痕跡が枝吉遺跡の地点でも確認できることになる。

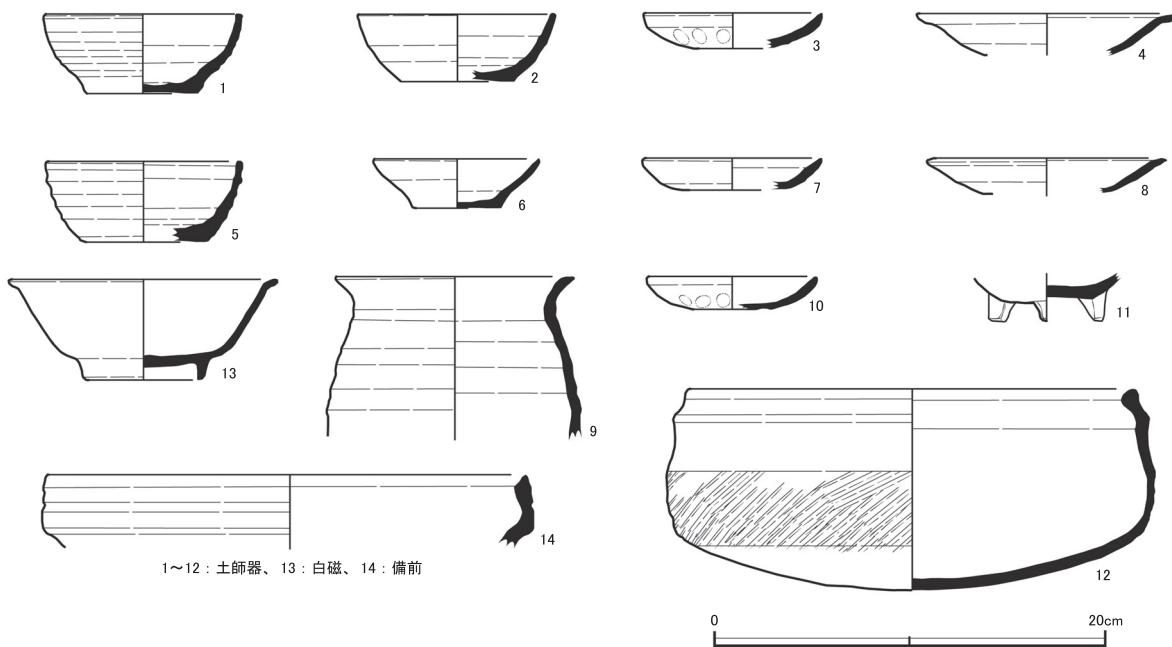


fig.296 SD01出土遺物実測図

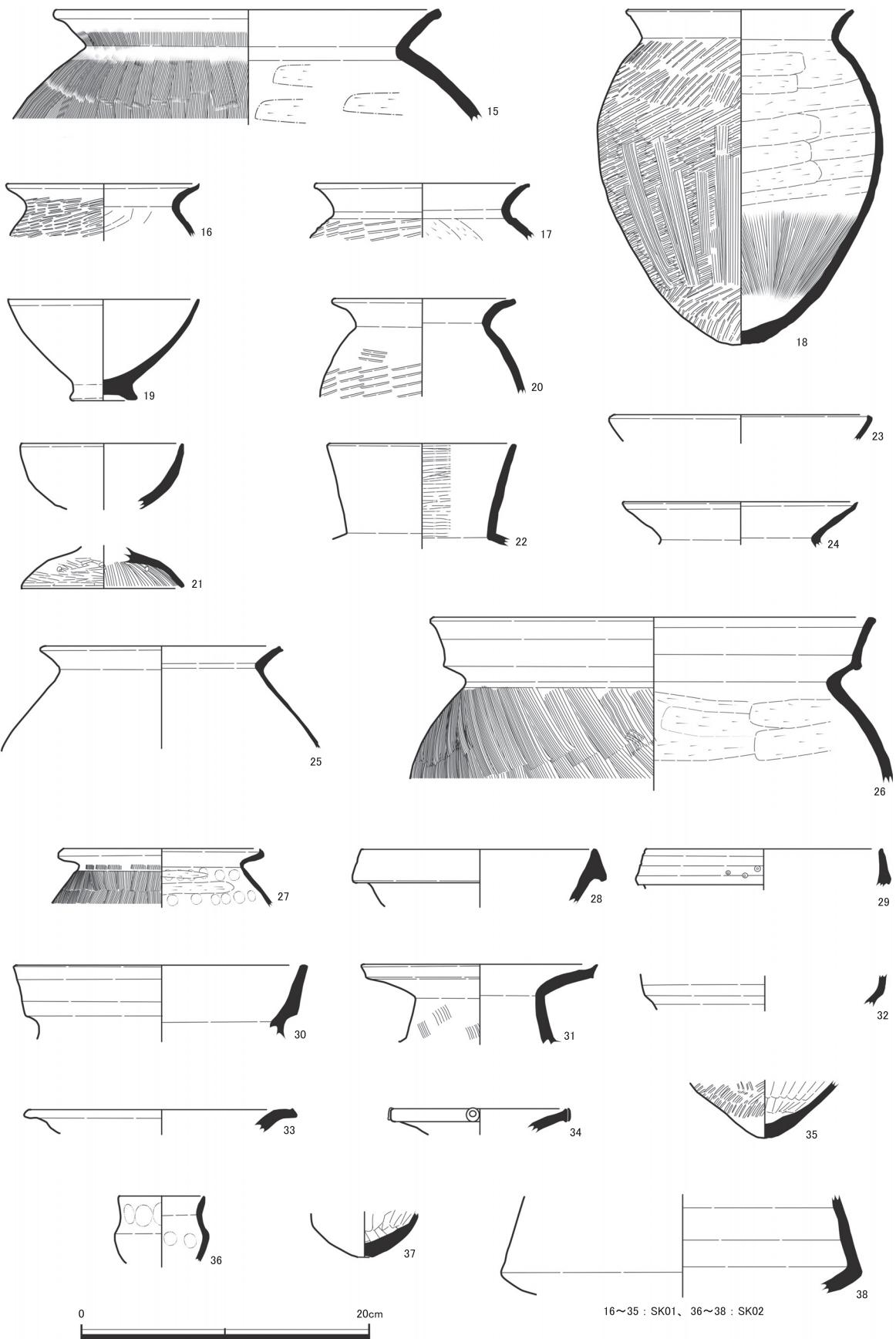


fig.297 SK01・SK02出土遺物実測図

45. 今津遺跡 第24次調査

1. はじめに

今津遺跡は明石川によって形成された沖積地の左岸に立地する遺跡で、弥生時代前期から後期、古墳時代、平安時代、中世の遺構・遺物が確認されている。昭和55年度の第1次調査で弥生時代中期の竪穴住居等を確認してからこれまでに23次の発掘調査を実施している。

当地周辺のこれまでの発掘調査の状況としては、北側で行なわれた第19次調査で土坑、北隣接地で行なわれた第20次調査では弥生時代中期を中心とする竪穴建物や土坑・溝などの遺構を確認している。また、北東側の第22次調査では古墳時代後期の柱穴、弥生時代中期の掘立柱建物・柱穴・溝・土坑・流路等が検出されるなど、弥生時代中期と古墳時代後期の集落の一部になると考えられる。

2. 調査概要

今回の調査は、試掘調査を行なった結果、土師器・弥生土器が出土したため宅地造成に伴い埋設管の人孔を設置する部分2箇所を調査対象として約10m²について発掘調査を実施した。調査は、盛土・耕作土・旧耕土を重機により除去し、以下の層は人力により遺構・遺物の検出作業を行なった。

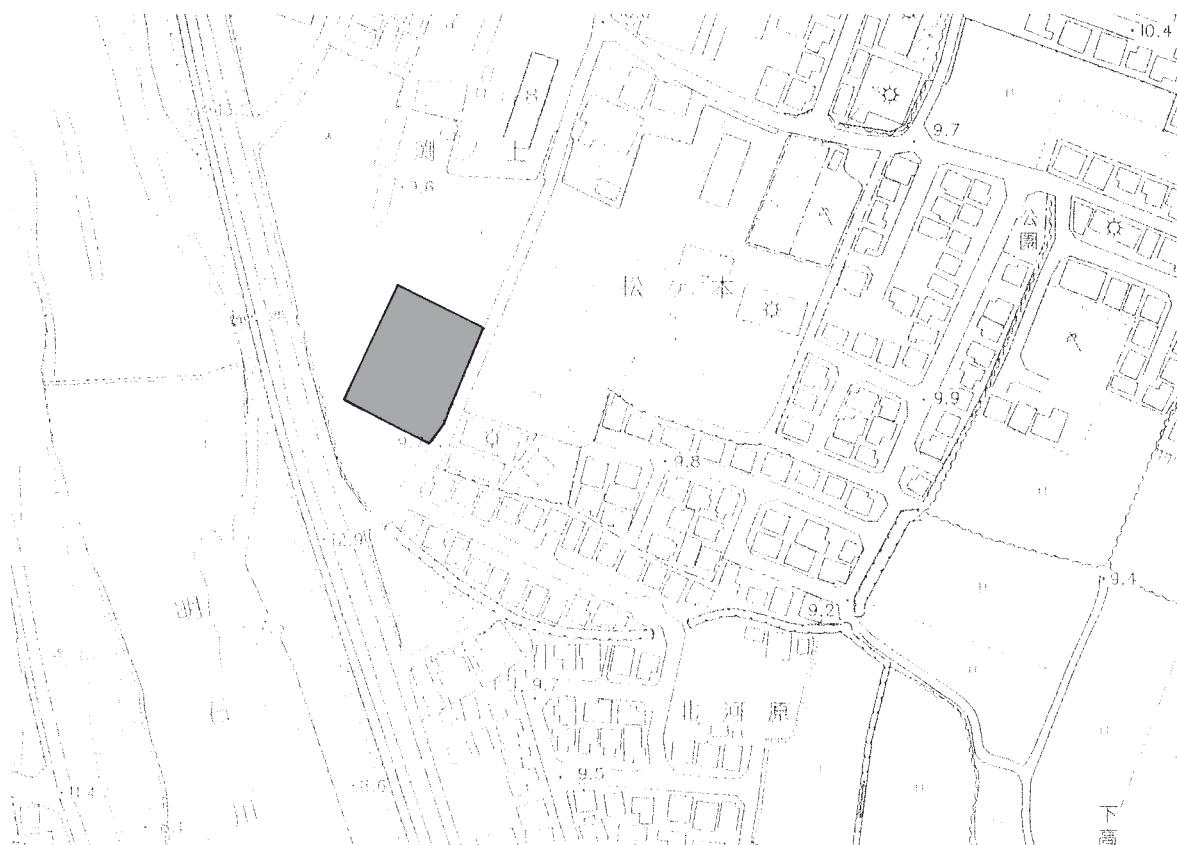


fig.298 調査地位置図 1 : 2,500

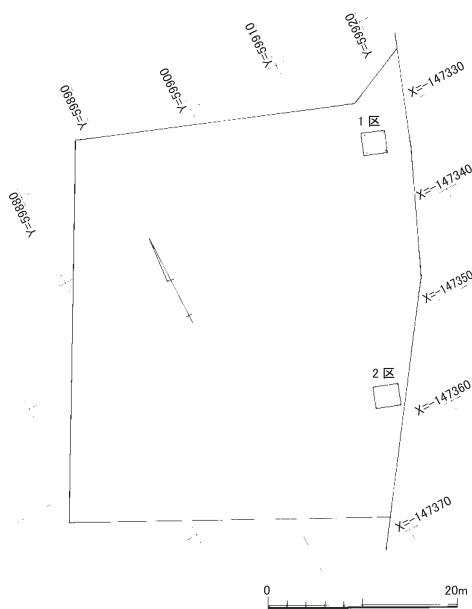


fig.299 調査範囲位置図

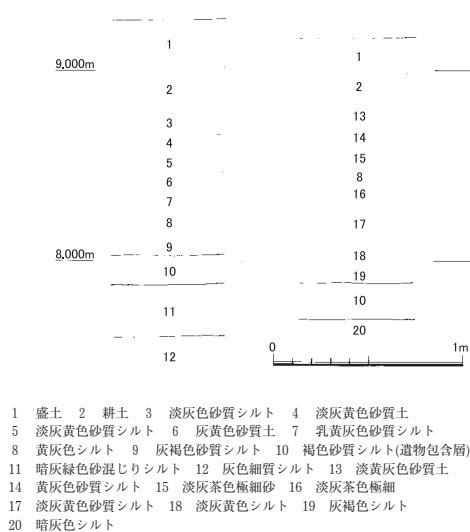


fig.300 土層断面実測図
(左 1区南壁土層断面部分・
右 2区東壁土層断面部分)

基本層序 調査地の基本層序は、盛土・耕作土（標高約 9 m）、近世から中世の旧耕土である淡灰色砂質シルト・淡灰黄色砂質土・灰黄色砂質土の順で堆積し、弥生時代中期の遺物包含層である褐色砂質シルト層となる。なお、その下層については G.L. - 2.7m（標高 7.6m）まで確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。

1区 宅地造成地の東側の道路に面した北側の人孔部分約 4 m²が調査対象となる。現代の耕作土の下層には近世～中世の水田層が確認でき、G.L. - 2.3m（標高 8 m）で弥生時代中期の遺物包含層である褐色砂質シルトが水平堆積している。この層からは十数点の弥生土器が出土したが、遺構は確認できなかった。

2区 1区の南側で人孔部分約 6 m²が調査対象となる。基本層序は1区とほぼ同じであるが、遺物包含層である褐色砂質シルトからの出土遺物は少なく遺構は確認できなかった。

3. まとめ

今回の調査は、調査面積が狭小であったため遺構の確認には至らなかった。ただ、1区と2区の遺物出土量を比較してみると、1区の方が多く比較的大きめの遺物が見られるが、2区の出土量は僅かでかなり磨耗している。1区は第20次調査で検出した竪穴建物に近く、集落の中心部に近いと思われるが、2区は集落の縁辺部に近づいて、さらに南に向かうと遺構や遺物の出土量は希薄になると思われる。

46. 新方遺跡 第50次調査

1. はじめに

新方遺跡は、1970年の山陽新幹線建設に伴う発掘調査を皮切りに、これまで49次の調査が実施され、縄文時代晩期以降近世に至るまで継続する遺跡として周知されている。とくに縄文時代晩期の遺構は検出されていないが、弥生時代前期から古墳時代全時期に至る明石川下流域の歴代拠点集落として知られるところである。

新方遺跡のうち遺跡の西部、明石川左岸の微高地に位置する今回の調査地である野手・西方地区は、1996年に土地区画整理事業が計画され、事前の試掘調査の結果、事業区域内全域において弥生時代から中世の埋蔵文化財の存在が明らかになった。以降6次にわたる調査が実施され、弥生時代前期～中期の人骨の残存する埋葬遺構や古墳時代中期～後期の集落、奈良・平安時代の掘立柱建物群が検出されている。

今回の調査地は、土地区画整理事業区域内の北東端にあたり、隣接する敷地の試掘調査において遺物包含層が確認されていた。今回の個人住宅建設においては、盛土による造成工事が行なわれているが、基礎工事にあたって土壤の柱状改良が実施されるため、建築基礎部分全域について発掘調査を実施することとなった。



fig.301 調査地位置図 1:2,500

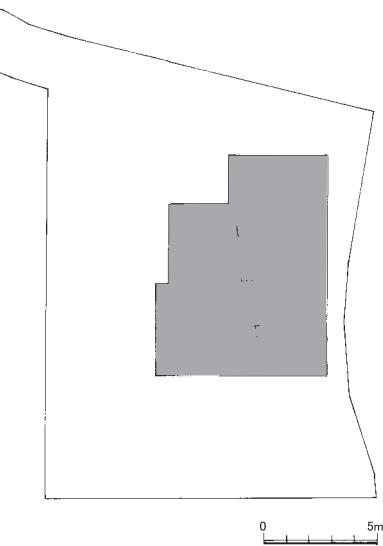


fig.302 調査範囲位置図

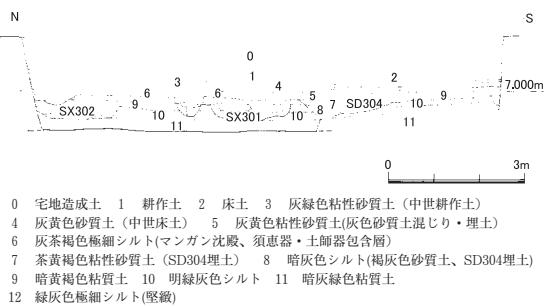


fig.303 調査区東壁土層断面実測図

2. 調査概要

調査の経過 調査は、掘削土の仮置き地が限定されることから、建築予定地の先ず北半について造成土・旧耕作土、中世耕作土と考えられる灰緑色粘性砂質土と灰黄色砂質土を重機械により除去し調査作業を進め、北半分の調査終了後、南半分については掘削土砂を反転する形で発掘調査を実施した。しかしながら、連続する遺構の場合は遺構名をそのまま用い、遺物の取り上げは、北半を北区、南半を南区として行なった。概要の記述は連続する遺構については一つの遺構名を用いた。

調査の概要 概ねの調査地の層序は、約0.8m前後の造成土が盛られ、その下に厚さ0.2m前後の近現代の耕作土がみられる。耕作土の下に中世以降の水田耕土灰緑色粘性砂質土・灰黄色砂質土が堆積し、この上面で溝 SD01が検出されている。その下層に須恵器・土師器・瓦を含む灰茶褐色極細シルトが厚さ0.25mで、調査区全域に水平堆積している。この遺物包含層下の茶褐色粘性砂質土上面から掘り込まれた状態で竪穴建物 SB01・土坑 SK01と方形掘形の柱穴 6ヶ所を検出した（第1遺構面）。

第1遺構面を形成する弥生土器を含む茶褐色粘性砂質土を取り除くと暗黄褐色粘質土となり、第1遺構面で検出できなかったと考えられる方形掘形を主体とする柱穴群が弥生時代の遺構を切って検出された（第2遺構面）。この方形掘形を主体とする柱穴群からは縄釉陶器片が出土している。第2遺構面を記録した後、弥生土器を含む遺構を精査して、SD301・SD302・SD303・SX301・SX302・SX304を検出し第3遺構面としたが、SD303・SX304については土層断面の精査・検討の結果、茶褐色粘性砂質土上面から掘り込まれた古墳時代以降の遺構であると考えられた。

したがって調査は3回の記録作業を実施して記録保存を行なったが、概ねの遺構は古墳時代から奈良・平安時代以降の遺構面と弥生時代の遺構面の2面で検出された。

3. 主要検出遺構

古墳時代以降の遺構 SD01 現代の耕作土直下で調査区南側中央から北東隅に流れる中世の旧耕作土を穿って掘られた幅0.5~0.9m、深さ0.3mの断面U字形の素掘り溝である。埋土の灰黄色砂質土内から須恵器・瓦片が出土している。

SK01 調査区北部西よりで検出した南北1.6m、東西1.3m、深さ0.15mの隅円長方形の土坑である。断面形は皿状をしている。埋土内からは古墳時代須恵器高环脚部片が出土しており、周辺の柱掘形によってきかれている。

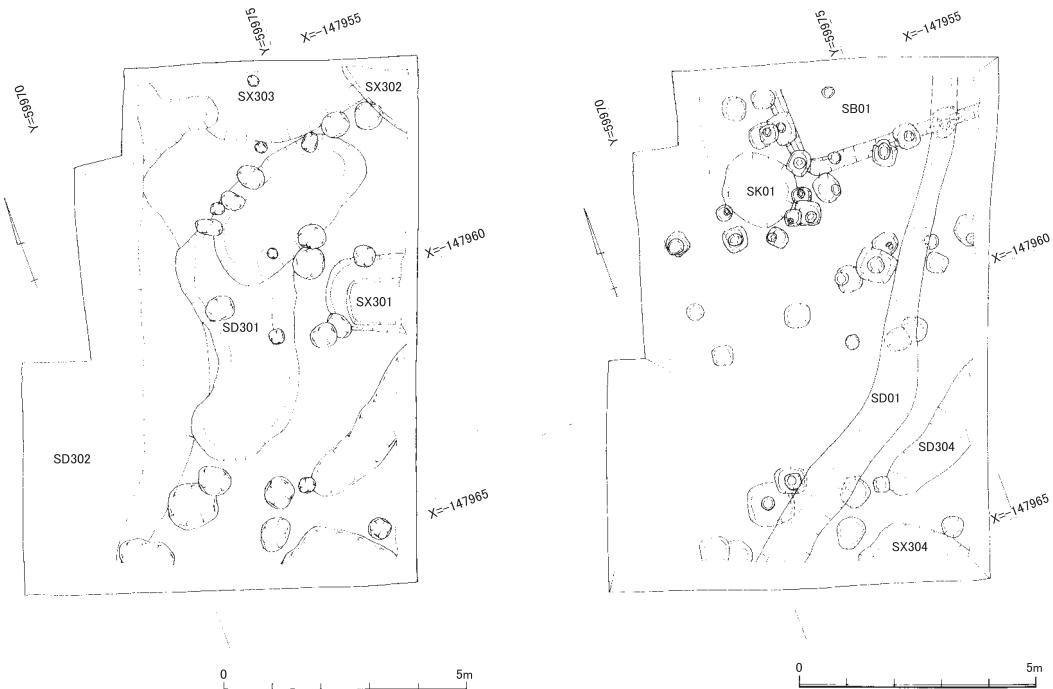


fig.304 第1遺構面平面図

fig.305 第2遺構面平面図



fig.306 北区第1遺構面全景（北から）



fig.307 北区第2遺構面全景（北から）

SB01 調査区北部北東辺で検出した方形の竪穴建物の南西隅部である。北東側は調査区外となっている。南側辺で3.5m以上、壁体は0.14m以上が残存し、壁側に幅0.2m、深さ0.08m前後の周壁溝がめぐる。竪穴埋土内からは土師器細片がわずかに出土している。

柱穴群 調査区北部北側と調査区南部南辺沿いで集中して検出された。とくに北部北側の柱穴群はほぼ真東西方向の柱列や真南北方向の柱列が確認できるが、調査区が限定されているため建物としてまとまるものはない。柱穴は一辺0.2~0.5m前後の平面形方形の柱掘形で深さ0.25m前後を残し、柱痕跡が明瞭なものが多い。

SD304 調査区南部東よりで検出した幅1.0m、深さ0.3m前後、断面形皿状の溝状落ち込みである。土師器・弥生土器片が出土している。

SX304 調査区南部南東隅で検出した不定形な落ち込みである。遺構の大部分は調査区外の東南側にある。深さは0.3mを計測し、底面はほぼ平坦である。

弥生時代の遺構 SD301 調査区中央部で検出した平面S字形に屈曲する溝状の落ち込み



fig.308 北区第3遺構面 SX301（西から）



fig.309 南区第2・3遺構面全景（北から）

である。幅1.8m～2.0m、深さは、北側で0.2m前後、南側で0.16m前後を計測し、北側が一段深くなっている。出土遺物は埋土上層の茶褐色砂質粘土から弥生土器壺頸部、石包丁、砂岩製太形蛤刃石斧などが出土地している。

SD302 調査区西辺沿いを南北に穿たれた断面V字形の溝である。溝の上端幅2.4m、底幅0.7m～1.0m、深さ1.1mを計測する。溝の埋土内からは弥生土器が多量に出土地している。

SX301 調査区北部東辺に接して検出した長楕円形の性格不明の土坑である。長径1.6m以上、短径1.6m、深さ0.3m前後を計測する。東西に土層観察用のセクションを残しつつ掘り進めた結果、長楕円形の掘形の南側に沿って幅0.98m、長さ1.1m以上、深さ0.3mの箱状のものを埋納した形跡が観察でき、厚さ0.05m前後の小口側の板材の痕跡も観察できた。北側側板の上では弥生壺形土器2個体が押し倒されたように出土地している。骨片等は確認できなかった。

SX302 調査区北東部隅で検出した、北東側に落ち込む断面舟底形の性格不明落ち込みである。深さは、0.3～0.4m前後を計測する。埋土の暗緑灰色砂質土の上層部からミニチュア土器2点、下層部から壺形土器1個体分が出土地している。

SX303 調査区北辺沿いを北に緩やかに落ち込む性格不明遺構である。深さ0.1m前後を計測する。淡灰色シルトを埋土とするが、堆積土である可能性もある。

4. 調査結果

当該地は、区画整理事業地の北東端にあたり、従来街区道路部分の調査に重点を置き、宅地予定地は盛土によって遺跡を保護した当時の調査状況では、遺跡の広がりを検証するには不十分であったが、今回の調査地まで遺跡の広がりを検証できたことはおおきな成果であった。また、今回の調査では SD301・SD302などの溝に SX301のような土坑状の遺構が近接して存在する状況は、当該地の120m南にあたる区画整理事業地内調査の第2次調査F区に近い状況であり、天台宗清水寺の所在する南北方向の微高地を中心にして溝を伴う埋葬地が広がっている可能性が想定できよう。今後の周辺における調査において留意が必要である。

47. 新方遺跡 第51次調査

1. 調査の概要

今回の調査地は、県道21号線(旧神明道路)と52号線(小部明石線)の交差点より南南西へ約20mの地点である。調査地の標高は約9mである。

古墳時代2面、奈良時代から平安時代頃の遺構面が1面、計3面の遺構面が検出された。

調査の方法 調査範囲は、調査地配置図に示すとおりである。調査掘削残土を置くために便宜的に北半と南半に分割して調査を行なった。現代の耕土などは重機により掘削し、それ以下を人力によって調査を行なった。遺構番号は遺構面ごとの番号と遺構通し番号を付し、3桁で表記することとした。第3遺構面下層の遺構、遺物の状況を確認するために、北半と南半それぞれに幅1mで、7mと4mの断割りトレンチを設定した。

基本層序 基本層序は、断面実測図に示すように上から1 現代耕土、2 現代床土、3 灰色泥砂、4 黄灰色泥砂、5 暗灰色泥砂、6 褐色砂泥(包含層1)、7 暗黄褐色砂泥 8 暗灰色泥砂(上面第1遺構面、7・8包含層2)、9 灰色砂泥(上面第2遺構面、包含層3)、10 青灰色泥砂(上面第3遺構面)、11 青灰色砂礫、12 暗青灰色泥砂となる。4~9層では、土師器、須恵器、に混じって弥生土器、サヌカイト片が出土する。10~12層は、断割りトレンチでの調査で、10層からは土師器や弥生土器の微細片が出土する。11、12層からは遺物は出土しなかった。

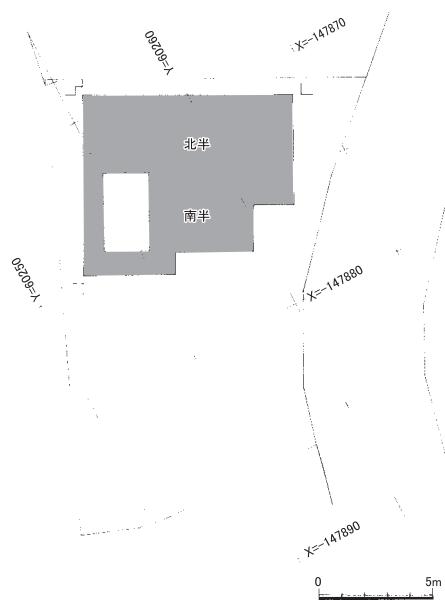
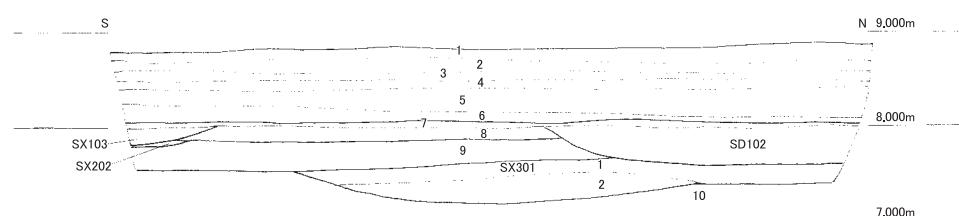
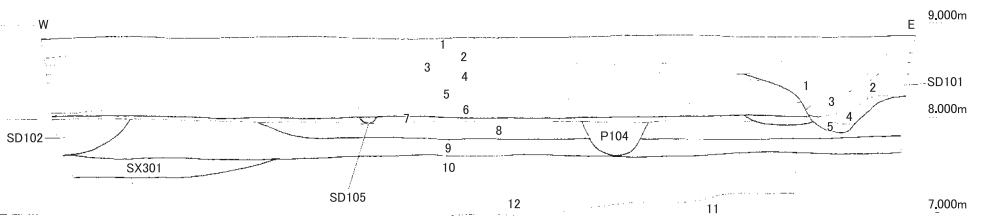


fig.310 調査範囲位置図



- 1 現代耕土 2 現代床土 3 灰色泥砂
- 4 黄灰色泥砂 5 暗灰色泥砂 6 褐色砂泥 7 暗黄褐色砂泥 (マンガンを多く含む)
- 8 暗灰色泥砂 9 灰色砂泥 10 青灰色泥砂 11 青灰色砂礫 12 暗青灰色泥砂



fig.311 東西壁及び南北壁土層断面実測図

断面図より、上層は水平に近い堆積であるが、第1～第3遺構面は、基本的に南西方向に向かって下がっていくようである。

包含層1からは、古墳時代から平安時代ころにかけての土師器、須恵器、少量の弥生土器、サヌカイト片と石斧や磨石などが出土した。包含層2からは、古墳時代ころの土師器、須恵器、製塩土器、少量の弥生土器、サヌカイト片などが出土した。包含層3からは、古墳時代ころの土師器、須恵器、少量の弥生土器、サヌカイト片などが出土した。遺物出土量は、28ℓ入コンテナで9箱である。

第1遺構面 第1遺構面では、土坑1基、溝状遺構5条、落ち込み状遺構3箇所、ピット12箇所が検出された。土坑(SK101)は、東西1.5m、南北約0.8m、深さ0.15mの長方形で、東半部は、底面から側面にかけて炭化物と焼土が検出された。遺構内からは、少量の土師器片が出土した。遺構の性格については不明である。

SD101は、東西断面実測図にもあるように、第1遺構面より上層から切り込まれた遺構である。土師器、須恵器が出土した。SX102は、SD101に切られる深さ0.1m未満の浅い遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。SD103は、北半から南半にかけて検出された幅0.6～1.0m、深さ0.2mの溝状遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。SD105は幅0.2m、深さ0.1mの蛇行する浅い溝状遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。

SX101は、東西1.5m、南北約1.4m、深さ0.2mの落ち込み状遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。遺構の北西隅で径0.2mの円形に焼土が検出された。SX102は、SD101に切られる深さ0.1m未満の浅い遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。SX103は、南半南西隅で検出された南西に下がる落ち込み状遺構である。深さ0.2mほど検出され、少量の土師器、須恵器片が出土した。

P101、P102、P104、P108、P109、P112は、直径0.7m前後、深さ0.4m前後である。P103、P105、P110は、直径0.4m前後、深さ0.3m前後である。P106、P107は、直径0.3m以下、深さ0.1m前後である。遺構規模から概ね3種に分類できるが、建物などにまとまるものは判らなかった。P111は、直径1.1mで一段落ち込み、さらに直径0.7m、深さ0.3mのピットである。底面に平安時代頃と考えられる須恵器甕口頸部が出土した。

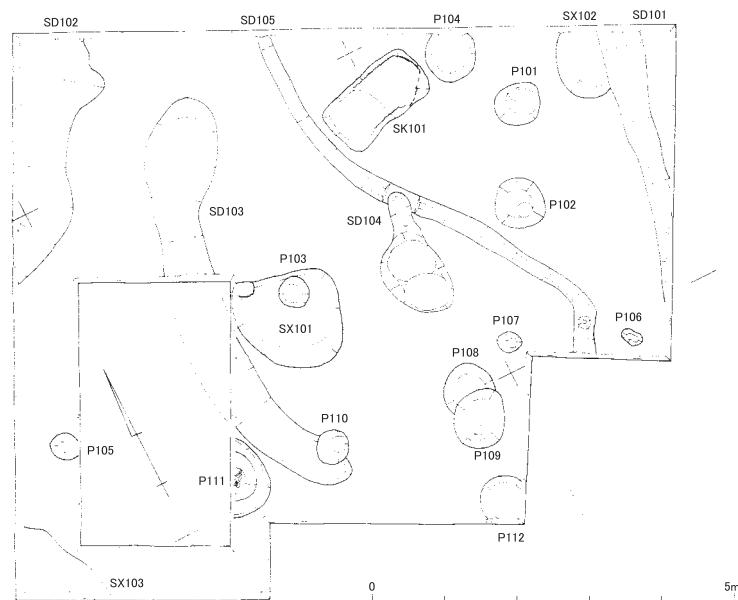


fig.312 第1遺構面平面図

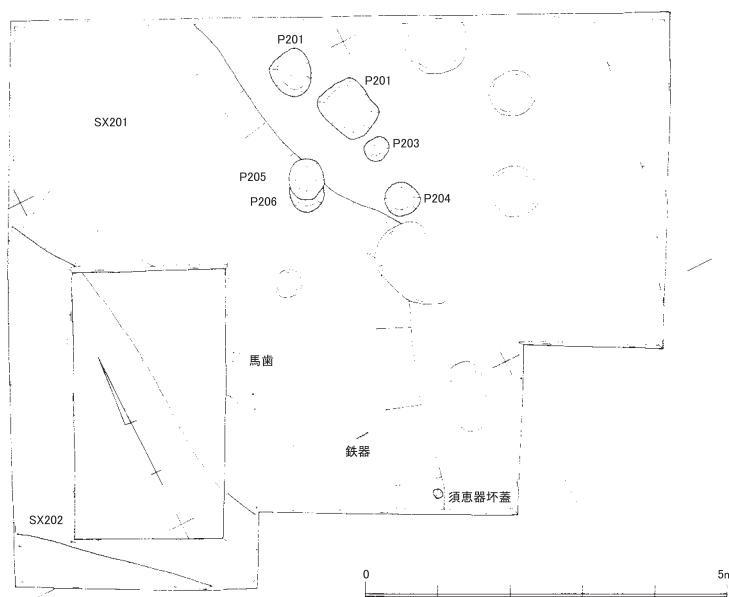


fig.313 第2遺構面平面図



fig.314 南半第1遺構面全景（北から）



fig.315 P110石検出状況（北西から）

またSD104は、当初溝状遺構として調査を行なった。北端部分は溝状遺構のように検出されたが、南半は直径0.7m前後、深さ0.4m前後のピットが2箇所切りあつたものを掘削した状況となつた。

第1遺構面は、出土遺物などからおおまかに平安時代頃と考えられる。

第2遺構面 第2遺構面では、落ち込み状遺構2ヵ所、ピット6箇所が検出された。SX201は、北半から南半にかけて幅3.0~3.6m、深さ0.2~0.3mの溝状に見える遺構である。南半部で、古墳時代の土師器、須恵器とともに、後期の須恵器坏蓋や鉄器、馬齒が出土した。SX202は、南半南部端で検出された落ち込み状遺構である。古墳時代の土師器、須恵器が出土した。

ピット6箇所は、北半中央に集中して検出された。規模はさまざま、また建物などにまとまる状況は見出せなかった。

第2遺構面は、出土遺物などからおおまかに古墳時代中頃と考えられる。

第3遺構面 第3遺構面では、落ち込み状遺構2ヵ所、溝状遺構1条、ピット8箇所が検出された。

SX301は、西側へ下がり南半西部で上がる遺構である。検出された深さは、0.4mほど

である。古墳時代の土師器、須恵器が出土した。SX301底面で検出されたP1からは、土製円板が2点出土した。SX302は、南半南部で検出された深さ0.6mほどの落ち込み状遺構である。図上では、SX301からSX302へつながるように考えられる。しかしSX302の堆積土がSX301に比べ濃色粘質であるため、別の遺構として取り扱った。

SD301は、北半でP301として検出していったが、南半の調査の結果南へ伸びる溝状遺構であることが判明した。少量の土師器、須恵器が出土した。

P302、P303、P308直径0.4m、深さ0.2mのピットで、柱間距離はばらつくが直線的には並ぶようである。P305、P309は直径0.2m、深さ0.1mの小ピットである。P306、P307は、直径0.5mと0.8m、深さ0.05mの浅い遺構である。

現状で第3遺構面は、層位的に第2遺構面より古い古墳時代中頃と考えられる。

第3遺構面以下 調査の方法の項で触れたが、第3遺構面の下層の状況を探るために、北半と南半に断割りトレーニチを設定して調査を行なった。東西断面実測図から第3遺構面は青灰色泥砂(10層)で、この10層を約0.6m掘削すると青灰色砂礫(11層)、暗青灰色泥砂(12層)となる。10層からは微量の弥生時代と考えられる遺物が出土した。11層は、南西方向に向かって下がっていくようである。

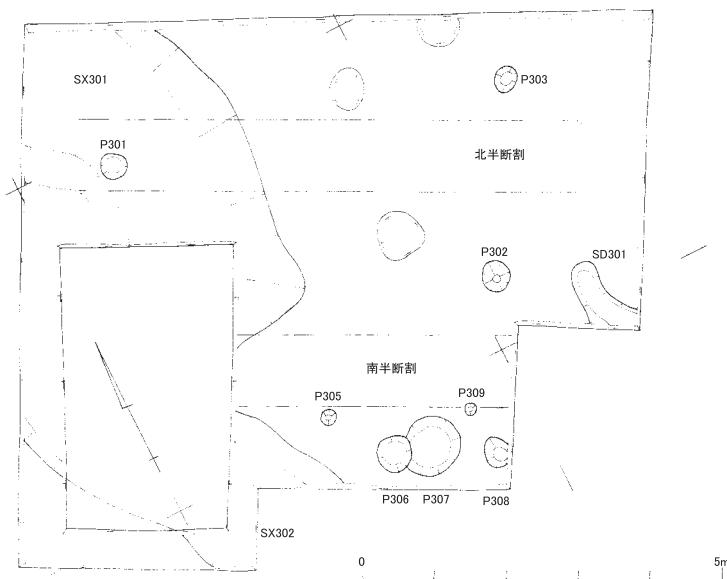


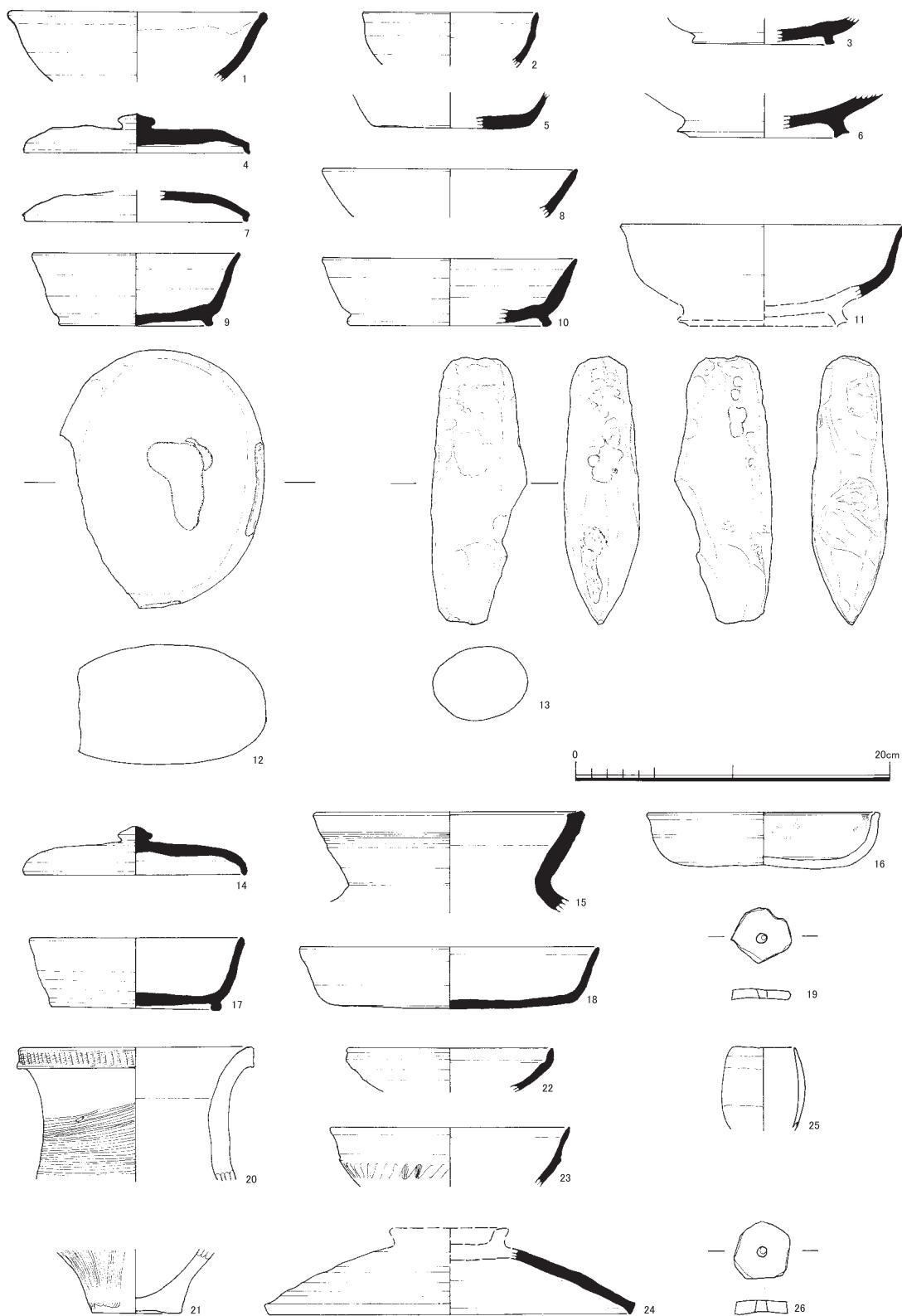
fig.316 第3遺構面平面図



fig.317 P111甕出土状況（東から）



fig.318 北半第1遺構面全景（南から）



1~13 包含層上層 14~19 包含層1 20~26 包含層2 3 転用硯

fig.319 出土遺物実測図 (1)

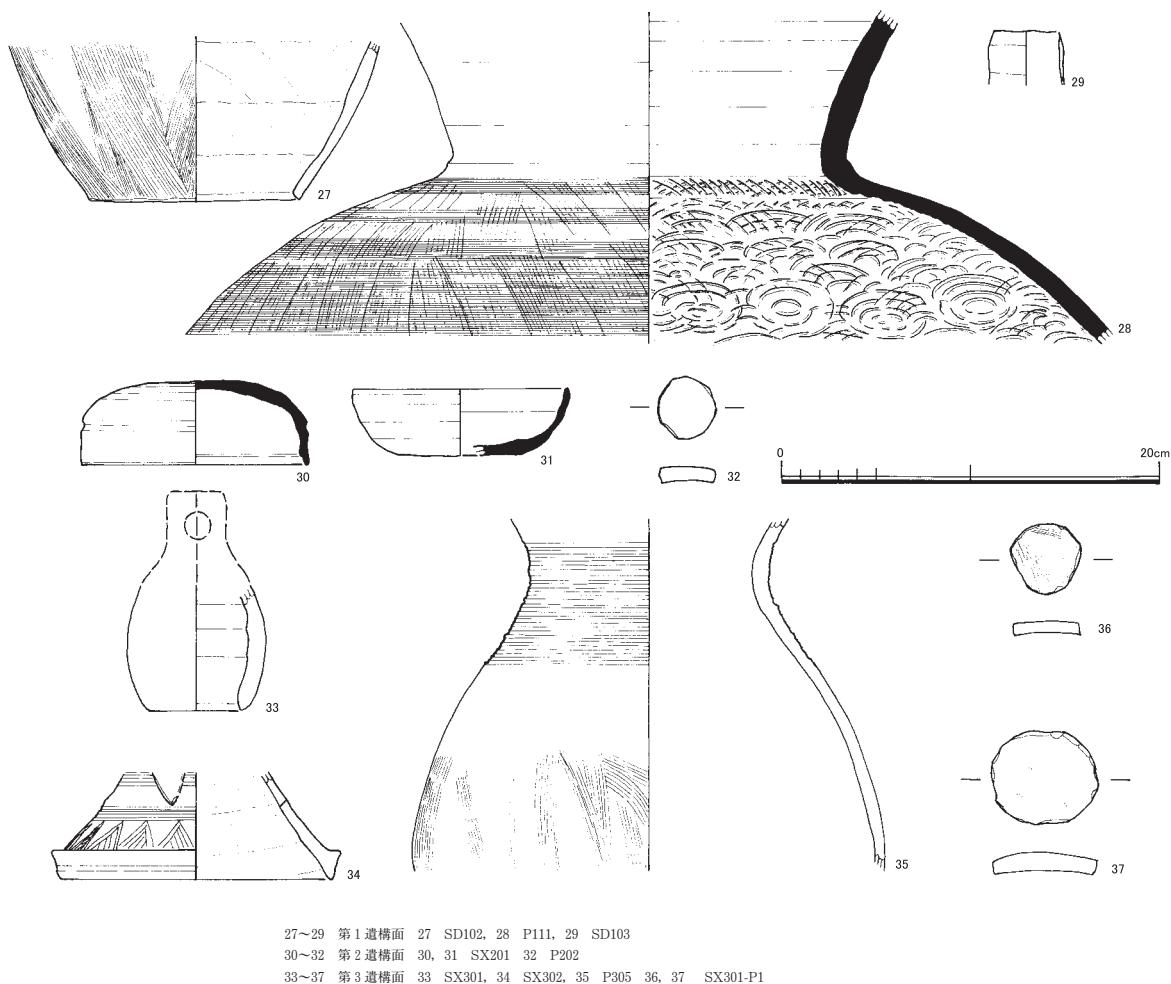


fig.320 出土遺物実測図（2）

3.まとめ

当調査3層から10層までの遺物出土量は、周辺の各調査での遺物出土量を下回るようである。弥生土器の占める割合もきわめて低い。また竪穴建物など居住域に直接結びつく遺構は検出されなかった。断ち割り調査から、南西方向に下がる地形が観察され、現地表下2mで弥生時代遺構面に到達しなかった。当調査区に隣接する第49次調査では、第1遺構面のみの調査であったが、平安時代から鎌倉時代の南北方向の流路状遺構が検出されている。

1/2,500地図を読むと小部明石線と当調査区の西側は地形的に高く、当調査区はやや低い谷状の地形となっている。また当調査区南の大字南方には「古川」というような小字名も存在するようである。

これらより小部明石線付近より低い南北方向に伸びる谷状の地形が想定される。当調査区はこの谷状地形東側の斜面地に位置するのではないかと考えられる。

また現状で述べた遺構、遺物の詳細な時期については、今後に期したい。

III. 平成24年度の保存科学調査・作業の概要

平成24年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

遺構の保存科学

兵庫津遺跡57次調査：石垣の切り取り～室内での保存処置

兵庫津遺跡第57次調査においては、1580年に築城されたとされる兵庫城の石垣・堀等が出土した。織豊期初期の石垣は全国的にも遺存する事例が少なく貴重な事例と言える。なお今回の調査契機となる事業が汚染土壤の除去であったため、現地での保存は困難な状況であった。そこで、石垣普請の特徴が良く表れている部分につき、切り取り保存することとなった。さらに最終的には支持台に固定し、展示公開できることを目標とした。

石垣の石材は自然石を主体とするが、礎石や石造品として加工された石材も使用されている。これらを野面積にした部分と控え積に積んだ部分があり、複数の集団が造営に従事していた可能性が指摘された。よって、これら2通りの積み方がわかる周辺を切り取り保存対象に設定した。切り取る範囲は幅約2.4m×高さ約1.5m×奥行約1.0mである。梱包資材等を含めた総重量はおよそ6tと考えられたが、埋蔵文化財センターへ持ち帰った後の作業や今後の運用の面から、かなりの軽量化が必要であり、現地を搬出する時点の重量を2t以内に収める事を目標とした。



fig.321 石垣出土状況



fig.322 ウレタンフォーム梱包作業



fig.323 トンネル掘削作業



fig.324 石材切削作業

まず、上面に見えている裏込め石については後に原位置に復元するため、硬質発泡ウレタンフォーム（日清紡：エアライトフォーム）を用いて剥ぎ取り、一旦外し、仮保管した。続いて切り取り範囲を削り出しが、石材の崩落防止のため石垣前面を硬質発泡ウレタンフォームで固定した。ウレタンフォームは直に石材に付着すると後のクリーニングが困難なので、離型剤として蟻状の合成樹脂（三洋化成：PEG #4000S）を湯煎して溶かしたもの表面に塗布した。また、吊り上げ時などの衝撃で石材が動いても原位置に戻せるよう、石材表面にパテ状エポキシ系合成樹脂（コニシ：Kモルタル）を用いた太柄（だぼ）を設置して型持とした。

切り取り範囲の削り出しを終えると、四周と上面をウレタンフォームで包み込んで行く。続いて地面と切り取り下面の切り離し作業である。切り離しには石垣の下部土壤にトンネルを掘削する必要があるが、当該地はベースとなる土層が主として径1～2cm大の礫層であるため非常に崩れやすい。そのため作業には細心の注意を要した。掘削にはエンジン式の油圧横掘りオーガーを使用した。トンネルは石垣面に対し直交方向で、長さは約1.5mである。掘削開始直後、やはり土壤が相当崩れやすい事が判明したため、前後両方から2回に分けて掘削することとした。片側から中央付近まで掘り進めたところでトンネルに素早くウレタンフォームを充填し、反対側から残りを掘削、ウレタンフォームを充填した。この作業を繰り返し、計7本のトンネルを掘削した。この時点で石垣は地面から切り離されたことになるが、ウレタンフォームだけでは強度不足のため、再度トンネルを開けて太さ100mmのH鋼を4本挿入した。さらに周囲に木材を組み付けて補強とし、全体をウレタンフォームで包み込んだところで、梱包を完了した。



fig.325 搬送作業



fig.326 石垣裏面補強作業



fig.327 支持台設置作業



fig.328 細部クリーニング作業

ここでラフターカークレーンを用いて吊り上げ、接地面から切り離した。さらに石垣前面が下を向くように90°反転し、裏込め土壌の除去作業を実施した。なお、吊り上げ時に重量を計測したところ、約4.5 t を測り、当初の見積よりは軽量であることが判明したものの、目標とする2 t にはまだかなりの軽量化が必要であった。反転した切り取りは背面のウレタンフォームを開梱し、表からは見えない部分の裏込め石と土壌を除去した。さらに軽量化を図るために、石材そのものを切削する方法を検討した。切削の手法としては、鑿とハンマーで打ち欠いて行く方法や、石材を一旦取り外して石材加工業者等に委託して切断加工を施し、再び原位置に戻す方法なども想定された。結果、作業効率や費用などを考慮して、仕上げ時に外面に露出しない部分を回転式のダイヤモンドカッターで切削していく方法を選択した。作業中は相当の粉塵が発生することが想定されたため、発掘調査現場場内で作業を続行した。作業に要した日数は9日間に及んだ。切削作業が完了し再度ウレタンフォームで梱包した石垣は、トラックに積み込んで埋蔵文化財センターに搬送した。この段階で計測した重量は1.8 t で、最終的に約2.7 t の大幅な軽量化を実現できることになった。

埋蔵文化財センターに搬入された切り取りはその後、室内で作業を実施した。工程は、石材同士の固定→支持台の設置→石材および周囲の微調整となる。

石垣背面のウレタンフォームを開梱し石材同士の固定作業を開始した。石材の背面は軽量化のために切削したことから、凹凸が解消され平坦になっている。そこでそれぞれの石の背面に数箇所づつアンカーボルトを設置し、それらを鉄製アングルで連結した。まず各石材に下孔を穿孔し、アングルを仮組みしつつアンカーボルトをエポキシ系合成樹脂（アラルダイト：A E R 2400+H Y 837）で固定した。さらに全体に、ガラスクロスをエポキシ系合成樹脂で塗り込めたF R P層を4層施工した。そこに鉄製アングルを固定し、上からF R Pで被覆した。以上で石材の基礎的な固定作業は完了した。

次に石垣全体を支える支持台を設置した。石垣背面への固定にはアラルダイトA E Rとガラスクロスを用いている。また内部に発泡ウレタンフォームを充填し、石垣の重量を分散させて面的に支えるようにした。

その後、一旦取り置いていた裏込め石最上層の石材を原位置に設置し直し、石垣と構造そのものの施工は完了した。

周辺の微調整を施し、現在は埋蔵文化財センターにおいて展示している。なお、最終的に重量は1.98 t となった。



fig.329 完成後展示状況

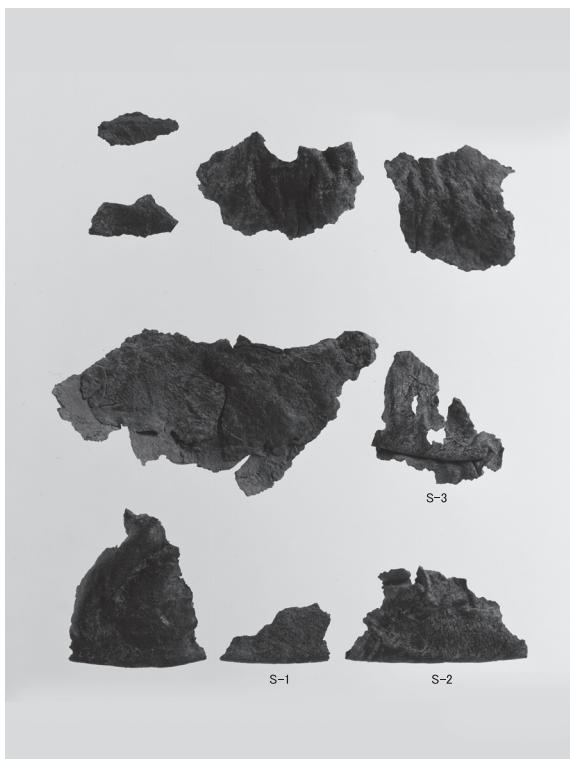
遺物の保存科学

祇園遺跡第14次調査：有機質遺物の調査

平安時代後期の井戸（SE02）から、11点の黒色塗膜断片（最大の破片で10cm×5cm）が出土した（fig.330）。いずれもモザイク状の不定形な断片であり、割れの方向や形状に顕著な傾向は見られない。それぞれの断片は厚さ0.6～0.9mmで、硬く脆い。表面は半光沢を持つ黒色で、絡み合った纖維が樹脂層に被覆され、表面に微細な凹凸を形成する（fig.331・332）。断面の観察では、褐色の層を挟んで上下に黒色の層が存在していた（fig.333）。併せて赤外線カメラによる調査も行なったが、墨痕等は確認できなかった。

実体顕微鏡観察によれば、纖維の方向は凡そ一定方向なもの、布帛のような規則的な織りではなく、不織纖維であることがわかった。纖維は黒色樹脂によって凹凸を残す程度に被覆されており、長いものでは1cm以上を測る。纖維方向に凡その傾向があることから、和紙であれば「流し漉き法」により製作された可能性が示唆される（fig.334・335）。

小片を採取し樹脂包埋したもので薄層サンプルを作成、透過光による顕微鏡観察を行なった。結果、基材の上には3層の樹脂状物質が比較的均一に存在することが確認でき、漆塗膜と想定された。fig.336は上が外面、下が内面となる、厚さ約0.5～0.6mmの塗膜層の横断面写真である。中心に厚さ約0.35mmの黒色層が横走し、上下をやや明るい褐色層がサンドしている。外側の褐色層は厚さ約0.08mm、内側の層は厚さ約0.1mmを測る。状況的には黒漆と考えられる黒色層を、生漆と考えられる褐色層が上下から挟みこんでいることが判明した（fig.337）。



上) fig.330 出土黒色塗膜片

右上) fig.331 S-1外面マクロ写真（3倍）

右下) fig.332 S-2外面マクロ写真（3倍）



纖維については、本体が腐食して滅失していたため、樹脂層に残されたネガティブ像として断面形を観察した。fig.338は外面の褐色層表層の断面である。白く抜けた纖維の断面形は、円～楕円形を呈すると捉えられた。観察できた約40個の纖維断面の短径を計測すると、平均値が約 $12\mu\text{m}$ であった。これは麻・絹・楮・三桠・雁皮・竹・稻藁など、古来使用されてきた纖維の単纖維と比較して妥当なスケールである。断面形が円～楕円形で、纖維長が1cmを超える和紙原料には麻・楮などがある。なお表面観察では、精製された麻に特徴的である「撫れ」は見られなかった。あくまでもネガティブ像観察のため確実とは言えないものの、状況からは楮とされる一群であった可能性が読み取れる。

以上をまとめると、本遺物は「黒漆と生漆が塗られた和紙製品」と考えられる。平安時代後期頃の和紙に漆を施した製品としては、鳥帽子など服飾品や、膳・椀といった食膳具などが挙げられる。また、二次的に漆が付着したものとしては、漆容器の蓋などが知られる。今回の出土品は断片のみであり、実際の器物としてどのようなものであったか詳細はわからない。しかし塗膜の均質さから見ても、和紙を基材とし、故意に漆が塗られた製品として大過はないと言える。

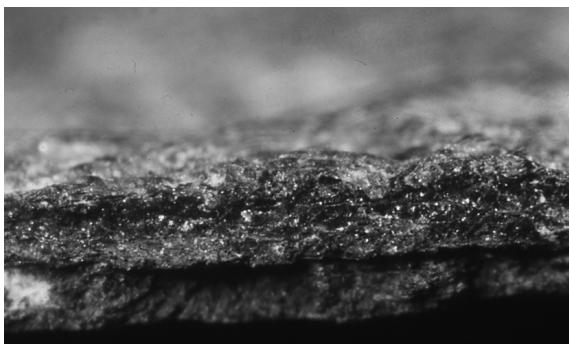


fig.333 S-2破断部分実体鏡写真（24倍）

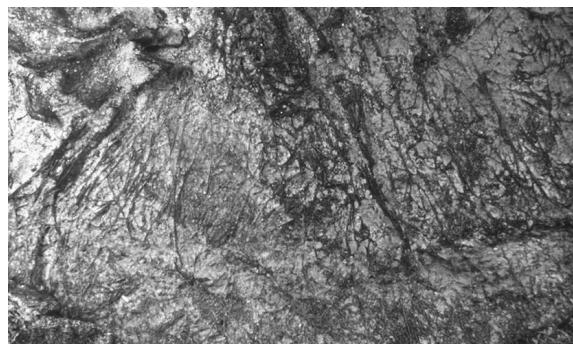


fig.334 S-2内面実体鏡写真（5倍）

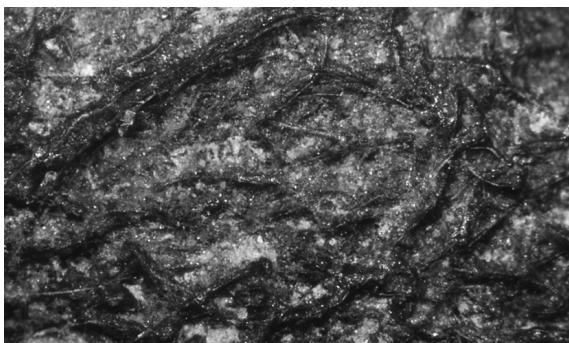


fig.335 S-1纖維混入状況実体鏡写真（6倍）



fig.336 S-2断面顕微鏡写真（透過光・50倍）

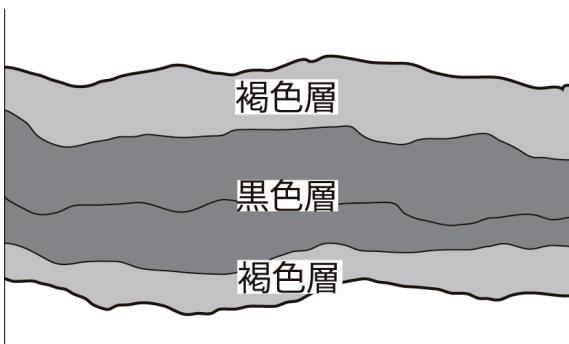


fig.337 同右上 模式図

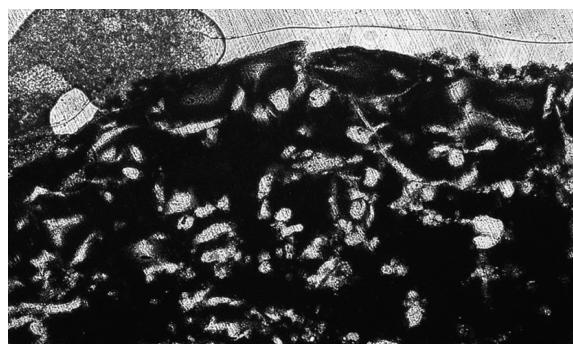


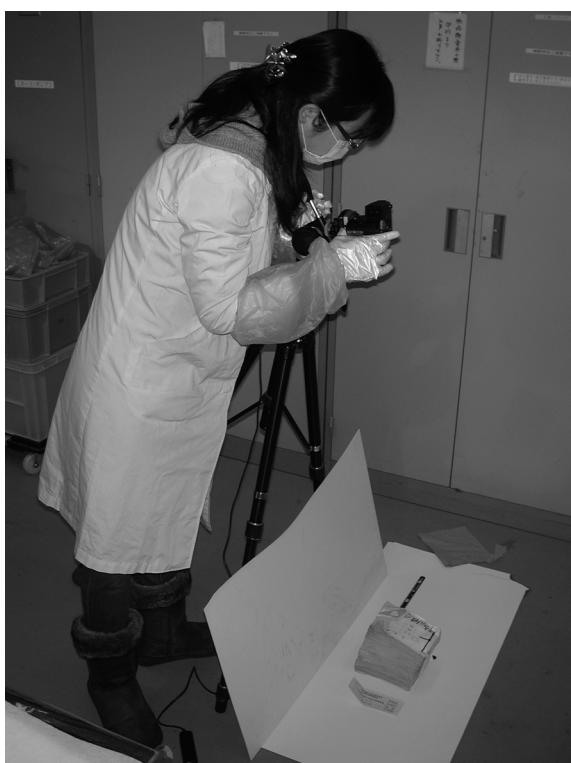
fig.338 S-3断面顕微鏡写真（透過光・100倍）

東日本大震災被災文書：紙製資料の保存

平成23年度に引き続き、東日本大震災において水損した文献資料について、保存科学処置を実施した。今年度処置を実施した資料は、平成24年5月18日に埋蔵文化財センターに搬入され、冷凍庫にて仮保管していた東北大学所蔵の文献類132点で、洋紙洋綴じの比較的新しい書籍類である。

資料の現状であるが、形状は多少波打ってはいるものの比較的原状を保っており、水分も少ないように見受けられた。カビについては肉眼での観察にとどまるが、表紙に樹脂コートがされているものにはほとんど見られないものの、コートのない資料には黒色・白色・緑色といったカビが発生していた。処置前のため、書籍内部については一部を確認したのみであるが、カビは見られなかった。保存処置としては前回同様、乾燥作業のみ行なうこととし、クリーニングや展開作業はせずに返送する方針となった。

まずは処置前の記録として写真撮影と重量計測を行なった。結果、処理前重量は141.4kgであった。これらを2回に分けて真空凍結乾燥機による処置を施した。資料は各々が固着するのを防止するためレーヨン紙で包み、資料庫に入れて行く。その際、乾燥度の目安とするため、資料をバネ式の上皿自動秤に乗せ、資料庫扉の窓から見える位置に設置し、定期的に重量モニタリングを行なうこととした。モニタリングに供した資料は、秤の定格重量の制限から、1回目のサンプル①は4点分1970g、2回目のサンプル②は2点分2020gとした。



上) fig.339 処理前状況写真撮影作業

右上) fig.340 処理前重量測定作業

右下) fig.341 真空凍結乾燥作業



1回目は5月22日に予備凍結を開始。3日後の5月25日の庫内温度は約-40.8°Cに到達した。この時点で資料庫温度を0°Cに設定、真空引きを開始した。サンプル①は4日後の5月29日に1790gとなり、資料庫温度を10°Cに上昇させた。さらに9日後の6月3日に1750gとなり、8日後の6月12日まで変化が見られなかったため庫内温度を20度まで上げ、翌日の13日に資料庫より取り出した。2回目は、6月14日に予備凍結を開始、1回目とほぼ同様のプロセスを経て、20日後の7月4日に乾燥を終えた。

結果、総重量は約124.9kg、昇華した水分量は16.5kgとなった。なお、乾量基準水分率(昇華水分量／資料の乾燥重量×100)は最も低い資料で6.96%、最高のもので43.36%、平均値は13.15%であった。この数値は平成23年度に実施した事例とほぼ同じ状況である。作業後の所見としては、収縮や変形、乾燥不足などの問題はなく、良好な結果が得られた。

その後、恒温恒湿(21.5°C/55%RH)の収蔵庫に5日間暴露保管後、60%に調湿した調湿材(富士シリシア化学:アートソーブ)をハイバリアチューブ(三菱ガス化学:エスカル)に封入梱包し、返却した。

fig.342 真空凍結乾燥工程中の重量変化

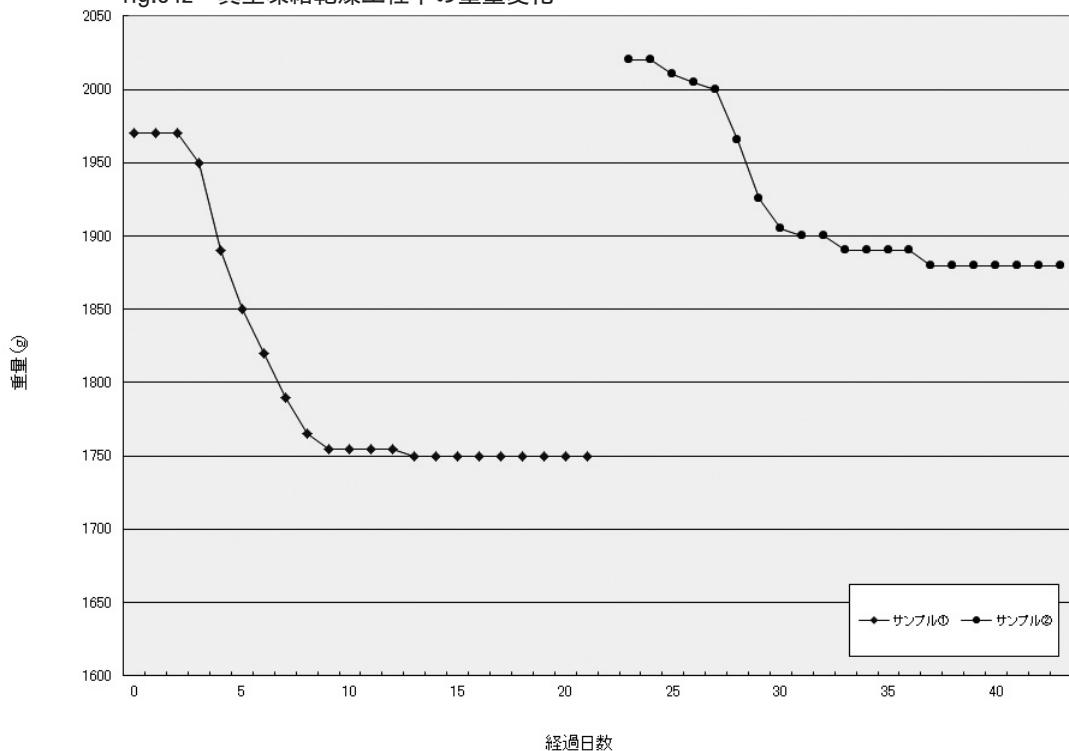


表16 被災文書類乾燥処理結果

凍結乾燥工程名	主な資料	搬入時重量	乾燥期間	乾燥後重量	乾量基準水分率(%)
東北大-1/2	昭和以降書籍類	73.3kg	2012/5/22～6/13 (23日間)	63.9kg	7.5～43.4 (平均値14.4)
東北大-2/2	昭和以降書籍類	68.1kg	2012/6/14～7/4 (21日間)	61.0kg	7.0～18.1 (平均値11.8)

表17 平成24年度出土保存科学関連遺物一覧

	遺跡名	次数	主な出土遺物	点数
金属製品	深江北町	14	銅煙管、鉄製品	2
	御影郷古酒蔵群	5	鉄錘、船釘、銅錢	55
	住吉宮町	50	鉄釘、鉄塊	63
	花隈城跡	5	寛永通宝	1
	下山手	6	鉄刀子、鉄釘、鉱滓	23
	日暮	37	鉄製品	1
	兵庫津	57	鉄包丁、鉄鍔先、船釘、銅煙管、銅小柄、銅錢	多数
	楠・荒田町	53	和鏡、鉄刀子、鉄釘	14
	楠・荒田町	54	鉄釘、鉄錢、銅錢	25
	祇園	16	鉄釘、鉱滓	96
	雪御所	2	鉄釘、銅煙管	6
	尼崎学園古墳群	1	鉄刀子、鉄釘、銅錢、鉱滓	13
	大橋町東	3	鉄釘	1
	大橋町東	4-2	鉄釘	1
	戎町	69	鉱滓	3
	古川町	2	鉄釘、鉱滓	47
	大田町	17	鉄製品	1
	新方	51	鉄板	1
	南別府	5	鉄製品	1
木製品	深江北町	14	漆容器、木簡、馬形、舟形、鎌形	516
	御影郷古酒蔵群	5	版木、板、蓋	13
	兵庫津	57	漆容器、曲物、鏡箱、櫛、傘部品、下駄、船材	多数
動物遺存体	深江北町	15	反芻類臼歯	1
	兵庫津	57	バイゴマ、横櫛、櫛払、鞋、擬餌針、獸骨、魚骨、貝	多数
	楠・荒田町	53	人骨	1
	雪御所	3	貝	1
	新方	51	ウシ臼歯、ウマ臼歯	7
その他	御影郷古酒蔵群	5	文書類	20~

表18 平成24年度自然科学分析一覧

遺跡名	次数	分析項目	資料名	点数
祇園	14	樹種同定(生材)	下駄	1
		樹種同定(炭化材)	建築材	10
祇園	15	樹種同定(炭化材)	建築材	4
出合	45	樹種同定(生材)	柱根、曲物ほか	6
出合	46	樹種同定(生材)	鍬、槽、織機、木棺ほか	26
		樹種同定(炭化材)	建築材	27

平成24年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成27年3月 印刷

平成27年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078（322）5799

印刷 株式会社 興文社

TEL 078（924）9800

神戸市広報印刷物登録 平成26年度 第270号 (広報印刷物規格 A-5類)